

石田（2）遺跡

— 県道青森五所川原線道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2023年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和3年度に県道青森五所川原線道路改築事業予定地内に所在する石田(2)遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、主に平安時代の遺構・遺物を確認しました。遺構は竪穴建物跡・井戸跡・土坑・溝跡等を検出し、遺物は土師器・須恵器・木製品・石器・鉄製品等が出土しました。中でも平安時代の井戸跡では、丸太をくり抜いた内枠と、それを囲むように縦板を組み合わせた井戸枠が良好な状態で検出でき、県内初事例として注目されます。また井戸跡から出土した木製品のうち、未炭化の櫛は古代では県内初事例であり、こちらも極めて貴重な成果となりました。

本報告書は、それらの調査成果をまとめたものです。この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました五所川原市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和5年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 和田和男

例 言・凡 例

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による県道青森五所川原線道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和3年度に発掘調査を実施した、五所川原市石田(2)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は1,500m²である。
- 2 石田(2)遺跡の所在地は、青森県五所川原市大字飯詰字石田地内、青森県遺跡番号は205179である。
- 3 発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	令和3年7月6日～令和3年10月29日
整理・報告書作成期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日
- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、齋藤岳・浅田智晴総括主幹、工藤忍文化財保護主幹、藤田祐・中門亮太文化財保護主査が担当した。
- 6 発掘調査の成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合においては本書が優先する。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

基準点測量	株式会社エステープラン
遺構測量	
木製品三次元画像処理実測図等作成	株式会社知立造園 CUBIC 事業部青森営業所
空中写真撮影・遺物写真撮影	有限会社無限
微細遺物抽出	第一合成株式会社
木製品樹種同定・保存処理	株式会社吉田生物研究所
放射性炭素年代測定、種実・貝類同定、昆虫同定	株式会社パレオ・ラボ
遺物写真切り抜き・画像回転	青森オフセット印刷株式会社
- 8 石器等の石質鑑定及び地形・地質の原稿執筆は、根本直樹調査員に依頼した。
- 9 火山灰の分析・原稿執筆は、弘前大学大学院理工学研究科講師、佐々木実氏に依頼した。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 11 発掘調査及び整理、報告書作成に際し、下記の機関及び方々からご協力、ご指導を得た（敬称略、順不同）。五所川原市教育委員会、小岩直人、片岡太郎、江戸邦之、榊原滋高、半澤紀、木村淳一、工藤清泰
- 12 本書に掲載した遺跡位置図等は、国土地理院発行の「電子地形図25000」(140.49-40.83-A2-y-20221123-151728-0000)を利用した。
- 13 測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2011)に基づく平面直角座標第X系による。
- 14 挿図中の方位は、世界測地系(JGD2011)の座標北を示している。
- 15 実測図等の図版の縮尺は挿図毎にスケール等を示した。






16 遺構については、検出順にその種類を示す略号と算用数字の通し番号を付した。遺構に使用した略号は次のとおりである。SI- 竪穴建物跡 SE- 井戸跡 SK- 土坑 SD- 溝跡 SP- 遺構外柱穴 SX- 性格不明遺構 Pit- 遺構内柱穴

17 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。

18 遺構実測図の縮尺は、原則として1/60に統一し、挿図毎にスケールを示した。また4mグリッド交点杭と杭名を記載したが、図上に4mグリッド交点杭が掲載されない場合には、近隣の4mグリッド杭から任意に計測した点を掲載した(例:『IH-34から北に2m、東に1m』→IH-34グリッド交点杭から、北に2m、東に1mの点であることを示す)。

19 基本土層の層序番号にはローマ数字を、遺構内堆積土の層序番号には算用数字を使用した。

20 本書に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。

	: 被熱範囲・木製品のつぶれ・鉤状木製品の光沢範囲・石器磨り範囲		
	: 羽口欠け範囲		: 柱痕跡・井戸跡内枠の黒色範囲
	: 強い被熱範囲・火瘃痕		: 炭化物範囲

21 土層の色調表記等には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄)を使用した。

22 遺物は、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、次のとおりである。P- 土器 S- 石器 C- 炭化物 W- 木製品

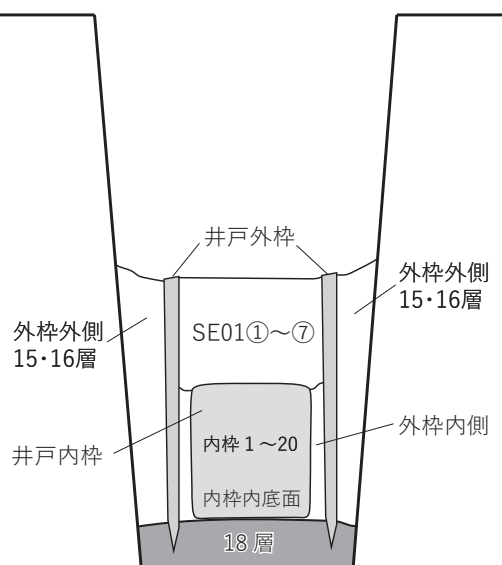
23 遺物実測図には、挿図毎に1から通し番号を付した。

24 遺物実測図の縮尺は、原則として剥片石器・製品類は1/2、礫石器の一部は1/5、木製品は規模により1/1・1/4・1/8・1/10・1/16、その他は1/3に統一し、挿図毎にスケール等を示した。

25 土器観察表内の()内計測値は推定値を表す。他遺物観察表で用いた()は残存値を表す。

26 遺物写真の各番号は、遺物実測図と共通番号を付した(例: 図5-3は『5-3』と表記)。また、縮尺は遺物図版に準拠した。写真図版のみ提示のものは写真図版番号と通し番号を付した。

27 井戸跡 SE01 の土壌サンプルは、以下の模式図に記載した名称を付して採取した。



目次

序	
例言・凡例	
目次・挿図目次・表目次・写真図版目次	
第1章 調査概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査及び整理体制	3
第4節 発掘・整理作業経過	4
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第2節 遺跡周辺の地形・地質	7
第3章 検出遺構と出土遺物	
第1節 概要	17
第2節 縄文時代	17
第3節 平安時代	18
第4節 中世以降	83
第4章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定 1	84
第2節 放射性炭素年代測定 2	93
第3節 放射性炭素年代測定 3	96
第4節 火山灰分析	102
第5節 木製品の樹種同定	105
第6節 大型植物遺体同定	120
第7節 動物遺体同定	133
第8節 昆虫化石同定と古環境	134
第5章 総括	
第1節 縄文時代	151
第2節 平安時代	153
第3節 中世以降	158
引用参考文献	159
観察表	160
写真図版	169
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

図1	石田(2)遺跡周辺の遺跡位置図	8	図30	竪穴建物跡出土遺物 13	46
図2	石田(2)遺跡周辺の地形分類図	9	図31	竪穴建物跡出土遺物 14	47
図3	石田(2)遺跡周辺の水系図	10	図32	井戸跡	51
図4	石田(2)遺跡周辺の地質図	11	図33	井戸跡出土遺物 1	52
図5	石田(2)遺跡の土層断面	15	図34	井戸跡出土遺物 2	53
図6	遺構配置図	16	図35	井戸跡出土遺物 3	54
図7	縄文時代の出土遺物	19	図36	井戸跡出土遺物 4	55
図8	竪穴建物跡 1	21	図37	井戸跡出土遺物 5	56
図9	竪穴建物跡 2	22	図38	井戸跡出土遺物 6	57
図10	竪穴建物跡 3	24	図39	井戸跡出土遺物 7	58
図11	竪穴建物跡 4	25	図40	井戸跡出土遺物 8	59
図12	竪穴建物跡 5	28	図41	井戸跡出土遺物 9	60
図13	竪穴建物跡 6	29	図42	井戸跡出土遺物 10	61
図14	竪穴建物跡 7	30	図43	井戸跡出土遺物 11	62
図15	竪穴建物跡 8	31	図44	井戸跡出土遺物 12	63
図16	竪穴建物跡 9	32	図45	井戸跡出土遺物 13	64
図17	竪穴建物跡 10	33	図46	土坑 1	69
図18	竪穴建物跡出土遺物 1	34	図47	土坑 2	70
図19	竪穴建物跡出土遺物 2	35	図48	溝跡 1	72
図20	竪穴建物跡出土遺物 3	36	図49	溝跡 2・性格不明遺構	73
図21	竪穴建物跡出土遺物 4	37	図50	土坑出土遺物 1	76
図22	竪穴建物跡出土遺物 5	38	図51	土坑・溝跡・柱穴出土遺物	77
図23	竪穴建物跡出土遺物 6	39	図52	遺構外出土遺物 1	78
図24	竪穴建物跡出土遺物 7	40	図53	遺構外出土遺物 2	79
図25	竪穴建物跡出土遺物 8	41	図54	遺構外出土遺物 3	80
図26	竪穴建物跡出土遺物 9	42	図55	遺構外出土遺物 4	81
図27	竪穴建物跡出土遺物 10	43	図56	鉄製品・鉄生産関連遺物	82
図28	竪穴建物跡出土遺物 11	44	図57	石田(1)遺跡 遺構配置図	158
図29	竪穴建物跡出土遺物 12	45			

表目次

表1	石田(2)遺跡周辺の遺跡一覧	7	表7	石器観察表	167
表2	井戸跡サンプル取上番号	48	表8	鉄製品観察表	168
表3	遺構間接合	154	表9	羽口観察表	168
表4	縄文土器観察表	160	表10	鉄生産関連遺物観察表	168
表5	平安時代土器観察表	160	表11	陶磁器観察表	168
表6	木製品観察表	165	表12	銭貨観察表	168

写真図版目次

写真図版1	169	写真図版22	190
調査区遠景		第1号井戸跡 外枠上部土層断面・検出・内枠検出・側面	
写真図版2	170	写真図版23	191
出土遺物集合・第1号井戸跡 井戸外枠(縦板)		第1号井戸跡 内枠側面上部・側面下部・堆積土土層断面・	
写真図版3	171	内側完掘・掘方完掘・土層断面	
第1号井戸跡 井戸内枠(保存処理後)		写真図版24	192
写真図版4	172	第1号土坑 完掘・土層断面・遺物出土・第2号土坑 完掘・	
国土地理院空中写真		第3号土坑 完掘・第4号土坑 完掘・土層断面・第5号土坑・	
写真図版5	173	第1・2号性格不明遺構 完掘・土層断面	
1区 III層調査終了・基本土層断面		写真図版25	193
2区 III層調査終了・3区 III層調査終了		第6号土坑 完掘・土層断面・第7号土坑 完掘・第8号土坑	
4区 基本土層断面・東側III a層調査終了		完掘・遺物出土・土層断面・第9号土坑 完掘・土層断面	
写真図版6	174	写真図版26	194
1区 縄文土器出土・縄文土器出土地点土層断面		第10号土坑 完掘・土層断面・第11号土坑 完掘・土層断面・	
4区 縄文土器出土		第12号土坑 完掘・土層断面・第13号土坑 完掘・土層断面	
写真図版7	175	写真図版27	195
第1号竪穴建物跡 検出・貼床断面・Pit01土層断面・Pit03		第14号土坑 完掘・土層断面・第15号土坑 完掘・土層断面・	
土層断面・焼土検出・炭化物検出		第16号土坑 完掘・土層断面・第17号土坑 完掘・土層断面・	
写真図版8	176	第18号土坑 土層断面・第19号土坑 完掘・土層断面	
第2号竪穴建物跡 完掘・土層断面・被熱範囲検出・被熱範囲		写真図版28	196
断面		第1号・第5号溝跡 完掘・土層断面・第2号溝跡 完掘・	
写真図版9	177	第3号溝跡 完掘・土層断面	
第3号竪穴建物跡 完掘・土層断面・掘方・遺物出土		写真図版29	197
写真図版10	178	第4号溝跡 完掘・土層断面・第6号溝跡 完掘・土層断面・	
第3号竪穴建物跡 遺物出土(土層観察用畦部分)・		第7号溝跡 完掘	
カマド完掘・カマド土層断面・カマド火床面検出・火床面土層		写真図版30	198
断面		第8号溝跡 完掘・土層断面A-A'・土層断面B-B'	
写真図版11	179	第9号溝跡 完掘・土層断面・第10号溝跡 完掘・土層断面	
第4号・第5号竪穴建物跡 完掘・土層断面・掘方完掘・		写真図版31	199
第4号竪穴建物跡 床下工具痕検出		第3号竪穴建物跡 出土遺物-1	
写真図版12	180	写真図版32	200
第4号竪穴建物跡 Pit01・Pit06土層断面・床面炭化物検出・		第3号竪穴建物跡 出土遺物-2	
床面土器出土・第5号竪穴建物跡 Pit08完掘・Pit10・Pit11		写真図版33	201
土層断面・壁溝土層断面		第3号竪穴建物跡 出土遺物-3	
写真図版13	181	写真図版34	202
第7号竪穴建物跡 完掘・土層断面・第7号竪穴建物跡(新)		第4号竪穴建物跡 出土遺物・第7号竪穴建物跡 出土遺物-1	
カマド土層断面・カマド完掘		写真図版35	203
写真図版14	182	第7号竪穴建物跡 出土遺物-2・第8号竪穴建物跡 出土遺物	
第7号竪穴建物跡(新) カマド遺物出土・火床土層断面・煙道		写真図版36	204
土層断面・Pit02・Pit04・Pit09土層断面・第7号竪穴建物跡(旧)		第10号竪穴建物跡 出土遺物	
カマド火床土層断面・第7号竪穴建物跡 Pit07・Pit08土層断面		写真図版37	205
写真図版15	183	第1号井戸跡・第1号土坑・第2号土坑・第4号土坑・第7号	
第7号竪穴建物跡(旧) Pit03・Pit15・Pit18土層断面・第7号		土坑・第8号土坑・第13号土坑・第17号土坑・第1号溝跡・	
竪穴建物跡(新) SK01土層断面・掘立柱建物部分空中写真撮影		第4号溝跡・第5号溝跡・第42号柱穴・第59号柱穴 出土遺物	
写真図版16	184	写真図版38	206
第8号竪穴建物跡 完掘・土層断面・カマド火床面検出・土層		遺構外出土土師器・須恵器	
断面		写真図版39	207
写真図版17	185	陶磁器・縄文土器・石器・鉄製品・鉄生産関連遺物・古銭	
第8号竪穴建物跡 遺物出土・SK01完掘・土層断面・掘方完掘・		写真図版40	208
Pit01土層断面		第1号井戸跡 井戸内枠(保存処理前)	
写真図版18	186	写真図版41	209
第10号竪穴建物跡 完掘・土層断面・掘方土層断面		第1号井戸跡 井戸外枠(縦板-1)	
写真図版19	187	写真図版42	210
第10号竪穴建物跡 カマド完掘・掘方完掘・上部土層断面・		第1号井戸跡 井戸外枠(縦板-2)	
下部土層断面・遺物出土・壁溝土層断面		写真図版43	211
写真図版20	188	第1号井戸跡 井戸外枠(縦板-3)・木製品-1	
第1号井戸跡 内枠出土状況・外枠出土状況		写真図版44	212
写真図版21	189	第1号井戸跡 木製品-2	
第1号井戸跡 土層断面・検出・作業状況・外枠出土・木製品出土			

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経過

県道青森五所川原線道路改築事業予定地内の埋蔵文化財に関する取り扱いについては、平成25年度から青森県教育庁文化財保護課(以下「文化財保護課」と青森県県土整備部道路課及び西北地域県民局地域整備部が、継続的な協議及び現地確認を行ってきた。当該事業予定地内の用地買収及び上物撤去の完了した地点について、令和元年11月に文化財保護課が試掘調査を実施した。

その結果、トレンチから遺構と遺物が確認されたことにより、石田(2)遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として新規登録が行われ、本発掘調査の必要範囲が決定した(青森県教育委員会2020)。調査面積は1,500㎡である。これを受け、令和2年9月に西北地域県民局地域整備部と文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センターによる現地協議が行われ、令和3年度に青森県埋蔵文化財調査センターが本発掘調査を実施することとなった。

石田(2)遺跡に係る土木工事等のための発掘に関する通知書は、令和3年2月に西北地域県民局長から提出され、現状保存が困難であることから、同年2月に青森県教育委員会教育長が工事着手前の本発掘調査(記録保存調査)を通知している(令和3年2月24日付け青教文第1287号)。(齋藤)

第2節 調査の方法

1 発掘作業の方法

令和元年度に行われた文化財保護課による試掘調査の結果、古代の竪穴建物跡や遺物が確認された(青森県教育委員会2020)。試掘結果を踏まえ古代の遺構調査に重点を置き、集落の時期・構造等を把握できるよう発掘調査を進めた。

[測量基準点・水準点・グリッド設定] 遺構測量に用いた測量基準点及び水準原点の設置は外部委託し、調査区内に4級基準点を6点打設した。基準点からの測量に支障が生じた場合は、調査区内に設置した任意点に座標を移動して用いた。調査区が南北に長く幅が狭いため、農耕車用の進入路を区切りとして1区から4区を設定し(図6)、現場段階ではグリッドを設定しなかった。整理段階で石田(2)遺跡の調査範囲を網羅するように、世界測地系による国土座標値を基準として4m×4mにグリッドを設定した。原点A-1は平面直角座標第X系のX=92,360、Y=-28,920とした。各グリッドは南から北方向にローマ数字(I~III)とアルファベット(A~Y)を、西から東方向に算用数字を1から付け、南西隅の組み合わせで呼称した。

[基本土層] 基本土層は試掘調査の結果を踏まえ、調査区の土層堆積状況を把握できるように、上位から層順にI層、II層とローマ数字を付けた。細分が必要な場合は小文字のアルファベットを付けた。

[表土等の調査] 調査開始後、試掘調査の結果を補うため、各調査区に重機及び人力でトレンチを設定し、基本土層と掘削深度を確認した。主に耕作土であるI層の除去には、重機を用いて掘削の省力化を図るよう努めた。出土遺物は適宜、調査区・層位ごとに取り上げを行った。

[遺構の調査] 遺構の検出は主に基本土層のIII層上面で行ったが、調査区により土の堆積状況が異なるため、慎重に作業を進めた。検出遺構には原則として、確認順に種類別の略号と番号による名称を

付けて精査した。土層観察用畦は、遺構の形態や大きさ等に応じ、基本的に竪穴建物跡は4分割、土坑や柱穴は2分割となるよう設定した。遺構内の各堆積土層には算用数字を付け、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図はトータルステーションによる測量で得た座標データを基に、株式会社 CUBIC 製「遺構実測支援システム」を用いて作図した。測量の一部は外部委託を行った。遺構堆積土層断面図については、一部で簡易遣り方測量を用い、縮尺1/20の実測図を作成した。遺構内から出土した遺物は基本的に層位毎に取り上げたが、出土状況が良好な場合は微細図や出土位置の3次元データを記録した。

[写真撮影] 写真撮影は原則として35mmモノクロームフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、および約2,620万画素のデジタルカメラ、1,605万画素のコンパクトデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。なお、調査区の遠景等は外部委託でドローンにより撮影した。

2 整理・報告書作成作業の方法

[図面類の整理] 遺構は、株式会社 CUBIC 製「遺構実測支援システム」で作成した平面図・堆積土層断面図または簡易遣り方実測で作成した堆積土層断面図の調整を行った。図面の測量点等については、エクセルファイル(.xlsx形式及び.csv形式)でHDD及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

[写真類の整理] 35mmモノクロームフィルムと35mmカラーリバーサルフィルムは撮影日順に整理してネガアルバムに収納した。デジタル写真は撮影内容を示すファイル名に変更した上で遺構順に整理し、HDD及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

[遺物の洗浄・注記と接合・復元・保存処理] 遺物の注記は、調査年度、遺跡名、遺構名、出土層位、取り上げ番号を略記した。直接注記できないものは、収納した袋に記載した。土器の接合・復元に際し、遺存状況が悪く胎土が脆いものについては、バインダー No.17(土器強化液剤)で強化処理を施した。木製品は遺物カードを添付し、長尺函や衣装ケース等で水漬けし、適宜水を交換し保管した。井戸内枠は表面の乾燥状況を朝夕に目視で観察し、水で濡らした布で覆いビニール袋をかけ保管した。木製品の保存処理は外部委託で行った。

[報告書掲載遺物の選別・観察・図化] 縄文土器や古代の土師器・須恵器については、時期・型式毎に分類した上で、遺構構築時期を示す資料、時期・型式の特徴を良く表す復元資料を主として選別した。その他の遺物については、器種毎に分類した上で、遺構に伴って出土した資料、遺存状態が良い代表的な資料を主として選別した。井戸内枠は3次元画像処理・実測図等の作成委託を行った。資料は表面を十分に観察した上で、各遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化し観察表を作成した。

[遺物の写真撮影] 写真撮影は外部委託で実施し、質感や製作技法等を表現するよう留意して撮影した。遺物写真の切り抜きは外部委託で行った。

[自然科学分析] 木製品の樹種同定を外部委託した。また、遺構の年代や遺物の詳細を調査するため、放射性炭素年代測定、および大型植物遺体・昆虫・種実・貝類の同定を外部委託した。また火山灰の分析は調査員に依頼して行った。これらの分析結果は第4章に掲載した。

[遺物のトレース・版下作成] 土器・石器等のトレースはアドビ株式会社製 Illustrator、株式会社 CUBIC 製「遺構くん」・「トレースくん」・「遺物くん」を用いた。図版の版下の作成は、株式会社 CUBIC 製「遺構くん」、アドビ株式会社製 Illustrator、InDesign を用いた。

第3節 調査及び整理体制

発掘調査体制

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	葛西 浩一	(令和4年3月 定年退職)
総務 GM	油布 恵美	
調査第二 GM	齋藤 岳	
文化財保護主幹	工藤 忍	(発掘調査担当者)
文化財保護主幹	岡本 洋	(発掘調査担当者)
文化財保護主幹	笹森 一朗	(発掘調査担当者)
文化財保護主査	藤原 有希	(発掘調査担当者)
文化財保護主事	藤田 祐	(発掘調査担当者 現文化財保護主査)

専門的事項に関する指導・助言

調査員 齋藤 淳	中泊町博物館 館長 (考古学)
〃 宇部 則保	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 発掘専門員 (考古学)
〃 梅田 浩司	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授 (地質学)
〃 根本 直樹	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 (地質学)

整理・報告書作成体制

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	和田 和男
総務 GM	油布 恵美
調査第二 GM	齋藤 岳
総括主幹	浅田 智晴 (報告書作成担当者)
文化財保護主幹	工藤 忍 (報告書作成担当者)
文化財保護主査	中門 亮太 (報告書作成担当者)
文化財保護主査	藤田 祐 (報告書作成担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員 齋藤 淳	中泊町博物館館長 (考古学)
〃 宇部 則保	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館発掘専門員 (考古学)
〃 根本 直樹	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 (地質学)

第4節 発掘・整理作業経過

1 発掘作業の経過

[令和3年度]

7月 6日に調査器材を搬入して調査を開始した。環境整備を行った後、1区から4区に基本土層確認用のトレンチを設置し、重機で表土を掘削した。4区から平安時代の竪穴建物跡と土坑を検出した。下旬に調査区東側に隣接する水田の中干しが終了し、水が田に引き入れられたことにより、1区南側と2区のトレンチは常時水が流入する状態となった。流入する水により調査区壁面が崩落するのを防止するため、1区東側に排水用のサブトレンチを設置した。このサブトレンチ壁面で平安時代の竪穴建物跡を確認した。試掘調査で地山と判断された土層の下から遺構が見つかったことから、Ⅲ層までの堆積を重機で掘削した。その後、竪穴建物跡4棟、土坑5基、溝跡5条を検出した。また、流入する水を排水するための溝を重機で掘削した。

8月 1区の遺構精査を継続して進めた。1区で井戸跡を検出した。

9月 2区・3区の精査を開始した。1～4区で竪穴建物跡5棟、土坑14基、溝跡5条を確認した。29日にドローンによる空中写真撮影を実施した。同日、齋藤淳、宇部則保調査員による現地指導を受けた。

10月 井戸跡を確認した。地表面から約2mを掘削したものの底面が確認できなかったため、西側を重機で大きく箱形に掘り下げ精査を継続した。掘削中に板状の木製品が出土し、さらに掘り下げると遺構内の湧水量が増加し、腐食せずに残存した木製品が出土した。堆積土の記録が困難であったため、10cmずつ掘り下げた土を土嚢袋に全量回収した。その後、板材と丸太のくりぬき材による井戸枠を検出した。井戸跡からは櫛や齋串、箸等の木製品が出土した。15日に根本直樹調査員、21日に梅田浩司調査員による現地指導を受けた。井戸跡で確認した井戸枠と櫛や齋串等の木製品は県内でも貴重な発見であると判断し、20日に現地で報道各社への公開を行った。なお新型コロナウイルスの感染拡大予防の観点から現地説明会は開催しなかったが、遺跡協を通りかかった方へは適宜対応をした。28日に井戸内枠の取り上げを行い、センターに搬入した。器材等は翌日に撤収し調査を終了した。

11月 重機による調査区の埋め戻しを行い、11月末に完了した。井戸枠については洗浄を行った。

12月 井戸枠等木製品の一部の写真撮影を委託し行った。その後、井戸外枠の保存処理と樹種同定、井戸内枠の実測を委託し行った。

2 整理・報告書作成作業の経過

報告書作成作業は令和4年4月1日から令和5年3月31日までの期間で行った。整理・報告書作成作業の経過は、以下のとおりである。

[令和4年度]

4～6月 土器・石器類は調査区ごとの仕分けと数量計測を行った後、整理作業を開始した。胎土の脆い土器については、土器強化液剤で強化処理を施した後、接合を行った。接合後、土器は順次復元・実測作業へと移行した。剥片石器の実測を開始した。井戸内枠の保存処理と樹種同定を外部委託で行った。また微細遺物抽出を外部委託で行った。木製品は実測図の作成を開始し、年代

測定(器集成図ウィグルマッチング法)のサンプリングを外部委託で行った。根本直樹調査員へ地形・地質の原稿執筆依頼を行った。

7～8月 木製品の実測を行い、保存処理と樹種同定を外部委託した。出土炭化材の放射性炭素年代測定を外部委託した。礫石器の実測を開始した。鉄生産関連遺物の分類を行った。井戸跡から採取した土壌から確認した微細遺物の仕分けを開始し、8月末に終えた。

9月～10月 遺構図面の修正と図版作成、原稿執筆を開始した。木製品は9月末まで実測を行い、その後トレース作業へ移行した。仕分けをした微細遺物の同定分析等を外部委託で行った。

11月～2月 11月に土器と鉄生産関連遺物の写真撮影を外部委託で行った。11月末、隣接する石田(1)遺跡の資料調査を五所川原市教育委員会で行った。木製品のトレースが完了し、図版組を開始した。縄文土器や鉄生産関連遺物の実測・トレースを行った。原稿・版下が揃い次第、報告書の割付・編集作業を行った。12月に礫石器と木製品および集合写真の撮影を外部委託で行った。また、調査員に依頼し、石器類の石質鑑定を行った。礫石器、鉄生産関連遺物の実測・トレース終了後に版組を行った。遺物写真図版を作成し、12月に印刷業者を入札・選定し、契約事務を完了した。その後印刷業者へ原稿及び版下を入稿し、校正及び出土遺物・記録類の整理を行った。

3月15日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。

3月下旬 記録類、出土遺物等を整理して収納した。 (藤田)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

石田(2)遺跡は五所川原市役所から北西に約5km、飯詰川左岸の標高約24~26mの地点に立地する。現況は水田・畑地である。これらは不整形に区画され、遺跡周辺には素掘りによる複数の並列する溝跡、いわゆる多条並列灌漑水路(籠瀬 1978、齋藤 2015)が確認できる。本水路は津軽平野や青森平野の一部に確認されるもので独特な景観を形成している。写真図版4に遺跡周辺の土地利用の変遷を空撮写真で示した。飯詰川は水をめぐり土地利用だけでなく、遺跡北側に位置する味噌ヶ沢で明治44年(1911年)に菴ノ沢溜池の堤防が決壊した水害の記録があり、修復された現在の堤防上には当時の被害を記した石碑が残る。また本遺跡の西側にある道路は、飯詰川上流にあった飯詰貯木場と五所川原駅に隣接する五所川原貯木場を繋ぐ津軽森林鉄道の線路があった場所である。本道路を北へ進み、県道26号線(愛称 津軽あすなろライン)と合流し、東に進むと青森市油川に至る。

遺跡の所在する飯詰地区は、『津軽郡中名字』では「飯積」、また『飯詰組広田組絵図』では「飯詰」と記載され、南東には飯詰城遺跡が所在する。高楯城とも呼ばれる本遺跡は、標高56.7mの小高い場所にあり、地形測量図をもとにした縄張り配置や表面採集により陶磁器類が確認され、15~16世紀の城館跡とされる(五所川原市 1998)。現在、集落の中央を通る県道36号線は近世に下之切通りと呼ばれた浪岡から小泊に至る街道である。本地域は交通の要衝であるため街道筋に代官所(役所)が置かれ、町場が形成される中で津軽北部の経済的な拠点として発展してきた歴史がある。

現在、五所川原市には172カ所の遺跡が登録され、飯詰地区では13遺跡が確認されている。図1、表1に本遺跡を含む24遺跡を示した。上記の中でこれまでに発掘調査が行われた遺跡は3遺跡あり、時期不明であるがアスファルト塊が出土した縄文晩期の福泉遺跡(五所川原市教育委員会 1983)、平安時代の製鉄炉を検出した狐野(1)遺跡(五所川原市教育委員会 1979、1980)のほか、本遺跡の北東に隣接する縄文時代、古代から近世の複合遺跡とされる石田(1)遺跡がある。いずれも五所川原市教育委員会により調査が行われた。石田(1)遺跡は、標高33mの丘陵平坦面に立地し、本遺跡から約8m高い場所に位置する。過去3回にわたって調査が行われ、2・3次調査の報告書が刊行されている(五所川原市教育委員会1994、1995)。なお1次調査で出土した遺物及び表面採集した陶磁器類については3次調査報告書の表に記載されている。報告書の記載等から、2次調査は現いずみ小学校の体育館南側付近、3次調査は校庭南側で行われたと考えられる。確認された遺構は竪穴建物跡9棟、掘立柱建物跡3棟、井戸跡3基、土坑6基、溝跡2条である。竪穴建物のうち2棟は「平地式住居跡」と表記しているが、掘り込みの浅い縄文晩期の竪穴建物跡である可能性がある。また、楕円形を呈する2号も縄文後期の竪穴建物跡である可能性がある。一方、方形のプランをもつ竪穴建物跡は6棟あり、多くは西側に傾き、カマドは半地下式で南壁の中央西寄りに作られる。井戸跡は3基のうち1基が平安時代の竪穴建物跡を掘り込んでおり、中世に帰属すると考えられる。また、仮に3号とした掘立柱建物跡が隣接しており、軸方向をそろえた建物群が井戸とともに存在したことを示している。遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器、銭貨、キセルが出土している。以上から、石田(1)遺跡は、縄文時代及び古代から中世・近世に土地利用が見られる複合遺跡となっている。(藤田)

表1 石田(2)遺跡周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代													種別	備考
		縄文						弥生	古墳	古代	中世	近世				
		草	早	前	中	後	晩									
205001	長者森山遺跡									○	○		城館跡			
205027	沢田遺跡			○	○		○						散布地			
205028	長富遺跡			○	○								散布地			
205029	金山大溜池遺跡									○			散布地			
205030	福泉遺跡						●						散布地	市教委 1983		
205033	興隆(1)遺跡	○											散布地			
205034	尾花原(1)遺跡				○					○			散布地			
205036	味噌ヶ沢遺跡	○											散布地			
205037	飯詰城遺跡	○								○	○		散布地、城館跡			
205038	狐野(1)遺跡	○								●			集落跡	市教委 1979 市教委 1980		
205041	金山館遺跡									○	○		城館跡			
205044	石田(1)遺跡	○								●	○	○	集落跡	市教委 1994 市教委 1995		
205047	荒神林遺跡									○	○		散布地、城館跡			
205048	興隆(2)遺跡	○											散布地			
205049	興隆(3)遺跡			○									散布地			
205050	狐野(2)遺跡									○			散布地			
205052	五本松遺跡									○			散布地			
205085	尾花原(2)遺跡									○			散布地			
205086	尾花原(3)遺跡									○			散布地			
205087	尾花原(4)遺跡									○			散布地			
205089	影日沢遺跡									○			散布地			
205110	鎧石(1)遺跡					○	○						散布地			
205122	三ノ沢溜池遺跡					○							散布地			
205179	石田(2)遺跡			○		○				●	○		集落跡	本報告書		

※●は発掘調査で確認した時期

第2節 遺跡周辺の地形・地質

弘前大学大学院理工学研究科 根本 直樹

1 石田(2)遺跡周辺の地形の概要

石田(2)遺跡は、五所川原市大字飯詰字石田に位置する。地形的には、津軽平野と津軽山地のほぼ境界に位置し、飯詰川が形成した谷底平野上に分布する(図2)。標高は約24~26mである。

石田(2)遺跡周辺の地形を概観すると、東は津軽山地の西麓に当たり、西に津軽平野が広がる。また、主要河川に沿って、谷底平野が狭長に分布する。津軽山地は山地と丘陵地に区分され、平野の地形は海成段丘面、河成段丘面、扇状地、旧河道、後背湿地、三角州、及び自然堤防に細分される。

山地は、本遺跡西方2km以上の地域に見られる。水野・堀田(1983, 1985)の小起伏山地に相当する。津軽山地の南部を構成する梵珠山地の南西麓に当たる。起伏量は150 m/km²前後で、傾斜区分は20°以下、谷密度は25~50/km²である。

丘陵は、主要地方道五所川原・金木線以東に広く分布する。水野・堀田(1983)の丘陵地Ⅰ、丘陵地Ⅱ及び砂礫台地GtⅠを合わせたもの、水野・堀田(1985)の丘陵地Ⅰと丘陵地Ⅱを合わせたもの、水野・堀田(1994)の丘陵地と砂礫台地(中位GTⅡ⁺)を合わせたものに相当する。標高は60~200mで、起伏量は100~150 m/km²の地域が多く、谷密度は30~40/km²と開析が進んでいる。傾斜区分は15°以下である。



図1 石田(2)遺跡周辺の遺跡位置図

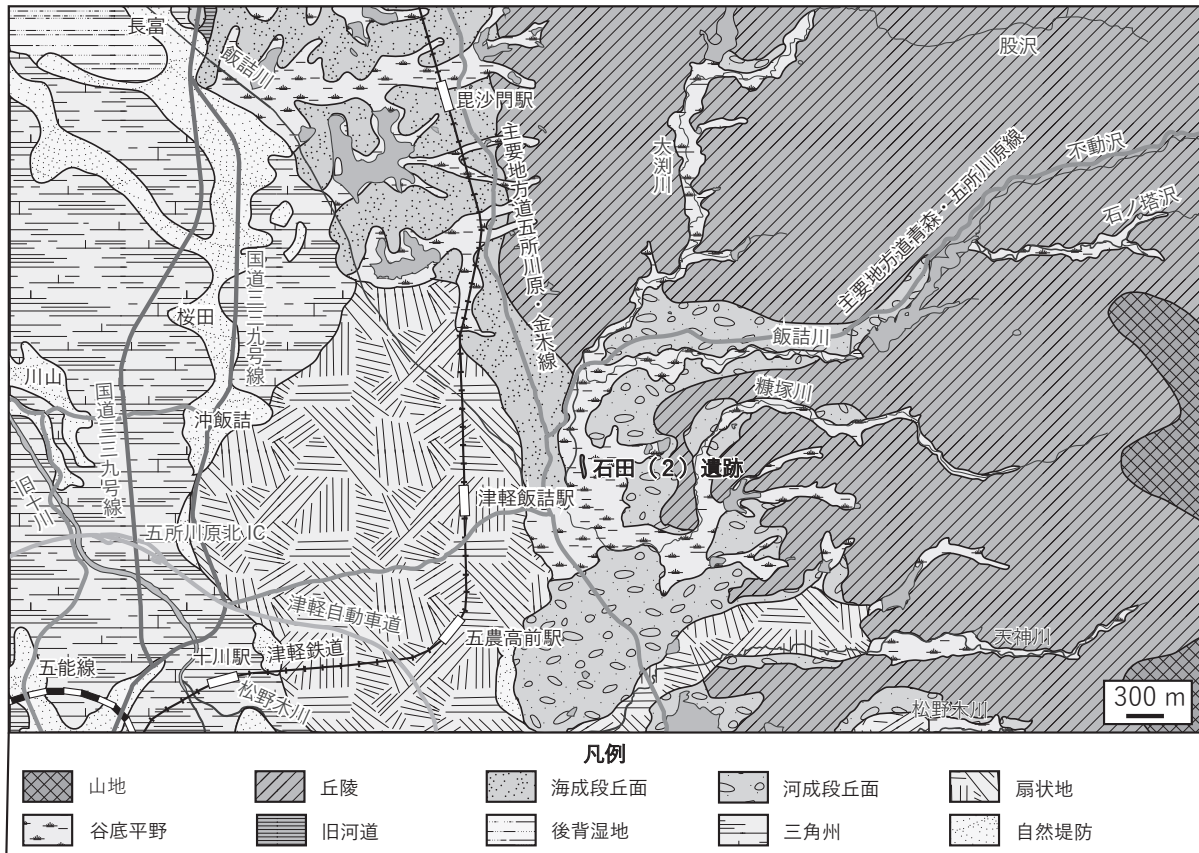


図2 石田(2)遺跡周辺の地形分類図

海成段丘面は、飯詰川以北の平野と丘陵の間に分布する。水野・堀田(1994)の砂礫台地(中位 Gt II)、吾妻(1995)及び青森県(1996)の III m 面にほぼ相当し、水野・堀田(1987)の砂礫台地(中位)の一部に相当する。面の標高は30~40 m、勾配は 5/1,000 程度で緩い。吾妻(1995)は、本段丘面が最終間氷期最盛期に形成されたとし、その形成年代を 124,000 年前としている。

河成段丘面は、津軽平野と津軽山地の境界付近で主要河川に沿って分布する。水野・堀田(1983)の砂礫台地 Gt II と砂礫台地 Gt III を合わせたもの、水野・堀田(1985)の砂礫台地(Gt II)、水野・堀田(1987)の砂礫台地(中位)の大部分に相当し、水野・堀田(1994)の砂礫台地(中位 Gt II)の一部に相当する。傾斜は 3° 未満である。

扇状地は、飯詰川が津軽平野に流れ出す地域に広く分布するほか、天神川と松野木川の流域にも分布が認められる。水野・堀田(1985、1987)の扇状地、水野・堀田(1994)の扇状地(低位)、吾妻(1995)の IV f 面、及び青森県(1996)の IV fa 面に相当する。勾配は 5/1,000 ~ 8/1,000 程度で西に緩く傾斜する。吾妻(1995)及び青森県(1996)は、形成年代を約 2 万年前と推定している。

谷底平野は、主要河川に沿って分布する。水野・堀田(1983、1985、1994)の谷底平野、水野・堀田(1987)の谷底平野 I に相当する。最終氷期に河川の侵食によって形成された谷が、後氷期に河川が運搬してきた土砂で埋積されて形成された。

旧河道は、五所川原市長富の東方にわずかに分布する。水野・堀田(1987)の旧河道に相当する。かつての河道が流路の変更により独立した水域として孤立し、やがて周囲から流れ込んだ土砂により埋積されて形成された。位置的に、飯詰川の旧河道である可能性が高い。

後背湿地は、長富の西方に分布する。水野・堀田(1994)の後背湿地に相当する。洪水時に河川か

ら溢れた泥水から泥などの細粒堆積物が沈澱して形成された。

三角州は、平野部の大部分を占めて分布する。海津(1976)の上位沖積面(後背湿地)の大部分、水野・堀田(1987, 1994)の三角州に相当する。標高は4 m以下で、傾斜は1/1,000以下で、全て平坦である。かつて津軽山地と屏風山の間 existed した入江を旧岩木川が運搬した土砂が埋積して形成された。完新世の気候最温暖期(約7,000～5,000年前)の高海水準に合わせて形成された堆積面である。

自然堤防は、長富から五所川原沖飯詰にかけての国道339号線沿い、五所川原市桜田付近から北西に流れる用水路沿いに連続的に分布するほか、五所川原市市街地、同市川山、津軽鉄道十川駅南方及び東方、津軽自動車道五所川原北インターチェンジ東方に分布が見られる。海津(1976)の上位沖積面(自然堤防)、水野・堀田(1987, 1994)の自然堤防に相当する。三角州面との比高は1.5～2 m程度である。増水時には河川は砂粒などの粗粒堆積物を運搬するが、溢水すると急激に流速が低下するためそれらが堆積する。その繰り返しのよって河道に沿って形成された微高地が自然堤防である。完新世の気候最温暖期(約7,000～5,000年前)の高海水準期に形成された。

石田(2)遺跡の東方に分布する山地及び丘陵地では、主要河川は東北東から西南西へ流下する(図3)。これは、この地域の地形の大局的な傾斜を反映していると解釈される。水系は、樹枝状を示し、これらの地域の地質に定向性がないことを反映している。一方、遺跡西方の津軽平野では、主要河川は南東から北西へ流下し、津軽平野東部の対局的な傾斜を反映していると解釈される。また、格子状の水系が発達するが、これは整備された用水路が卓越するからである。いくつかの河川に沿った谷底平野には、複雑な水系が見られる。これらは未整備の用水路である。

2 石田(2)遺跡周辺の地質

石田(2)遺跡周辺の地質は、その東西で大きく異なる。東の山地及び丘陵には中新世～中期更新世の地層が分布し、下位から中新世の源八森層、不動ノ滝層、鮮新世の味噌ヶ沢層、中期更新世の鶴ヶ

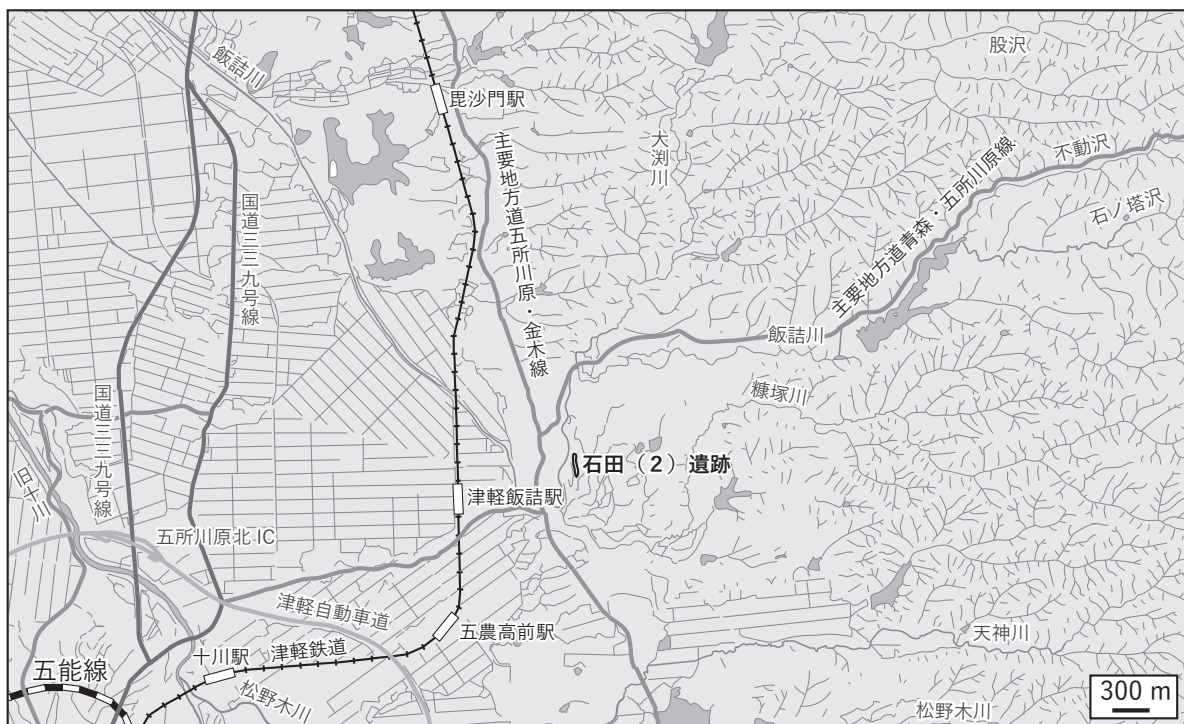


図3 石田(2)遺跡周辺の水系図

坂層、立山層に区分される(図4)。不動ノ滝層は源八森層に整合に重なるが、源八森層上部と源八森層は同時異相の関係にある。鶴ヶ坂層は立山層に整合に覆われる。それ以外の地層は、それぞれ不整合関係にある。これらは馬ノ神山ドームの西翼を構成し、西に傾斜する。西の平野部には後期更新世～完新世の堆積物が分布し、地形に応じて海成段丘堆積物、河成段丘堆積物、扇状地堆積物、谷底平野堆積物、旧河道堆積物、後背湿地堆積物、三角州堆積物、自然堤防堆積物に区分される。これらの堆積物の分布は前節の対応する地形と同じなので、以下の各説では記載しない。

源八森層は、飯塚(1930)により命名された。藤井(1981)、岩井・川村(1983)、岩井ほか(1983)及び長森ほか(2013)の源八森層に相当する。丘陵地の東縁から山地にかけて分布する。黒灰色シルト岩の硬軟互層及び塊状褐暗黒～黒色の細粒シルト岩よりなり、細粒凝灰岩の薄層を挟む。層厚は400 mである。*Makiyama chitanii*の化石を含むことがある。珪藻の *Thalassiosira schraderi* 帯に相当する(秋葉・平松, 1988: 丸山, 1988)。齋藤(1999)によると、この化石帯の年代は860万年前～760万年前である。

不ノ動滝層は、飯塚(1930)により命名された。藤井(1981)及び長森ほか(2013)の不動滝層、岩井・川村(1983)の不動滝層の珪藻土質シルト岩、岩井ほか(1983)の王余魚沢層に相当する。丘陵地の東部を占めて分布する。緑灰～青灰色を呈する塊状の珪藻質シルト岩を主とし、細粒凝灰岩、中～粗粒砂岩及び礫岩を挟む。層厚は約200 mである。*Makiyama chitanii*の化石を含む。放散虫の *Lychnocanoma magnacornuta* 帯～*Cycladophora davisiana cornutoides* 帯、珪藻の *Thalassiosira yabei* 帯～*Rouxia californica* 帯に相当する(本山・丸山, 1995)。齋藤(1999)によると、これらの放散虫の化石帯の年代は1,260万年前～730乃至680万年前に及び、珪藻の化石帯の年代は1,150万年前～740

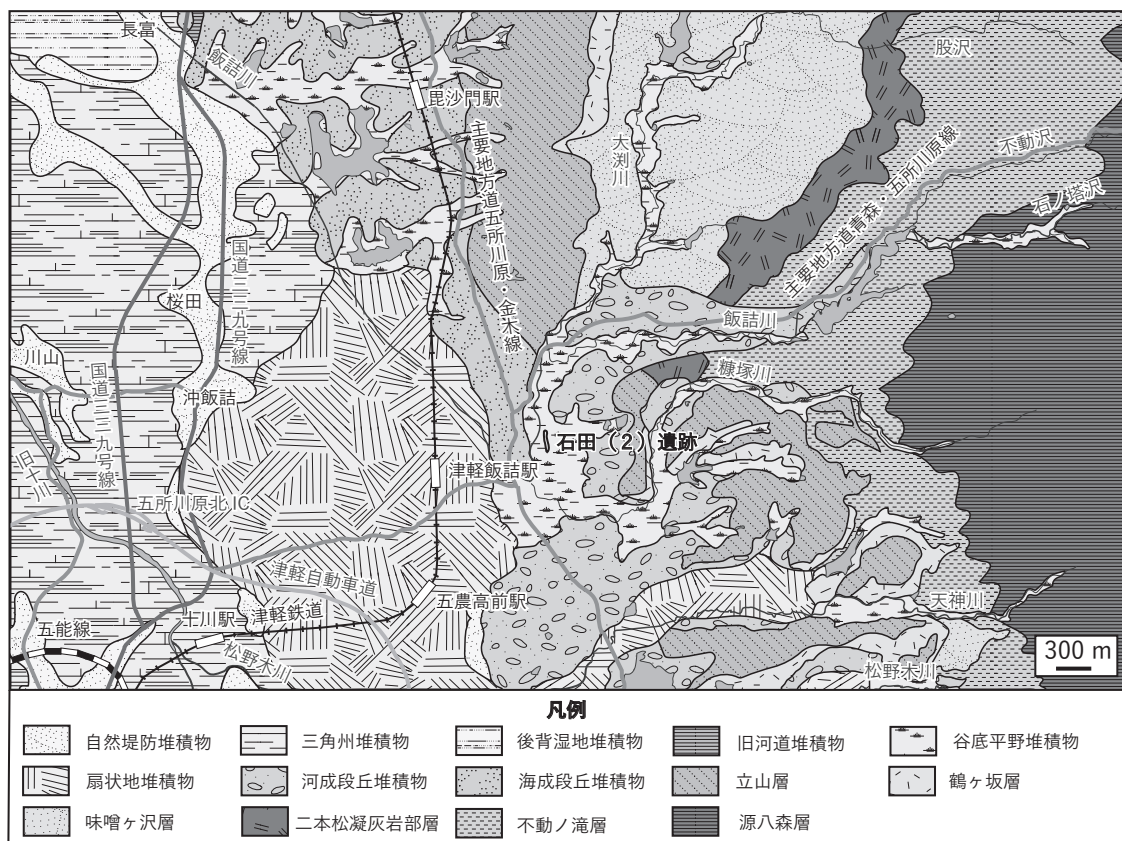


図4 石田(2)遺跡周辺の地質図 味噌ヶ沢層は本文の味噌ヶ沢層主部に対応する

乃至 730 万年前である。

味噌ヶ沢層二本松凝灰岩部層は、藤井(1966)により命名された。藤井(1981)の上部二本松凝灰岩部層、岩井・川村(1983)の大滝沢層の一部に相当する。糠塚川以北で、不動ノ滝層と味噌ヶ沢層主部に挟まれて狭長に分布する。主に白～灰白色を呈する塊状の軽石凝灰岩及び凝灰角礫岩より成り、軽石の長径は 5～15cm である。黒雲母に富み、角閃石、単斜輝石、斜方輝石及びジルコンを含む。本部層下部には不動ノ滝層由来の珪藻質泥岩の偽礫が含まれる。厚さは最大で 200 m である。根本・高平(2002)は、この凝灰岩が津軽地域南部の湯ノ沢カルデラを給源とする尾開山凝灰岩に対比できるとした。尾開山凝灰岩の噴出年代は、390 万年前とされている(田口ほか, 2021)。

味噌ヶ沢層は、田口(1959)により命名された。味噌ヶ沢層主部は、藤井(1966)及び根本(1994)の味噌ヶ沢層、岩井・川村(1983)の蟹田層の一部、岩井ほか(1983)の大釈迦層、長森ほか(2013)の磯田山層に相当する。大淵川の両岸に広く分布するほか、天神川と松野木川の間丘陵に小規模な分布が認められる。主として黄褐～赤褐色を呈する軽石質中～粗粒砂岩より成り、軽石凝灰岩、凝灰質砂質シルト岩、凝灰質細～中粒砂岩、細粒凝灰岩等の薄層及び礫岩のレンズを挟む。細～中粒砂岩は級化層理を示し、しばしば斜交層理の発達認められ、シルト岩が偽礫として砂岩中に含まれる場合が多い。層厚は最大で 420m である。

鶴ヶ坂層は、飯塚(1930)により命名された。藤井(1966)の鶴ヶ坂凝灰岩、藤井(1981)の鶴ヶ坂凝灰岩部層、岩井・川村(1983)及び根本(1994)の鶴ヶ坂層、長森ほか(2013)の八甲田第 1 期火砕流堆積物に相当する。大淵川右岸の丘陵の鞍部に分布するほか、糠塚川以南の丘陵地に散点的に分布する。主に塊状で、灰～灰白色を呈する単斜輝石斜方輝石デイサイト質～流紋岩質軽石質凝灰岩より成り、一部では凝灰角礫岩となっている。軽石片は円磨度が高く、その長径は 5～30cm である。76 万年前に噴出したとされている(Suzuki et al., 2005)。

立山層は、田口(1959)により命名された。藤井(1966)の立山層から鶴ヶ坂凝灰岩を除いた地質、藤井(1981)及び根本(1994)の立山層、岩井ほか(1983)及び長森ほか(2013)の前田野目層に相当する。丘陵の東縁に分布する。主に黄褐色を呈する含軽石凝灰質中～粗粒砂、赤褐色の粗粒砂及び灰色のシルトより成り、斜交葉理の発達が著しい。砂層には凝灰質粘土及び軽石質火山灰が挟在し、シルトは層準により究めて有機質になる場合がある。基底部には最大層厚 10m の亜炭質泥層が認められる。

海成段丘堆積物は、藤井(1966)及び根本(1994)の段丘堆積物に相当する。厚さ 3 m 以上の砂礫層に、層厚 0.5～1.5m の風成堆積物が重なる。砂礫層は偏平な亜角～円礫から成り、細粒砂を基質とする。風成堆積物には洞爺テフラが挟まれ、その噴出年代は 106,000 年前とされている(Matsu'ura et al., 2014)。

河成段丘堆積物は、岩井・川村(1983)及び岩井・山内(1987)の段丘堆積物に相当する。粘土及び礫から成る。礫は細円～亜円礫を主とし、風成堆積物に覆われる。

扇状地堆積物は、岩井・山内(1987)及び根本(1994)の沖積低地堆積物(砂・礫・泥)に相当する。砂、礫、及び泥から成る。礫は細～中礫サイズの亜角～円礫から成る。砂は中粒で、粘土分が混じる。泥は明色のシルトが多い。

谷底平野堆積物は、藤井(1981)の沖積層の一部、岩井・川村(1983)の沖積低地堆積物(粘土・砂)、岩井ほか(1983)の沖積低地堆積物(砂・礫)に相当する。泥炭を挟有する粘土、砂及び砂礫から成る。

旧河道堆積物の下部は、ここが河道であった時に堆積した礫や砂から成る。上部は、河川の争奪によりここが静水域になった時に堆積した泥から成る。最上部は、静水域が湿地へと変化する過程で堆積した草炭が覆う。

後背湿地堆積物は、岩井ほか(1983)の沖積低地堆積物(草炭)に相当する。洪水時に溢水した泥水から堆積した泥炭質の泥と、洪水が引いた後に出現した湿地で形成された草炭から成る。

三角州堆積物は、岩井・山内(1987)及び根本(1994)の沖積低地堆積物(泥・泥炭)に相当する。軟弱なシルト、粘土及び泥炭から成り、地下20m付近まで達する。

自然堤防堆積物は、岩井・山内(1987)及び根本(1994)の沖積低地堆積物(砂・礫)に相当する。主として細～中粒砂から成り、一部では礫を含む。

3 石田(2)遺跡の基本層序

石田(2)遺跡は、前述のように飯詰川が形成した谷底平野に位置する。最終氷期には降水量が減少することにより河川の運搬力が低下するため、河川に沿って谷が形成される。後氷期になると降水量の増加に伴い河川の運搬力が増加し、以前の谷を谷底平野堆積物が埋積していく。その際、流速が速い河道の中心には礫や砂が堆積し、流速が遅いその周囲には砂や泥が堆積する。河道の外では洪水時に溢水した泥水から堆積した泥が堆積し、後背湿地を形成する。河道は谷の中で蛇行しながら時間と共に流路を変えていくので、既存の砂層や泥層を侵食して砂礫層が堆積する。その結果、複雑な層序関係が出現する。一方、後背湿地が河道から離れて暫くするとそこに植生が発達し、堆積物は腐植を含むようになる。

そのような目で石田(2)遺跡の土層(図5)を解釈すると、VII層、III l層、III i層は河道の中心付近で堆積した礫層、III k層、III j層、III h層は河道の縁辺で堆積した砂層となる。VI層、III m層、III g層、III f層、III e層は河道の縁辺～外で堆積した粘土層で、V層は腐植がやや混入した粘土層、IV層は腐食が多く混入した粘土層である。III a層は風成粘土層、II層は腐植がやや混入した風成粘土層であろう。

引用文献

秋葉文雄・平松 力(1988) 青森県鯉ヶ沢, 五所川原および下北地域の新第三系珪藻化石層序. 飯島東編, 第三紀珪質岩の総合研究(総合研究A), 昭和62年度研究成果報告書, p. 35-51.

青森県(1996) 平成7年度地震調査研究交付金 津軽山地西縁断層帯及び野辺地断層帯に関する調査成果報告書. 青森県, 青森.

吾妻 崇(1995) 変動地形からみた津軽半島の地形発達史. 第四紀研究, vol. 34, p. 75-89.

藤井敬三(1966) 5万分の1地質図幅説明書「金木」. 地質調査所, 川崎, 39+ 1 p.

藤井敬三(1981) 油川地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 筑波, 38 p.

飯塚保五郎(1930) 青森油田の地質に就いて. 地質学雑誌, vol. 38, p. 727-732.

岩井武彦・川村真一(1983) 表層地質図. 青森県農林部土地改良第一課編, 5万分の1土地分類基本調査「油川」, 青森県農林部土地改良第一課, 青森, p. 16-24.

岩井武彦・山内 仁(1987) 表層地質図. 青森県農林部土地改良第一課編, 5万分の1土地分類基

- 本調査「青森西部」, 青森県農林部土地改良第一課, 青森, p. 21-34.
- 岩井武彦・大久保貢・沢田庄一郎(1983)表層地質図. 青森県農林部土地改良第一課編, 5万分の1土地分類基本調査「青森西部」, 青森県農林部土地改良第一課, 青森, p. 16-26.
- 丸山俊明(1988)青森県新第三系珪藻化石層序. 飯島 東編, 第三紀珪質岩の総合研究(総合研究A), 昭和62年度研究成果報告書, p. 13-33.
- Matsu'ura, T., Furusawa, A., Shimogama, K., Goto, N. and Komatsubara, J. (2014) Late Quaternary tephrostratigraphy and cryptotephrostratigraphy of deep-sea sequences (Chikyu C9001C cores) as tools for marine terrace chronology in NE Japan. *Quaternary Geochronology*, vol. 23, p.63-79.
- 水野 裕・堀田報誠(1983)地形分類図. 青森県農林部土地改良第一課編, 5万分の1土地分類基本調査「青森西部」, 青森県農林部土地改良第一課, 青森, p. 11-15.
- 水野 裕・堀田報誠(1985)地形分類図. 青森県農林部土地改良第一課編, 5万分の1土地分類基本調査「油川」, 青森県農林部土地改良第一課, 青森, p. 11-15.
- 水野 裕・堀田報誠(1987)地形分類図. 青森県農林部土地改良第一課編, 5万分の1土地分類基本調査「五所川原」, 青森県農林部土地改良第一課, 青森, p. 15-20.
- 水野 裕・堀田報誠(1994)地形分類図. 青森県農林部農地計画課編, 5万分の1土地分類基本調査「金木」, 青森県農林部農地計画課, 青森, p. 13-19.
- 本山 功・丸山俊明(1995)青森県津軽半島中西部の新第三系の層序と放散虫・珪藻化石. 地質調査所月報, vol. 46, p. 333-374.
- 長森英明・宝田晋治・吾妻 崇(2013)青森西部地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅). 産総研地質調査総合センター, つくば, 67 p.
- 根本直樹(1994)表層地質図. 青森県農林部農地計画課編, 5万分の1土地分類基本調査「金木」, 青森県農林部農地計画課, 青森, p. 20-27.
- 根本直樹・高平康司(2002)津軽半島南部に分布する”二本松凝灰岩部層”について. 弘前大学理工学部研究報告, vol. 5, p. 17-30.
- 齋藤常正(1999)最近の古地磁気層序の改訂と日本の標準微化石層序. 石油技術協会誌, vol. 64, p. 2-15.
- Suzuki, T., Eden, D., Danhara, T. and Fujiwara, O. (2005) Correlation of the Hakkoda-Kokumoto Tephra, a widespread middle Pleistocene tephra erupted from the Hakkoda Caldera, Northeast Japan. *Island Arc*, vol. 14, p. 666-678.
- 田口春那・折橋裕二・佐々木 実・宮嶋佑典・岩野英樹・平田岳史(2021)青森県南部, 湯ノ沢カルデラ噴出物である尾開山凝灰岩の高精度・高確度噴出年代の決定: 同一ジルコン U-Pb 年代とフィッシュン・トラック年代のダブル年代測定. 地質学雑誌, vol. 127, p. 545-561.
- 田口一雄(1959)青森県蟹田地区の地質. 青森県水産商工部商工課, 青森県の地質(石油)について II, p. 1-4.
- 海津正倫(1976)津軽平野の沖積世における地形発達史. 地理学評論, vol. 49, p.714-735.

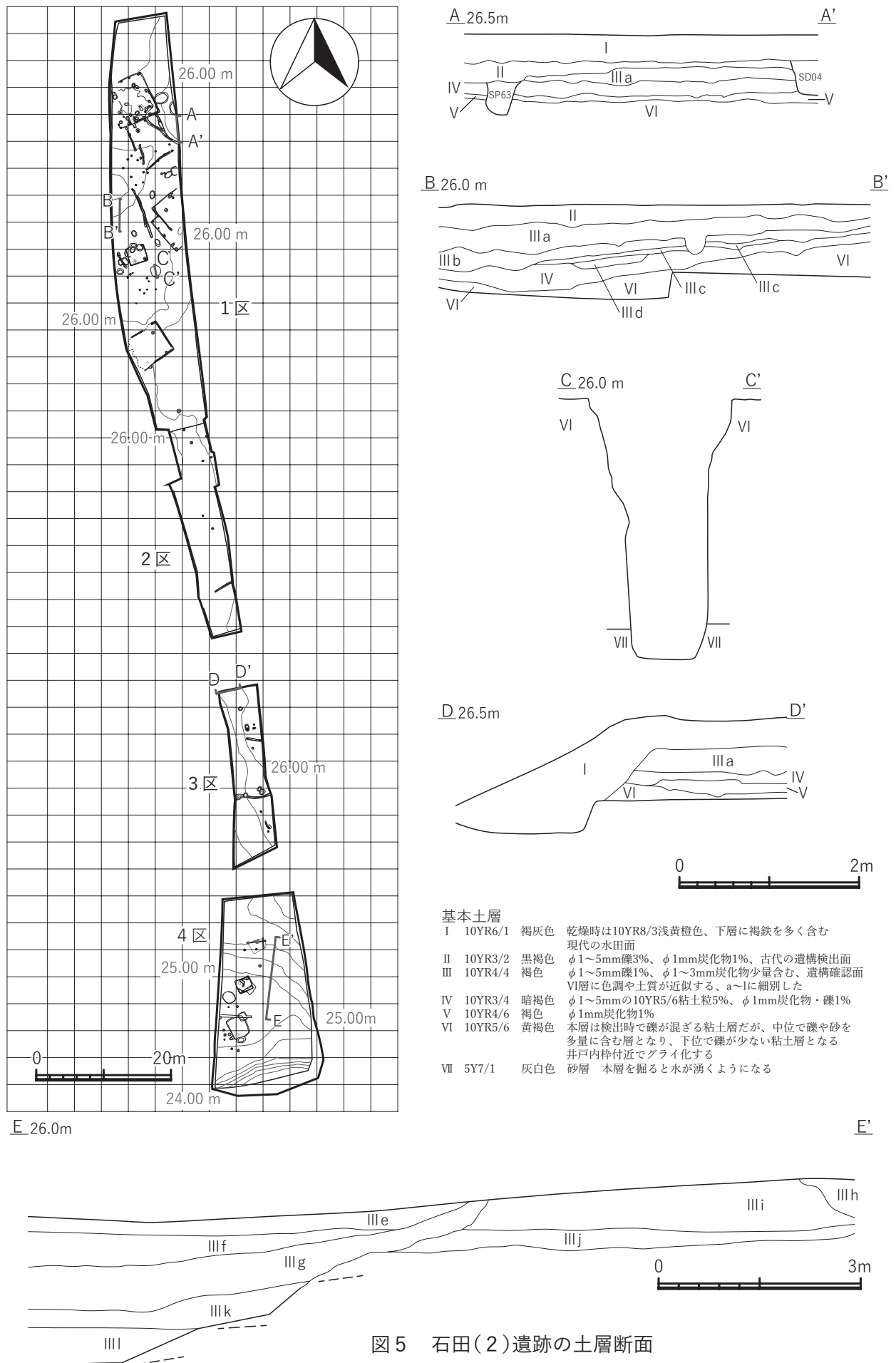


図5 石田(2)遺跡の土層断面

(青森県埋蔵文化財調査センターが作成した図を改編)

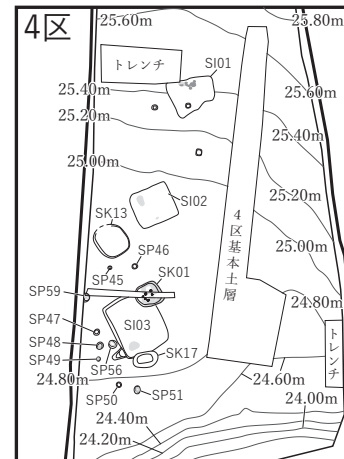
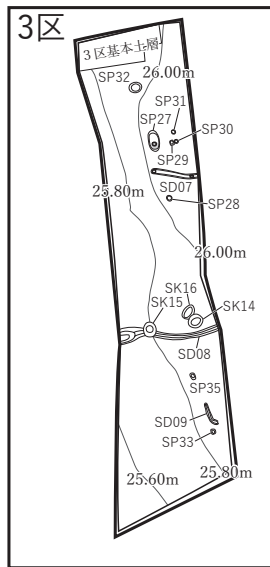
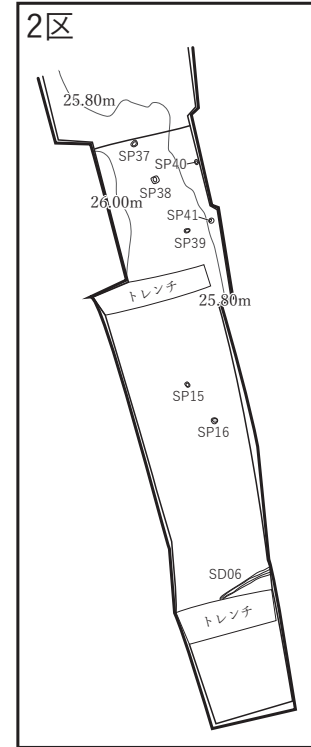
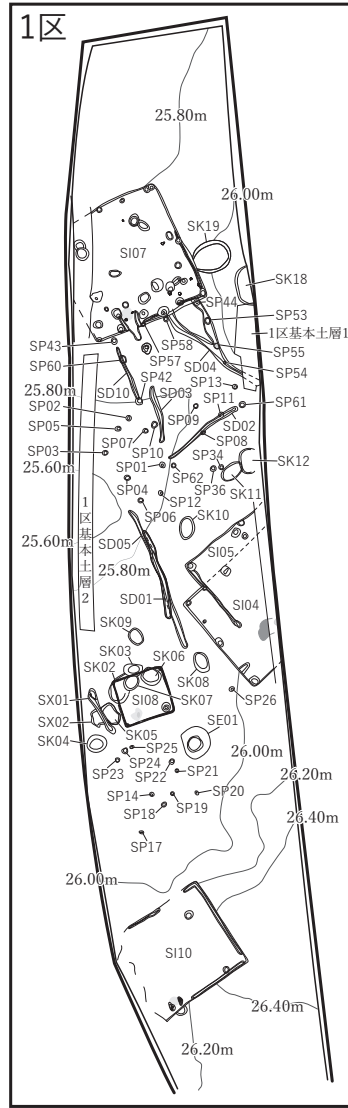
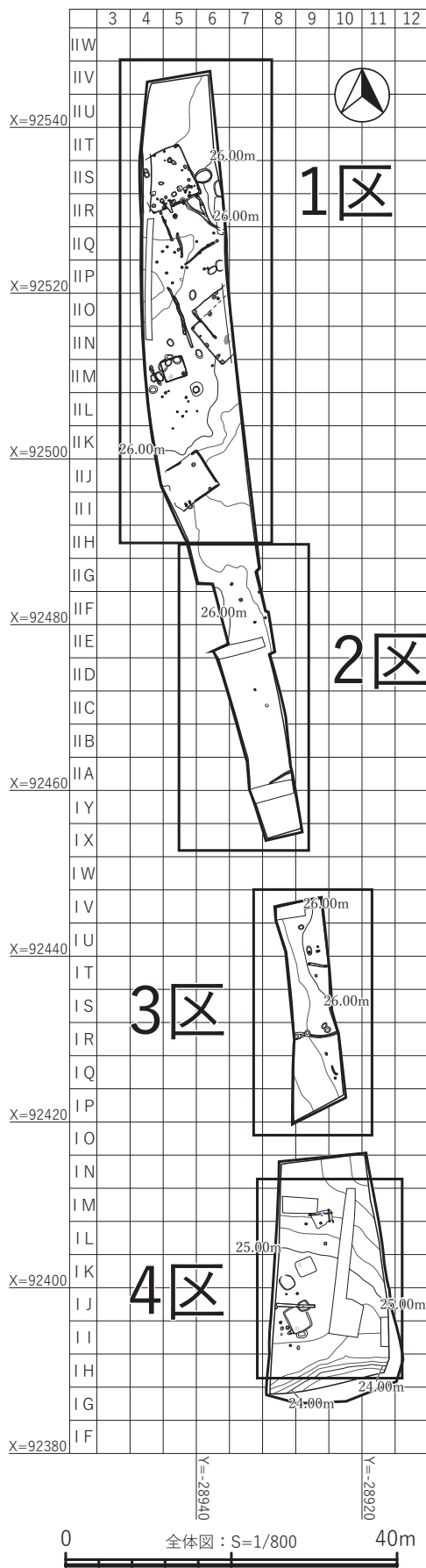


図6 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 概要

今回の調査で検出した遺構は、平安時代の竪穴建物跡9棟、井戸跡1基、土坑19基、溝跡10条、性格不明遺構2基、柱穴51基である。出土遺物は縄文土器、土師器、須恵器、木製品、鉄生産関連遺物、石器、陶磁器、銭貨である。陶磁器、銭貨は全て遺構外から出土した。遺構は堆積土から出土した遺物が土師器・須恵器が主体であったため、平安時代に帰属すると判断した。縄文時代と中近世の遺構は確認されなかった。調査区は全体として北から南へゆるく傾斜する地形に立地するが、南端付近は東西方向に流れる沢地形があり標高24.4mから南側は大きく傾斜し、ここから遺構・遺物は確認できなかった。平安時代の遺構は、基本土層のⅡ層から掘り込みを確認している。但し、Ⅱ層と遺構の堆積土が類似しており遺構確認が困難であったため、最終的な遺構確認は下層のⅢ層、褐色土で行った。その後、基本土層2や井戸跡付近の土層を観察した結果、基本土層2付近は地形の落ち込みがあり、また井戸跡付近の検出面がⅥ層であることを確認した。このため検出時の調査区は平坦であったものの、旧地形には起伏があったと考えられる。なお、各調査区に設置したトレンチの土層断面にⅣ層から掘りこむ遺構がないこと、また各遺構の断面観察の結果、Ⅳ層の遺構・遺物がないと判断したため、Ⅲ層までの調査とした。(藤田)

第2節 縄文時代

1 縄文土器(図7-1～15)

縄文土器は総重量2,212.7g出土した。内239.2gは遺構内から出土しているが、いずれも平安時代の遺構である。すべて表面が著しく摩耗しており、明確な文様や調整を確認できるものは皆無であるが、胎土や器形的特徴から、縄文時代前期および後期の所産と思われる。ここでは、比較的特徴が残存している資料15点を図示した。

図7-1～4は、深鉢形土器の破片である。胎土に繊維を多量に含み、繊維を束にして混ぜ込んだような痕跡も確認できる。図7-3・4は隆帯を貼り付け、その上に刺突を巡らせている。図7-3は、隆帯脇や胴部に縄文の痕跡が確認できる。表面の摩耗が激しく詳細は不明であるが、残存する諸特徴から、前期中葉に比定される。

図7-5～13は深鉢形土器の口縁部及び胴部破片で、胴部が丸みを帯び、括れを有して口縁部が外反する器形と考えられる。摩耗が激しく、地文や文様は確認できないが、器形的特徴から後期初頭に比定される。粘土紐の輪積み部分で破損しているものがあり、断面形状から外径接合による成形を行っていたことが確認できる。口縁部は、やや細い粘土紐を巻き付けたものがみられる。胎土には石英粒を多く含む。比較的残りがよいものでは、内外面に横方向のナデもしくは丁寧なナデを施した痕跡が確認できる。図7-14・15は深鉢の底部破片である。胎土の特徴が図7-5～13とよく似ており、同じく後期初頭の所産と考えられる。

上述のように、本調査で出土した縄文土器は、いずれも摩耗が激しく詳細な型式を判別することは困難である。このような遺存状態は、本遺跡が飯詰川が形成した谷底平野に立地することから、水流

による影響を受けたものと考えられる。一方で、出土状況は比較的まとまった様相を呈しており、単純な河川の氾濫による流れ込みとは捉え難い。1区では、後期初頭の土器がⅡ～Ⅲ層から出土しているのに対し、前期中葉の土器はⅡN-5グリッドのⅡ層下部(Ⅲa層直上)でまとまって出土している(写真図版6-上段・中段左)。Ⅲa層は、縄文時代後期～晩期の風成粘土層と考えられるため(第2章・第4章第1節参照)、これらは層位が逆転した状態で出土している。後期初頭の土器は、特に4区南端ⅠI-8グリッドからの出土が多い。第3号竪穴建物跡の検出面西側でまとまった様相を示す(写真図版6-中段右)ほか、同建物跡の床面下(写真図版6-下段)から出土している。4区の出土層位はいずれもⅢe層であるが、平安時代の遺構確認面に近いレベルから、Ⅲf層の直上まで、出土位置にはやや上下幅がある。このような縄文土器の出土状況は、基本土層の堆積過程や、年代測定結果などを含めて総合的に検討する必要がある、当時の環境や遺跡の形成過程を探る上で非常に重要であるため、第5章で改めて考察する。(中門)

2 石器(図7-16～18)

縄文時代の石器は3点出土した。図7-16は不定形の剥片石器、図7-17は石篋で、石材はいずれも珪質頁岩である。図7-18はデイサイト製の磨石である。すべて1区からの出土である。(工藤)

第3節 平安時代

1 竪穴建物跡

竪穴建物跡9棟を検出し、以下検出した番号順に記載する。なお、第6号、第9号竪穴建物跡は調査時に遺構ではないと判断し、欠番とした。

第1号竪穴建物跡(SI01)(図8)

[位置・確認] 4区のⅠM・L-9・10グリッド、標高25.1～25.4mの緩斜面に位置し、Ⅲ層中で確認した。平面形は不整形ながら北側で東西方向に直線的なプランを確認し、北東隅で南北方向に延びる暗褐色のプランを確認した。検出面上に焼土や炭化物が面的に確認できたこと、また本遺構が緩斜面に立地することから、壁の立ち上がりや南側を欠失した竪穴建物跡の床面のみが残存したものと判断した。また建物の付属施設や柱穴の有無を確認した結果、Pit01～03を確認した。[規模・平面形] 確認できた平面規模は南北長が246cm、東西長が189cmである。床面積は3.7㎡である。建物の軸方向はN-10°-Wである。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とし、壁溝は検出できなかった。[柱穴] 主柱穴とみられるPit01～03を検出した。Pit01は31×27cmの円形、深さは22cmである。Pit02は27×26cmの円形、深さは13cmである。Pit03は35×30cmの円形、深さは7cmである。本遺構の柱穴は4本の主柱穴を想定し周辺を確認したが、遺構が北から南へと下がる緩斜面に立地すること、また北側に並ぶPit01・02に比べPit03の掘り込みが浅いことから、南西の柱穴は削平され失われたものと判断した。[カマド] カマドは検出できなかった。[被熱範囲] 北壁中央付近に、長軸36cm、短軸16cmの被熱範囲を確認した。深さ2cmまで被熱が及ぶ。[堆積土] 掘方埋土のみ確認した。[出土遺物] 土師器が54.8g出土した。細片のため、図示はしていない。[小結] 出土遺物から平安時代の竪穴建物跡とみられる。床面出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、774～886calAD(2σ)であり、考古学的所見

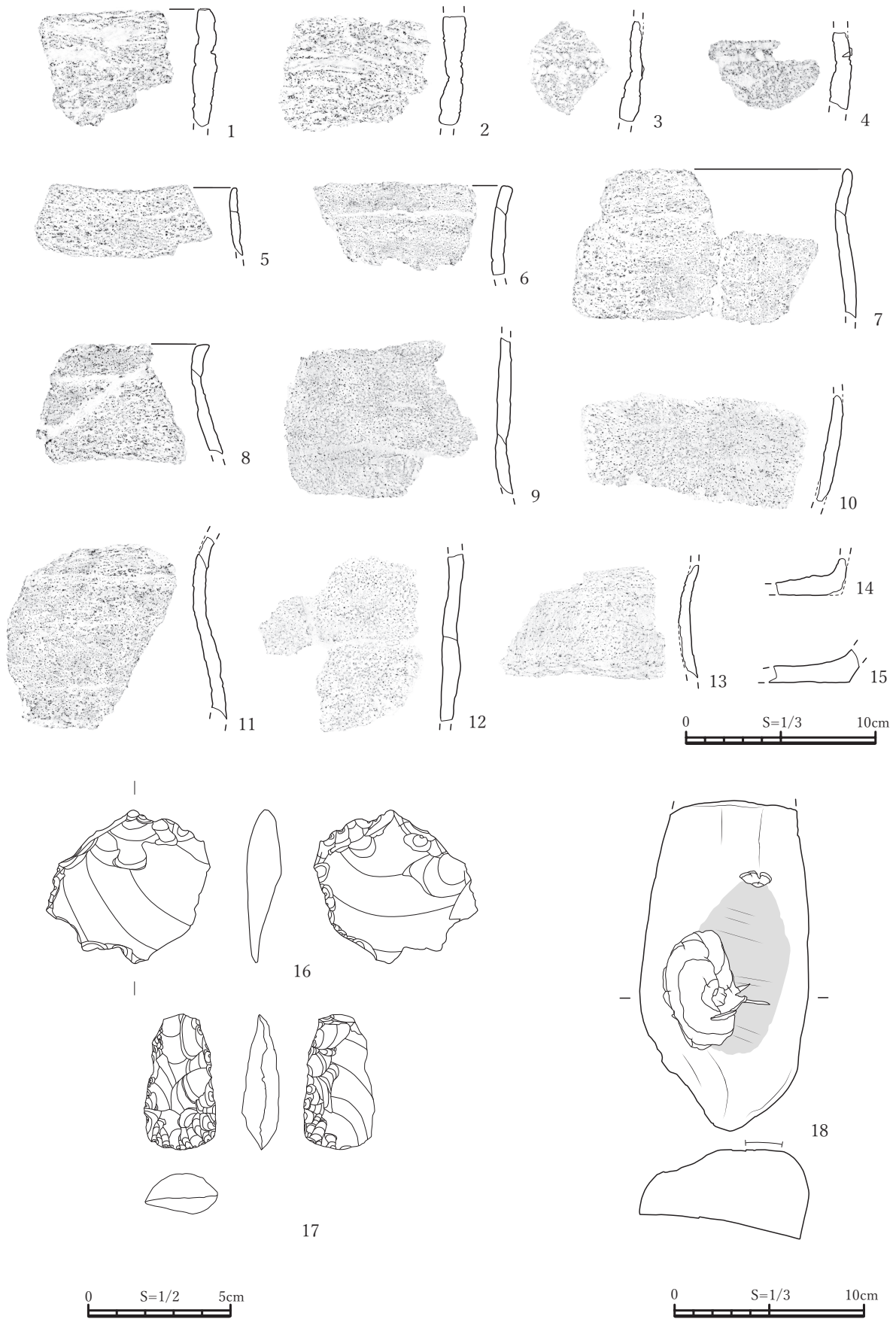


図7 縄文時代の出土遺物

と矛盾しない(第4章第1節参照)。

第2号竪穴建物跡(SI02)(図8)

[位置・確認] 4区のIK-8・9、IL-9グリッド、標高24.9~25.0mの緩斜面に位置し、Ⅲ層中で確認した。隅丸方形のプラン上に被熱範囲を確認したことから、壁の立ち上がりが失われ、竪穴建物跡の床面のみが残存したものと判断した。[規模・平面形] 平面規模は南北長が208cm、東西長が236cmである。床面積は4.1㎡である。建物の軸方向はN-113°-Wである。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とし、壁溝は検出できなかった。[柱穴] 検出できなかった。[カマド] 検出できなかった。[被熱範囲] 北壁西寄りと、南壁中央から被熱範囲を確認した。北壁西寄りのものは長軸53cm、短軸32cm、南壁中央のものは長軸13cm、短軸6cmである。[堆積土] 掘方埋土のみ確認した。[出土遺物] 土師器143.5g、縄文土器6.1gが出土した。細片のため、図示はしていない。掘方埋土から被熱礫の破片7.2gが出土した。[小結] 出土遺物から平安時代の竪穴建物跡とみられる。

第3号竪穴建物跡(SI03)(図8・9)

[位置・確認] 4区のII・IJ-8・9グリッド、標高24.8~24.9mの緩斜面に位置し、Ⅲ層中で確認した。第1・17号土坑と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 平面規模は南北長が330cm、東西長が270cm、検出面から床面までの深さは20cmである。床面積は6.8㎡である。壁は開きぎみに立ち上がる。建物の軸方向はN-118°-Wである。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とし、壁溝は検出できなかった。[柱穴] 検出できなかった。[カマド] 西壁南寄り、南壁付近で検出し、火床面、煙道が残存する。軸方向はN-118°-Wで建物とほぼ同じである。火床面の範囲は55cm×39cm、深さ3cmまで被熱する。煙道は半地下式で床面から約13°の傾斜で緩やかに立ち上がる。煙道の長さは70cmである。[堆積土] 4層に分層した。1~3層は自然堆積、4層は掘方埋土である。[出土遺物] 須恵器1,674.3g、土師器12,441g、縄文土器105.8g、石器3点(1,682g)、含鉄鍛冶滓47.1g、椀形鍛冶滓11.8g、鍛冶滓22.5g、溶解物0.5g、炉壁2.2gが出土した。うち須恵器は5点、土師器は37点、石器は砥石2点、台石1点、含鉄鍛冶滓は2点(図56-16・17)を図示した。土器は、1層から床面までの堆積土から多数が破片で出土した。遺物の中には第7号、第10号竪穴建物跡、第8号土坑から出土した遺物と接合関係が認められるものがある。礫は3層から被熱し黒色化したものが出土した。須恵器は、壺、甕が出土した。壺(図18-3)口縁部は菱形を呈し、沈線を施すことにより隆帯を意識しているものである。頸部にリング状突帯とヘラ記号を有する。リング状突帯は押し引きによる作出である。甕は外面にタタキを施し、内面に鳥足状当て具痕、平行当て具痕を有するものが出土している。土師器は、坏、甕、小型甕、埴が出土している。坏は口縁端部が緩く外反するもの、体部が直線的なものがある。甕は形式的に口縁部が強く短く外反し体部に膨らみを持ち重心が比較的高いもの、口縁部が強く短く外反し胴が長いもの、口縁部の外反が弱く直線に近いものがある。口径では、直径25cmから30cmの大型、直径20cm程度の中型、直径10cm程度の小型に分類できる。石器では、図23-7は、カマド火床面から加工されていない垂角礫2点とともに隣接して出土した。付近には炭化物の集中分布がみられた(写真図版10参照)。[小結] 出土遺物から平安時代の竪穴建物跡とみられる。3層出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、774~951calAD(2σ)であり、考古学的所見と矛盾しない(第4章第1節参照)。

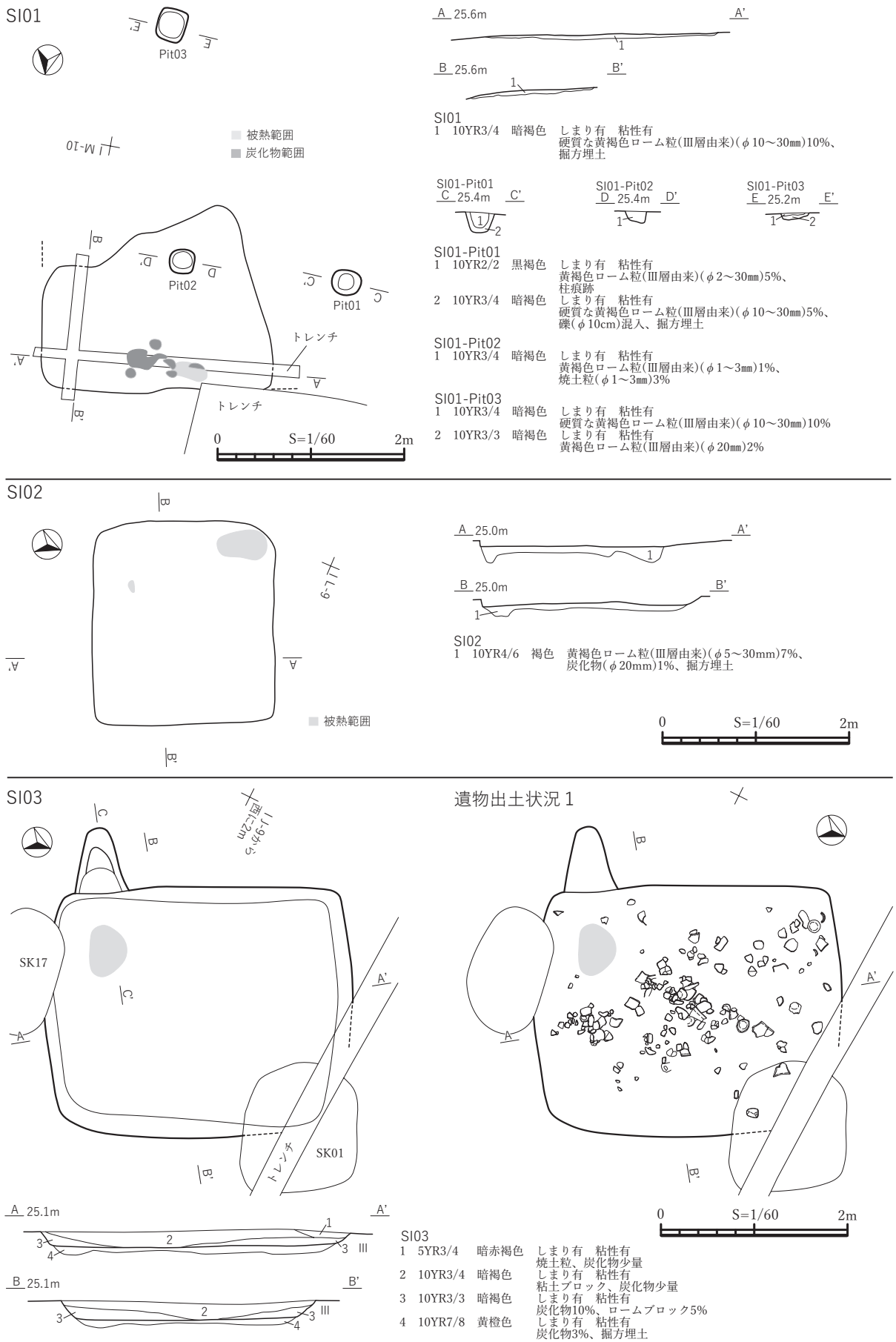
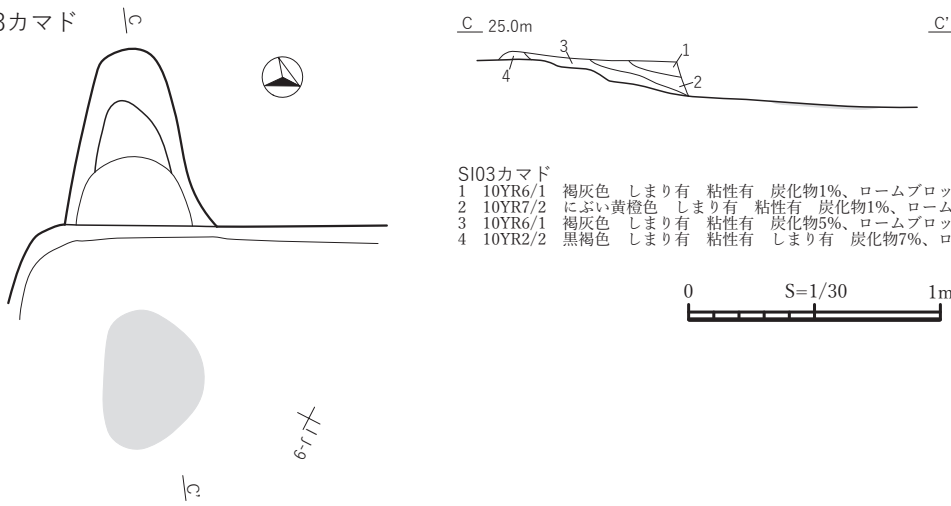


図8 竪穴建物跡 1

石田(2)遺跡

SI03カマド



SI03遺物出土状況 2

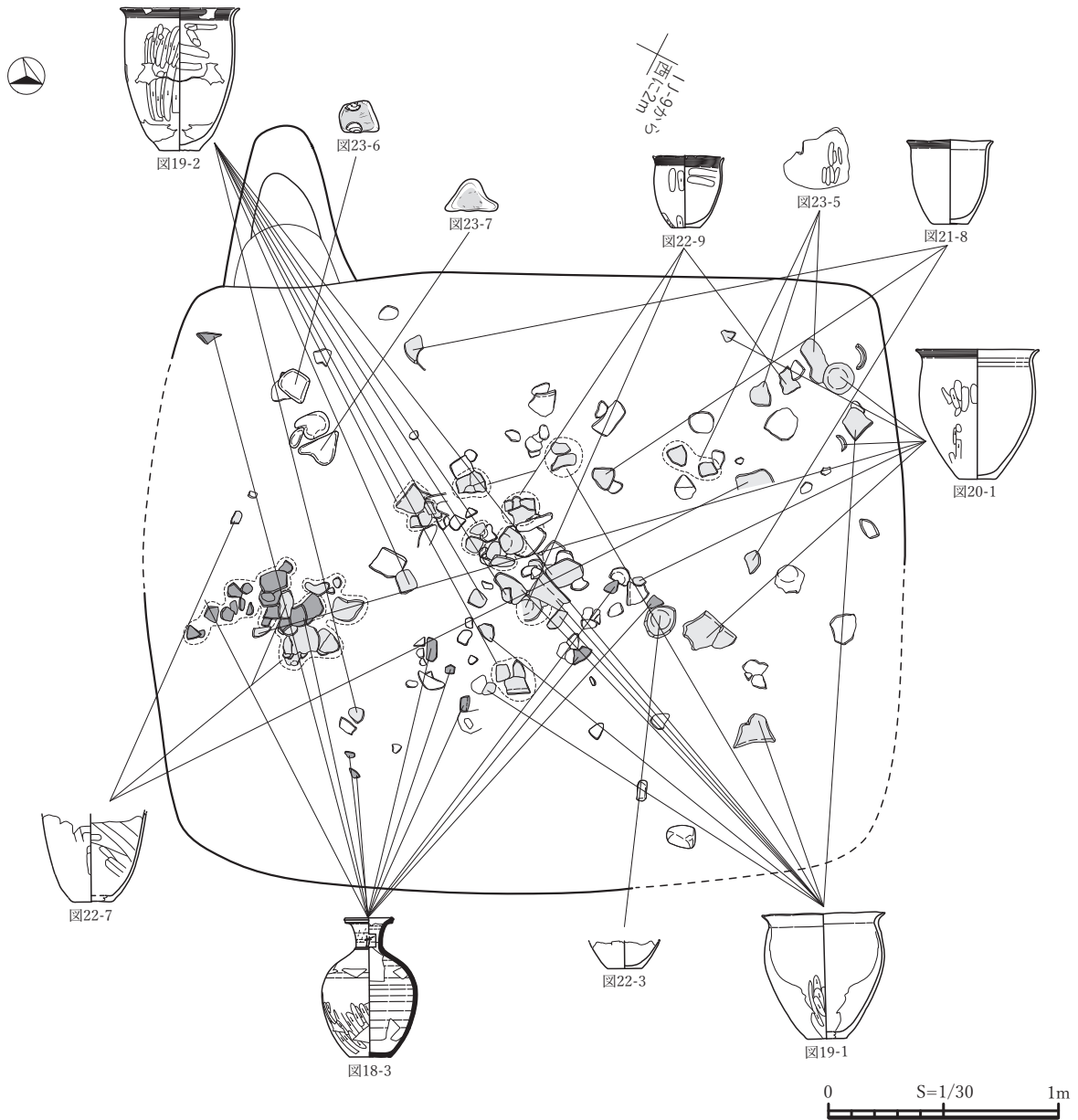


図9 竪穴建物跡 2

第4号竪穴建物跡(SI04)(図10)

[位置・確認] 1区のII M～O-5～7グリッド、標高26mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第5号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。本遺構は調査区東壁で確認したものの、隣接する水田からの湧水の影響で調査区壁の崩落が著しかったため、断面図は部分的にしか作成できなかった。第5号竪穴建物跡も同様である。[規模・平面形] 建物東側部分は調査区外にある。平面規模は南北長が582cm、東西長が581cm、検出面から床面までの深さは25cmである。床面積は22.2㎡である。壁は開きぎみに立ち上がる。建物の軸方向はN-40°-Wである。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とし、壁溝は検出できなかった。[柱穴] Pit01・03～07、09の7基を北・西壁周辺で検出した。いずれも壁柱穴である。Pit01は49×46cmの楕円形、深さは40cmである。Pit03は47×45cmの楕円形、深さは47cmである。Pit04は61×39cmの楕円形、深さは25cmである。Pit05は18×15cmの楕円形、深さは11cmである。Pit06は31×25cmの楕円形、深さは23cmである。Pit07は26×19cmの楕円形、深さは24cmである。Pit09は53×34cmの楕円形、深さは29cmである。[カマド] カマドは検出できなかった。南壁調査区壁面付近に炭化物範囲、調査区壁面で長軸35cm、短軸14cmの被熱範囲を確認した。被熱範囲は、南壁のラインから離れているためカマドではない可能性がある。[堆積土] 3層に分層した。床面直上の2層は人為堆積である。1層から火山灰を検出し、分析の結果、十和田八戸火山灰と判定された(第4章第4節)。[出土遺物] 須恵器が58.2g、土師器が942.8g、縄文土器が16.3g、石器2点、剥片4点(39.3g)、含鉄鍛冶滓99.5g、含鉄椀形鍛冶滓228.1g、椀形鍛冶滓112.3g、鍛冶滓156.3g、溶解物7.2g、炉壁4.3gが出土した。うち須恵器7点、土師器10点、石器1点、含鉄鍛冶滓1点(図56-14)、含鉄椀形鍛冶滓1点(図56-4)を図示した。須恵器は坏、壺が出土した。壺は口縁部が菱形または方形を呈し隆帯を意識しているものである。図24-7は壺体部破片である。内外面ともロクロナデを施す。土師器は坏、甕、小型甕である。坏は体部形態が緩やかに内湾するものである。甕は口縁部が強く短く外反し胴が長いものである。図24-13は体部内面に靨痕を有するものである。石器は使用痕のある剥片2点と砥石である。砥石は円礫を素材とする。長軸両端に敲打痕がみられる。[小結] 出土遺物から平安時代の竪穴建物跡とみられる。床面出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、774～885calAD(2σ)であり、考古学的所見と矛盾しない(第4章第1節参照)。

第5号竪穴建物跡(SI05)(図11)

[位置・確認] 1区のII N～P-5・6グリッド、標高26mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第4号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 建物東側部分は調査区外である。平面規模は南北長が539cm、東西長が443cm、検出面から床面までの深さは27cmである。床面積は16.3㎡である。壁は開きぎみに立ち上がる。建物の軸方向はN-40°-Wである。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とする。壁溝は西壁で検出し、幅13～26cmで深さ19cmである。壁溝南端に壁溝底面より7cmの深い円形の掘り込みが確認でき、柱穴の可能性はある。[柱穴] Pit02・08・10・11の4基を壁周辺で検出した。Pit02は36×32cmの楕円形、深さは22cmである。Pit08は47×46cmの円形、深さは35cmである。柱痕跡を確認した。Pit10は50×39cmの楕円形、深さは34cmである。Pit11は38×25cmの楕円形、深さは35cmである。[カマド] 検出できなかった。[堆積土] 単層の人為堆積である。[出土遺物] 須恵器が5.1g、土師器が181.5g、縄文土器が13.4g、剥片1点(0.5g)出土した。このうち須恵

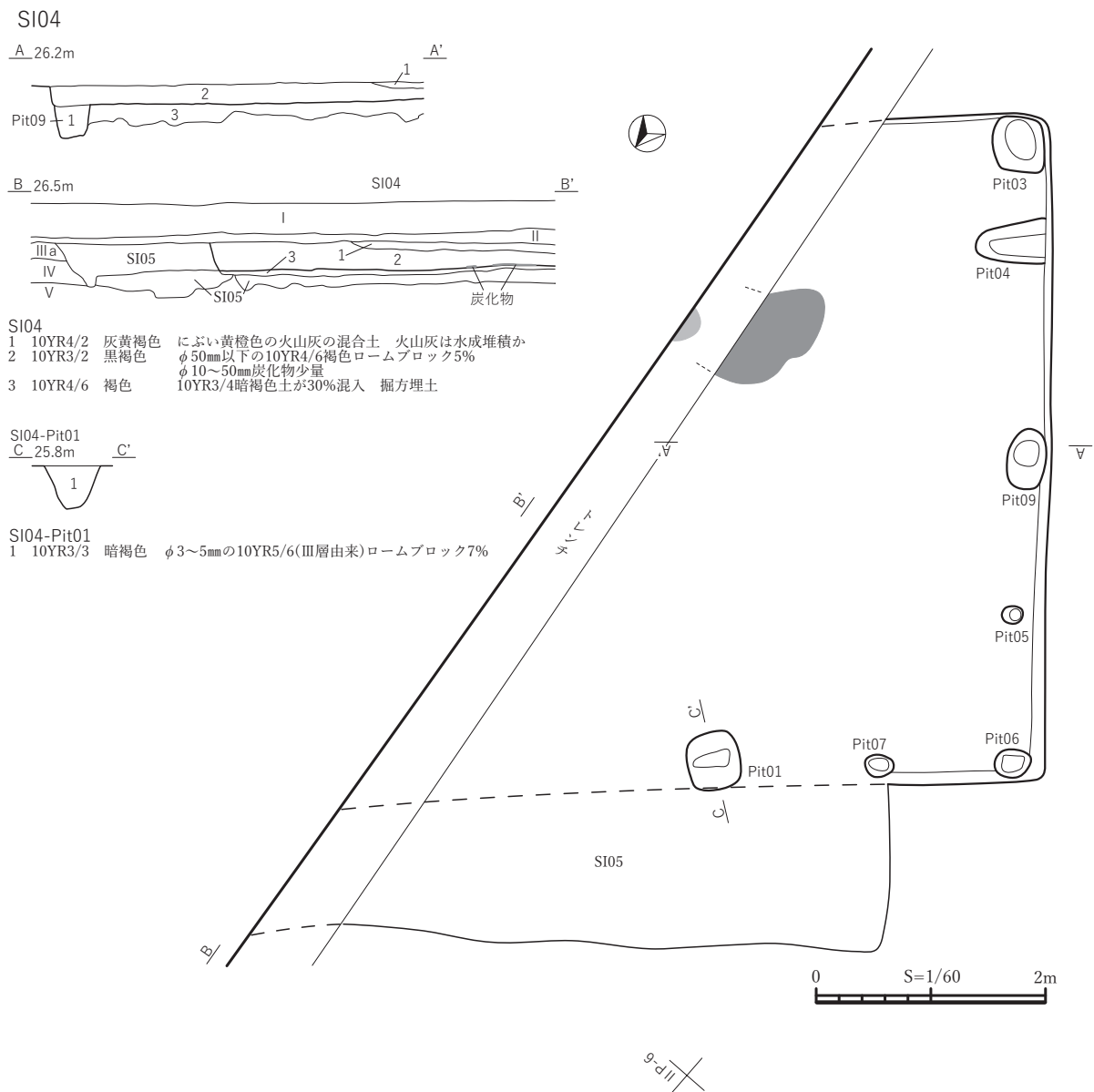


図10 竪穴建物跡 3

器1点を図化した。[小結] 重複関係と出土遺物から平安時代の竪穴建物跡とみられる。

第7号竪穴建物跡(新)(SI07(新))(12~15図)

[位置・確認] 1区のII区~T-4・5グリッド、標高26mの平坦面に位置し、III層中で確認した。掘立柱建物跡を構成する柱穴は第4号溝跡の完掘時に検出した。本遺構は竪穴建物跡とその南側に併設する掘立柱建物跡で構成される。第19号土坑、第4号溝跡と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 建物西側部分は後世の削平を受けている。平面規模は竪穴建物跡部分で南北長が685cm、東西長が648cm、検出面から床面までの深さは31cmである。床面積は39.4㎡である。壁は開きぎみに立ち上がる。建物の軸方向はN-154°-Eである。掘立柱建物跡部分は3間×2間である。西列で5m、南列で4.7m、建物面積は23.5㎡である。掘立柱建物跡を含めた棟の長さは11.8mである。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とし、壁溝は竪穴内の東壁と南壁の中央寄りから検出し、全周しない。壁溝の幅は

14cmで深さ7cmである。[柱穴] Pit01・02、04～07・09～12・21・23の12基を検出した。主柱穴はPit02・04・07・09である。Pit01は24×20cmの楕円形、深さは7cmである。Pit02は66×52cmの楕円形、深さは50cmである。Pit04は51×46cmの楕円形、深さは61cmである。Pit05は32×30cmの楕円形、深さは38cmである。Pit06は31×31cmの円形、深さは22cmである。Pit07は71×68cmの楕円形、深さは53cmである。Pit09は51×39cmの楕円形、深さは60cmである。Pit10は44×30cmの楕円形、深さは31cmである。Pit11は26×20cmの楕円形、深さは20cmである。Pit12は30×28cmの円形、深さは32cmである。Pit21は43×41cmの楕円形、深さは40cmである。Pit23は42×35cmの楕円形、深さは65cmである。掘立柱建物跡を構成する柱穴は11基確認した。20～40cmの掘方をもち、一部は柱痕跡が確認できる。SP09は25×23cmの楕円形、深さは17cmである。SP10は36×30cmの楕円形、深さは26cmである。SP13は25×24cmの楕円形、深さは33cmである。SP42は36×34cmの楕円形、深さは73cmである。SP43は35×23cmの楕円形、深さは47cmである。SP44は31×27cmの楕円形、深さは31cmである。SP53は36×30cmの楕円形、深さは32cmである。SP54は16×13cmの楕円形、深さは25cmである。SP55は32×24cmの楕円形、深さは39cmである。柱痕跡を確認した。SP57は20×15cmの楕円形、深さは24cmである。SP58は28×22cmの楕円形、深さは12cmである。SP60

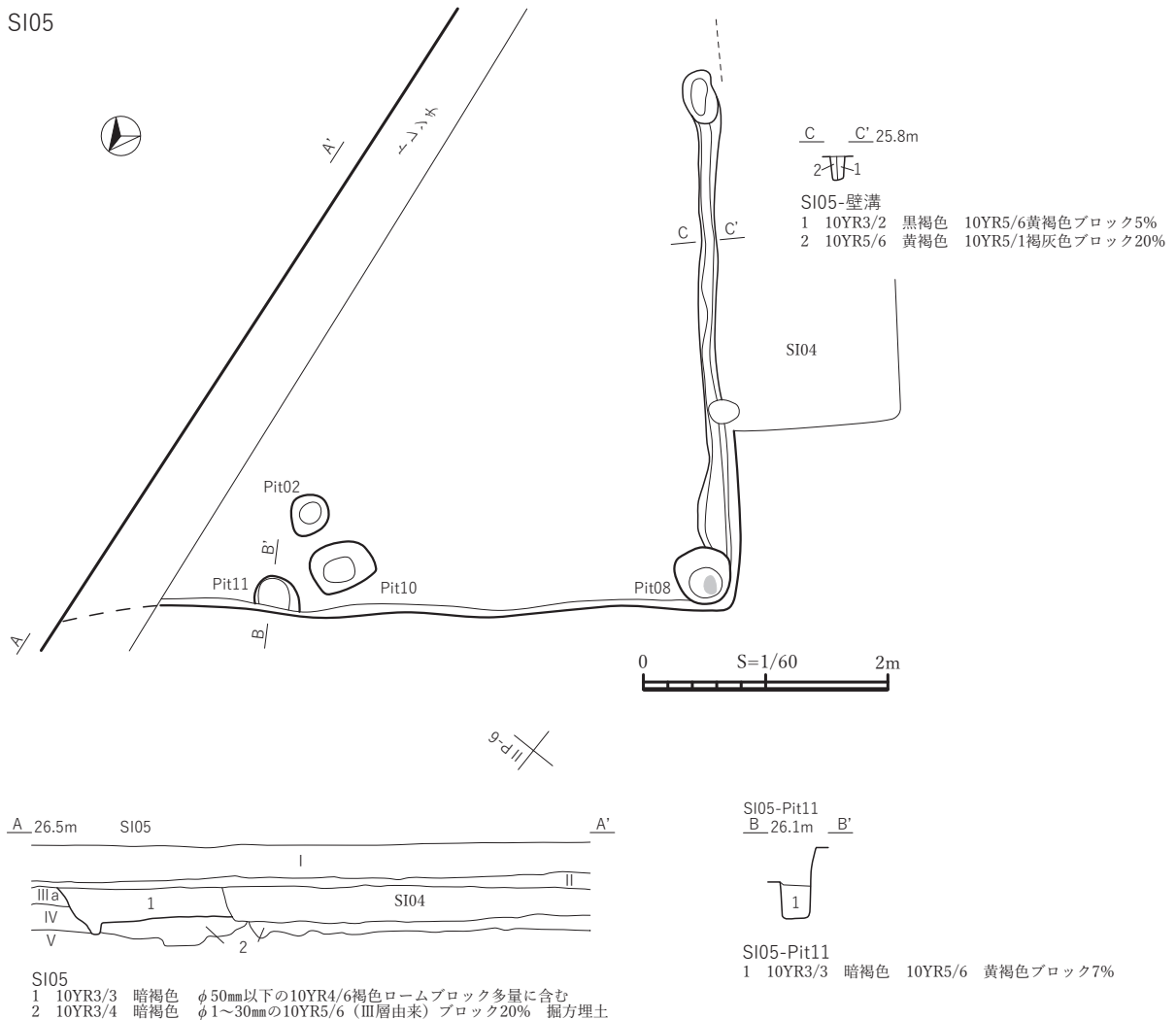


図11 竪穴建物跡 4

は43×35cmの楕円形、深さは30cmである。[カマド] 南壁中央から西寄りで検出し、火床面と袖、煙道を確認した。袖は最大で22cmの高さが残存していた。軸方向はN-154° -Eである。火床面の範囲は58cm×55cm、深さ7cmまで被熱する。カマド堆積土2層、3層の層理面で土器が面的に広がる状況を確認した。火床面の奥で土師器甕底部(図27-9)が伏せた状態で出土した。煙道は半地下式で床面から約2°の傾斜で緩やかに立ち上がる。煙道の長さは87cmである。南壁から103cmのところまで煙出しピットを検出した。煙出しピットの上端径は56×50cm、深さ28cmである。[その他の施設] 土坑2基(SK01、02)と焼土範囲(SN01、02)を検出した。SK01、02ともにカマド左袖付近で確認し、いずれも人為堆積である。SK01は長軸65cm、短軸52cmの平面楕円形、深さが13cmである。1層から逆位の状態の坏(図26-1)と甕破片(図50-14)が出土した。SK02は長軸50cm、短軸41cmの平面楕円形、深さが22cmである。SN01は長軸66cm、短軸36cmの平面楕円形、深さ2cmまで被熱する。SN02は長軸66cm、短軸54cmの不整形、深さが14cmである。断面を観察した結果、焼土を埋めた遺構と判断した。[堆積土] 7層に分層した。4～6層はSI07(新)構築時に第7号竪穴建物跡(旧)のカマド火床面(SN03)付近の窪みを埋める貼床層である。2層から火山灰を検出した。分析の結果、白頭山苦小牧火山灰と判定された(第4章第4節)。**[出土遺物]** 須恵器が1,045.6g、土師器が9,338.4g、縄文土器が38g、石器4点、剥片3点(5.9g)、含鉄椀形鍛冶滓278.6g、椀形鍛冶滓96.7g、鍛冶滓98.9g、溶解物2.2g、炉壁8.4gが出土した。うち土師器45点、須恵器18点、石器2点、含鉄椀形鍛冶滓2点(図56-5・6)、椀形鍛冶滓2点(図56-9・10)を図示した。なお堆積土から出土した遺物の中には第3号竪穴建物跡、第8・17号土坑、第4号溝跡、Pit13から出土した遺物と接合関係が認められるものがある。須恵器は坏、壺が出土した。坏は体部形態が緩やかに内湾するものである。図25-2・6・7・8・9は火襷、図25-2には※状のヘラ記号がみられる。図25-3の内面には黒色物質の付着が観察される。拡大すると黒色物質は粉状で乾燥による剥落などが認識されないため、漆ではないと判断した。壺は口縁部は菱形または方形を呈し隆帯を意識しているものである。図25-16の口頸部内面には粘土接合痕が残存しており、口頸部と体部を接合した後、器壁表面を工具で押し引いてリング状突帯を作出した製作過程が把握できる。土師器は坏・甕・小型甕・埴が出土した。坏は体部が直線的なものが多く、本遺構から出土した須恵器と比較して対照的である。図26-12は内面に黒色処理を施したものである。図27-4・5の外面には、3～4本の稜線一組がみられる。一見すると須恵器のタタキに類似するが沈線部の砂粒が一方に移動していることから、焼成前の粘土が軟質なときに、粗い調整により作出された痕跡と判断した。石器は砥石と磨石で、2点図示した。図28-11は機能面が平坦でありかつ線条痕が認められることから、金属製品に使用したと考えられる。堆積土からは被熱し黒色化または赤色化した礫が96.5g、床面から466.8g出土した。**[小結]** 本遺構は竪穴・掘立柱併用建物である。床面は建物南東隅が周囲よりわずかに高く、壁溝がめぐることから、用途が異なる可能性がある。出土遺物や火山灰分析から平安時代の掘立柱建物跡が併設する竪穴建物跡とみられる。カマド火床面出土炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、668～774calAD(2σ)という結果を得た(第4章第1節参照)。考古学的所見より古い年代を示しており、古木効果による影響と考える。

第7号竪穴建物跡(旧)(SI07(旧))(図14・15)

[位置・確認] 1区のII R～T-4・5グリッド、標高25.8m～25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認

した。第7号竪穴建物跡の床面直上にある3層を除去した際、中央南東寄りが周囲に比べわずかに高い状況にあった。確認のためサブトレンチを入れたところ、粘土層の下から強く被熱した範囲が確認できた。また竪穴建物跡内の柱穴と重複する古い柱穴が認められたことから、竪穴建物が建て替えられたものと判断し、古期の本建物をSI07(旧)とした。[規模・平面形] 建物西側部分は後世の攪乱による削平を受けている。柱穴の位置から推定される平面規模が南北長565cm、東西長535cm、床面積は29.5㎡である。建物の軸方向はN-157° -Eと推定できる。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とし、壁溝は確認できなかつた。SI07(新)と床面を共有する。[柱穴] Pit03・08・13~18・22の9基を検出した。支柱穴はPit03・08・15・18である。なおPit19、20は整理時に遺構ではないと判断し除外した。Pit03は73×44cmの楕円形、深さは34cmである。Pit08は58×55cmの楕円形、深さは51cmである。柱痕跡を確認した。Pit13は37×30cmの楕円形、深さは16cmである。Pit14は32×30cmの楕円形、深さは31cmである。Pit15は52×33cmの楕円形、深さは19cmである。Pit16は35×35cmの楕円形、深さは11cmである。Pit17は46×34cmの楕円形、深さは24cmである。Pit18は57×47cmの楕円形、深さは61cmである。柱痕跡を確認した。Pit22は27×21cmの楕円形、深さは16cmである。[カマド] 南壁中央から東寄りで検出した被熱範囲(SN03)を火床面、その南側に位置するSK03が煙出しと推定される。軸方向はN-159° -Eで建物の軸方向と概ね一致する。火床面の範囲は68×61cm、深さ7cmまで被熱が及ぶ。煙道は半地下式で床面から約2°の傾斜で緩やかに立ち上がる。煙道の長さは42cmである。煙出しの上端は62×50cm、深さ20cmである。[堆積土] 掘方埋土のみ確認した。[出土遺物] 遺物は出土しなかつた。[小結] 堆積土や遺構の形状、重複関係から平安時代の竪穴建物跡とみられる。

第8号竪穴建物跡(SI08)(図16)

[位置・確認] 1区のII M・N-4・5グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第2・3・6・7号土坑と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 平面規模は南北長が255cm、東西長が277cm、検出面から床面までの深さは16cmである。床面積は6.3㎡である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。建物の軸方向はN-153° -Wである。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とする。壁溝は全周し、幅7cm、深さ24~27cmである。[柱穴] Pit01~03を検出した。Pit01は17×15cmの楕円形、深さは28cmである。Pit02は19×15cmの楕円形、深さは28cmである。Pit03は19×14cmの楕円形、深さは24cmである。[カマド] カマドは検出できなかつたものの、南壁西寄りに被熱範囲を確認した。長軸64cm、短軸58cm、深さ7cmまで被熱が及ぶ。[その他の施設] 土坑1基(SK01)を検出した。堆積土は人為堆積の様相を示す。長軸51cm、短軸46cmの平面円形、深さが15cmである。[堆積土] 4層に分層し、1層が自然堆積、2層が人為堆積である。1層から火山灰を検出した。分析の結果、白頭山苦小牧火山灰と判定された(第4章第4節)。[出土遺物] 須恵器が166g、土師器が409g、石器は石核、凹石、使用痕のある剥片2点、剥片2点出土した。うち土師器5点、須恵器1点、石器2点を図示した。床面からは被熱し黒色化した礫が1,043.8g出土した。須恵器は甕破片である。土師器は甕と小型甕である。いずれも口縁部の外反が弱く直線に近いものである。石器は凹石と石核を図示した。形態から縄文時代と判断できるが、図29-7は再利用した可能性がある。[小結] 出土遺物から平安時代の竪穴建物跡とみられる。

SI07(新)

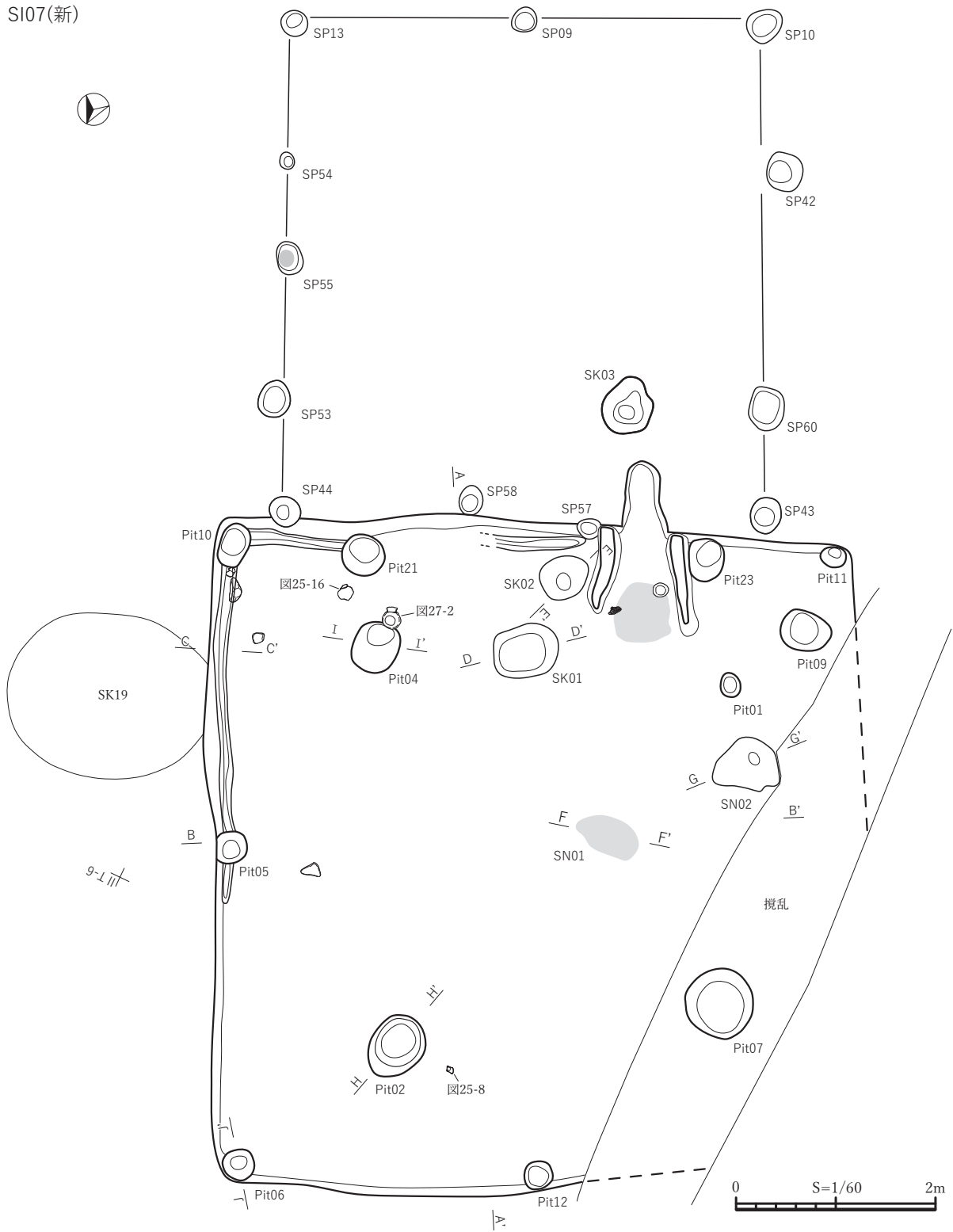


図12 竪穴建物跡 5

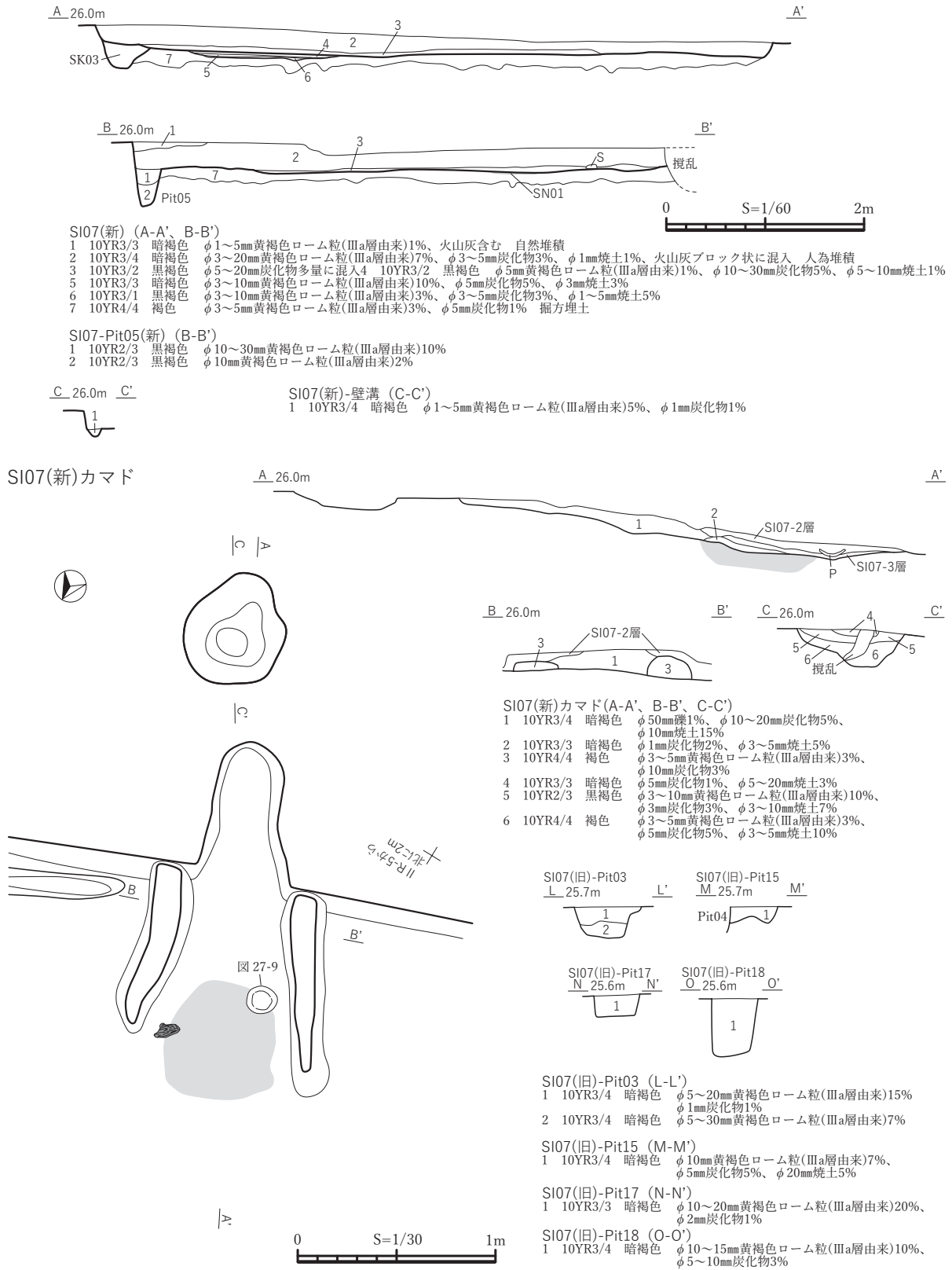
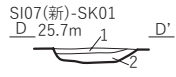
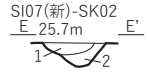


図13 竪穴建物跡 6



SI07(新)-SK01 (D-D')
1 10YR3/2 黒褐色 φ5mm黄褐色ローム粒(Ⅲa層由来)5%、φ10mm炭化物1%、φ5~10mm焼土10%
2 10YR3/3 暗褐色 φ5~10mm黄褐色ローム粒(Ⅲa層由来)10%、φ10mm炭化物1%、φ10mm焼土1%



SI07(新)-SK02 (E-E')
1 10YR3/4 暗褐色 φ3~10mm黄褐色ローム粒(Ⅲa層由来)10%、φ5~10mm炭化物3%、φ1mm焼土2%
2 10YR3/3 暗褐色 φ3~20mm黄褐色ローム粒(Ⅲa層由来)3%、φ10mm炭化物1%、φ1mm焼土1%

SI07(旧)

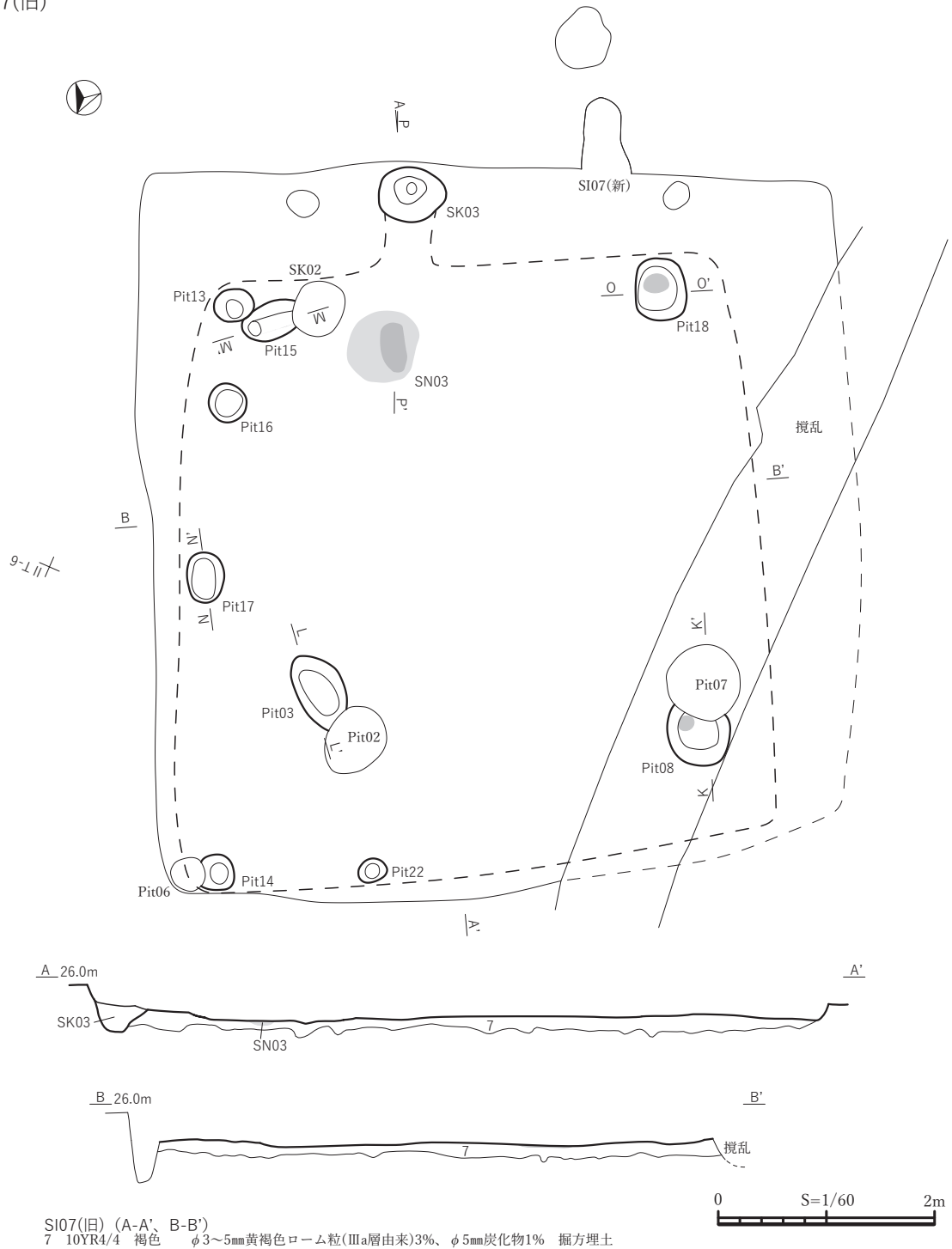


図14 竪穴建物跡 7

SI07(旧)カマド ト

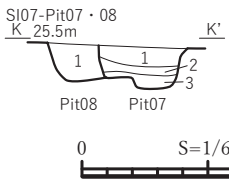
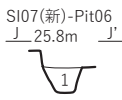
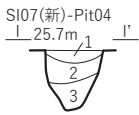
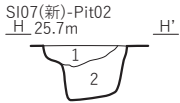
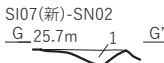
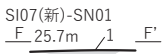
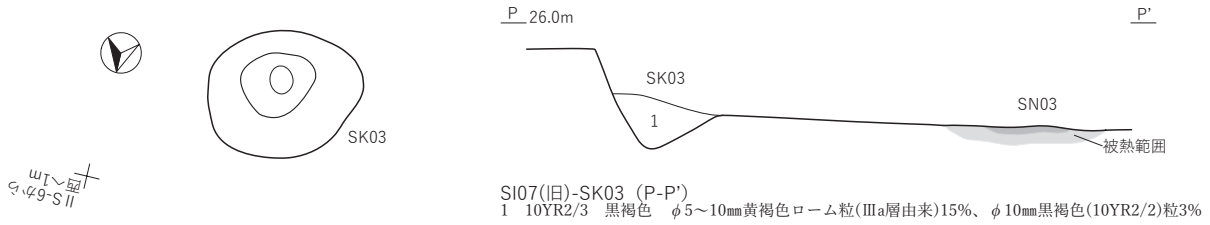


図15 竪穴建物跡 8

第10号竪穴建物跡(SI10)(図17)

[位置・確認] 1区のII I~K-5・6グリッド、標高26.2mの平坦面に位置し、VI層中で確認した。北壁は一部を除き壁溝のみ残存する。[規模・平面形] 建物西側部分は後世の攪乱による削平を受けている。平面規模は南北長が507cm、東西長が588cm、検出面から床面までの深さは30cmである。床面積は26.7㎡である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。建物の軸方向はN-146° -Eである。[床面・壁溝] 掘方埋土を床とし、壁溝は西壁を除き残存し、幅20cmで深さ15cmである。[柱穴] Pit01-02を検出した。Pit01は35×33cmの楕円形、深さは24cmである。Pit02は47×42cmの楕円形、深さは25cmである。[カマド] 南壁中央から西寄りでカマドを検出し、火床面と袖、煙道が残存する。袖は最大で19cmの高さが残存する。軸方向はN-142° -Eで建物の軸方向と概ね一致する。火床面の範囲は43cm×41cm、深さ7cmまで被熱が及ぶ。袖上面で土師器甕(図30-9)が出土した。煙道は半地下式で床面から約8°の傾斜で立ち上がる。煙道の長さは33cmである。[堆積土] 6層に分層した。5層が壁溝、6層が掘方埋土である。2層から黄色と白色の火山灰を検出した。分析では黄色をY、白色をWで表記した。分析の結果、いずれも白頭山苦小牧火山灰と判定された(第4章第4節)。[出土遺物] 須恵器が154.8g、土師器が5,053.4g、縄文土器が41.6g、石器1点、含鉄鍛冶滓125.7gが出土した。うち土師器31点、含鉄鍛冶滓1点(図56-15)、石器は線刻礫を図示した。石質が砥石と同じデイスイトであるが、砥石のような平滑面がないこと、表面に確認される痕跡が金属器による鋭利なものではないことから砥石ではなく線刻礫という名称を用いた。須恵器は細片のため図示しなかった。なお堆積土から出土した遺物の中には第3号竪穴建物跡から出土した遺物と接合関係が認められ

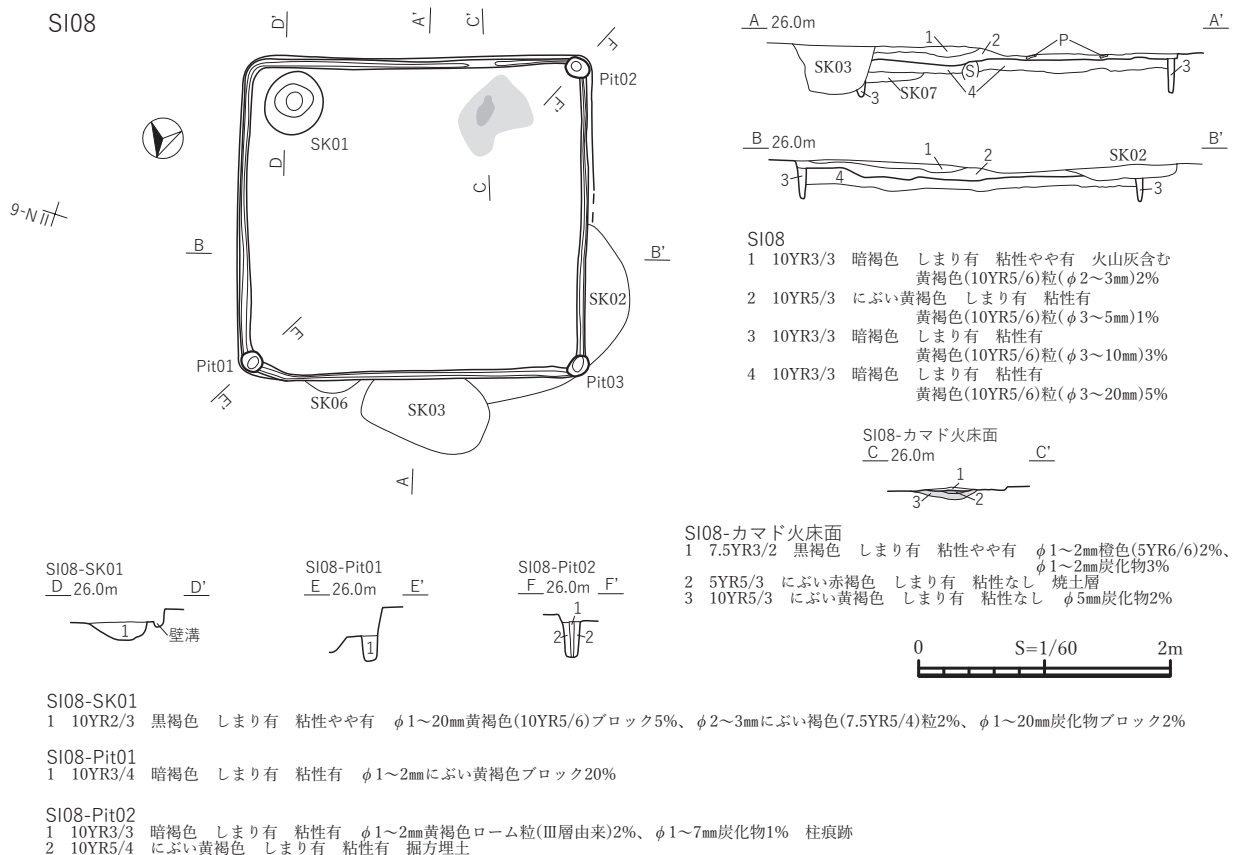


図16 竪穴建物跡 9

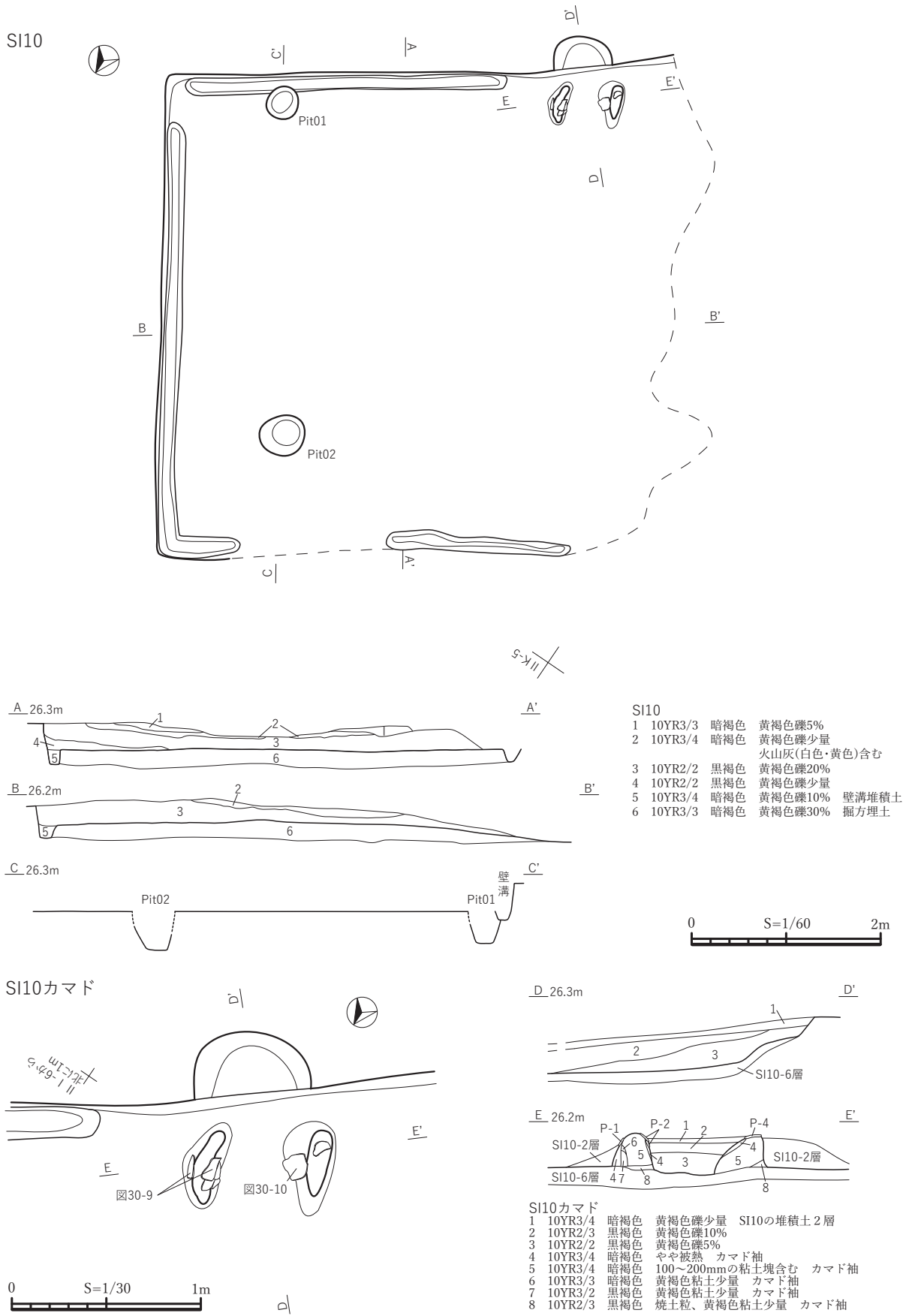


図17 竪穴建物跡 10

第3号竖穴建物跡

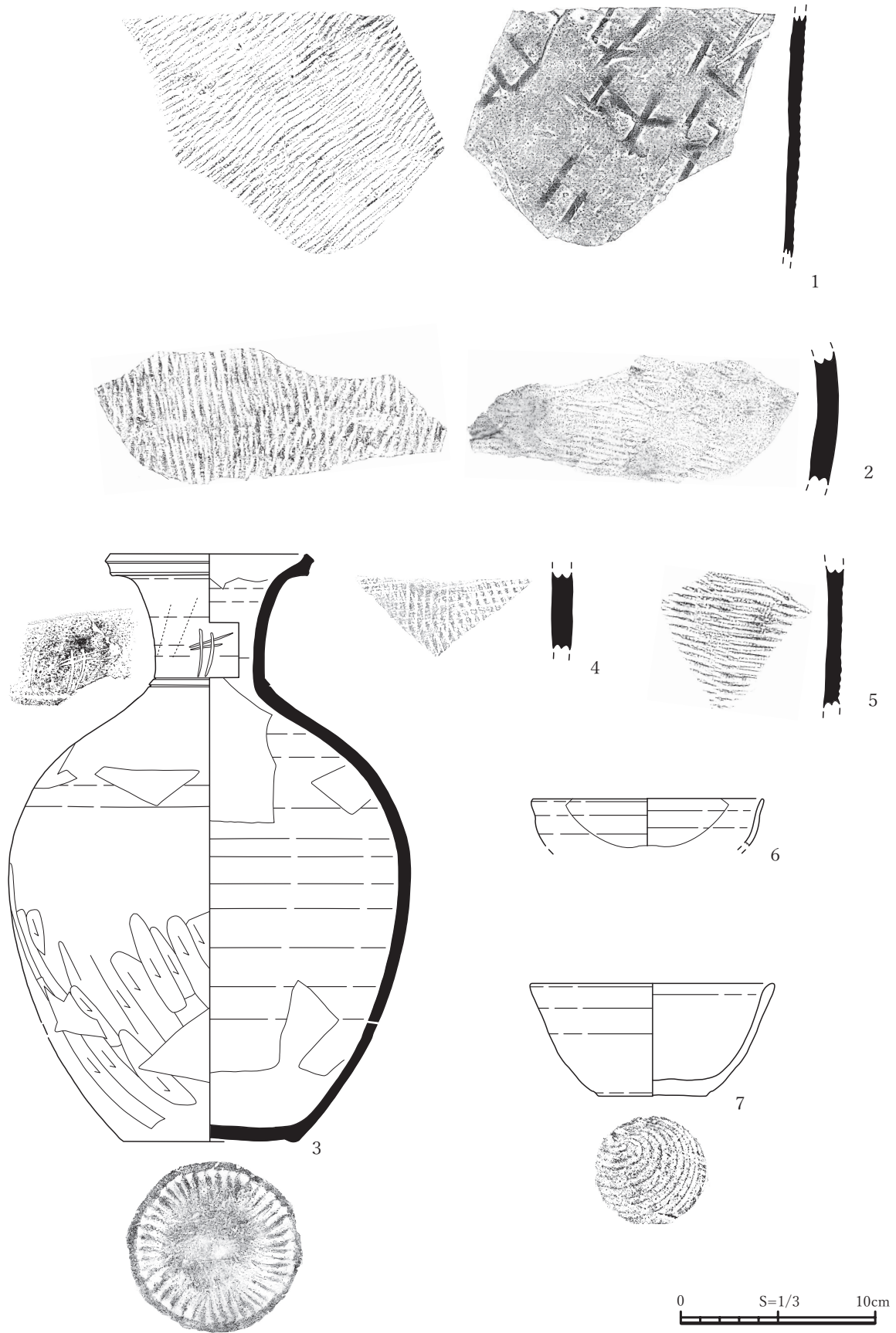


図18 竖穴建物跡出土遺物 1

第3号竖穴建物跡

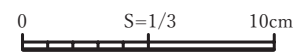
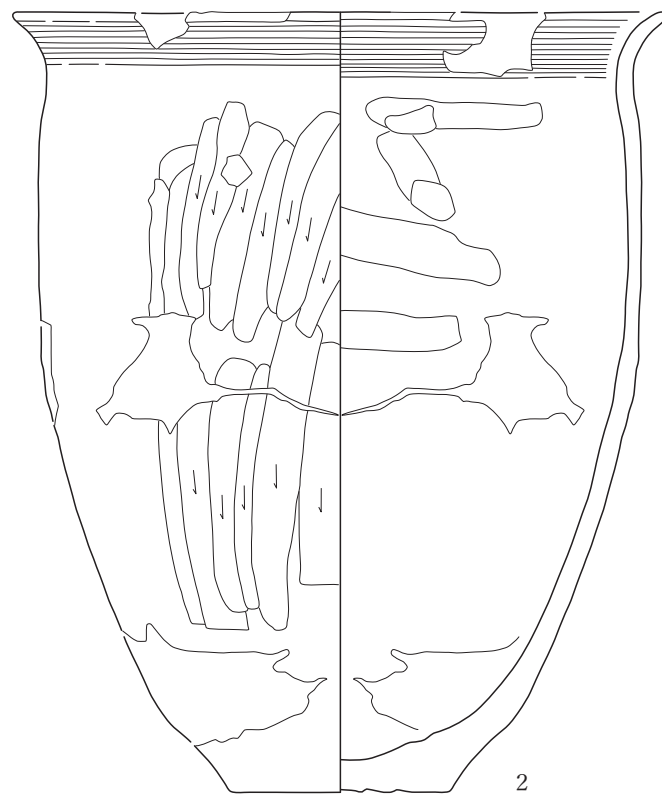
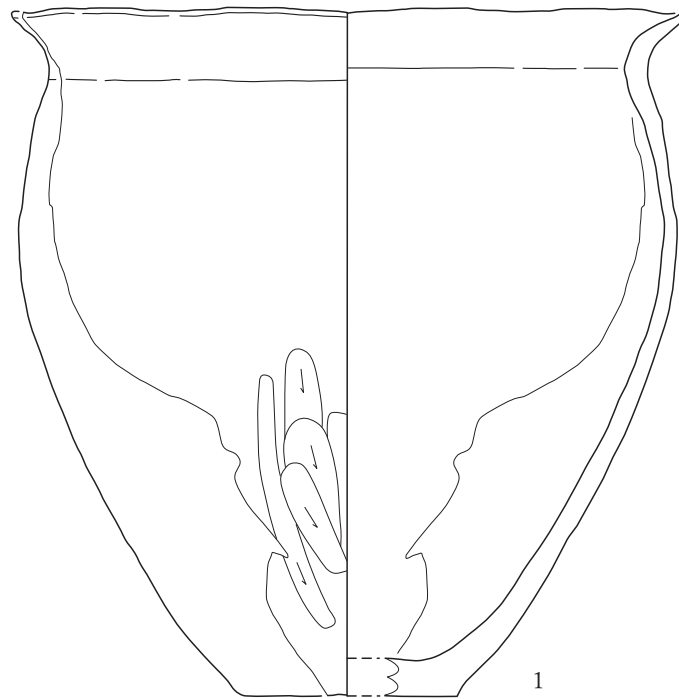


図19 竖穴建物跡出土遺物 2

第3号竪穴建物跡

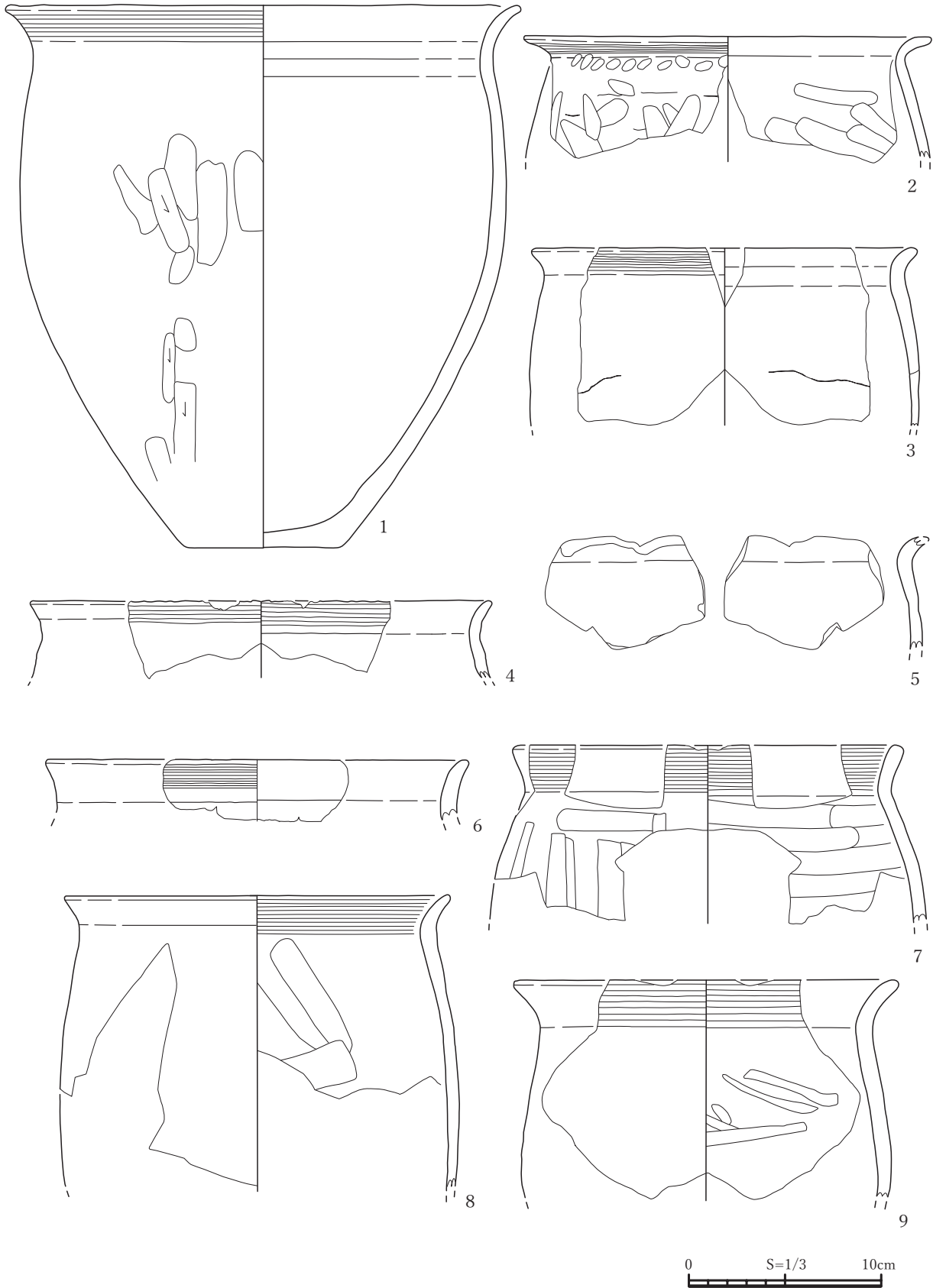


図20 竪穴建物跡出土遺物 3

第3号竖穴建物跡

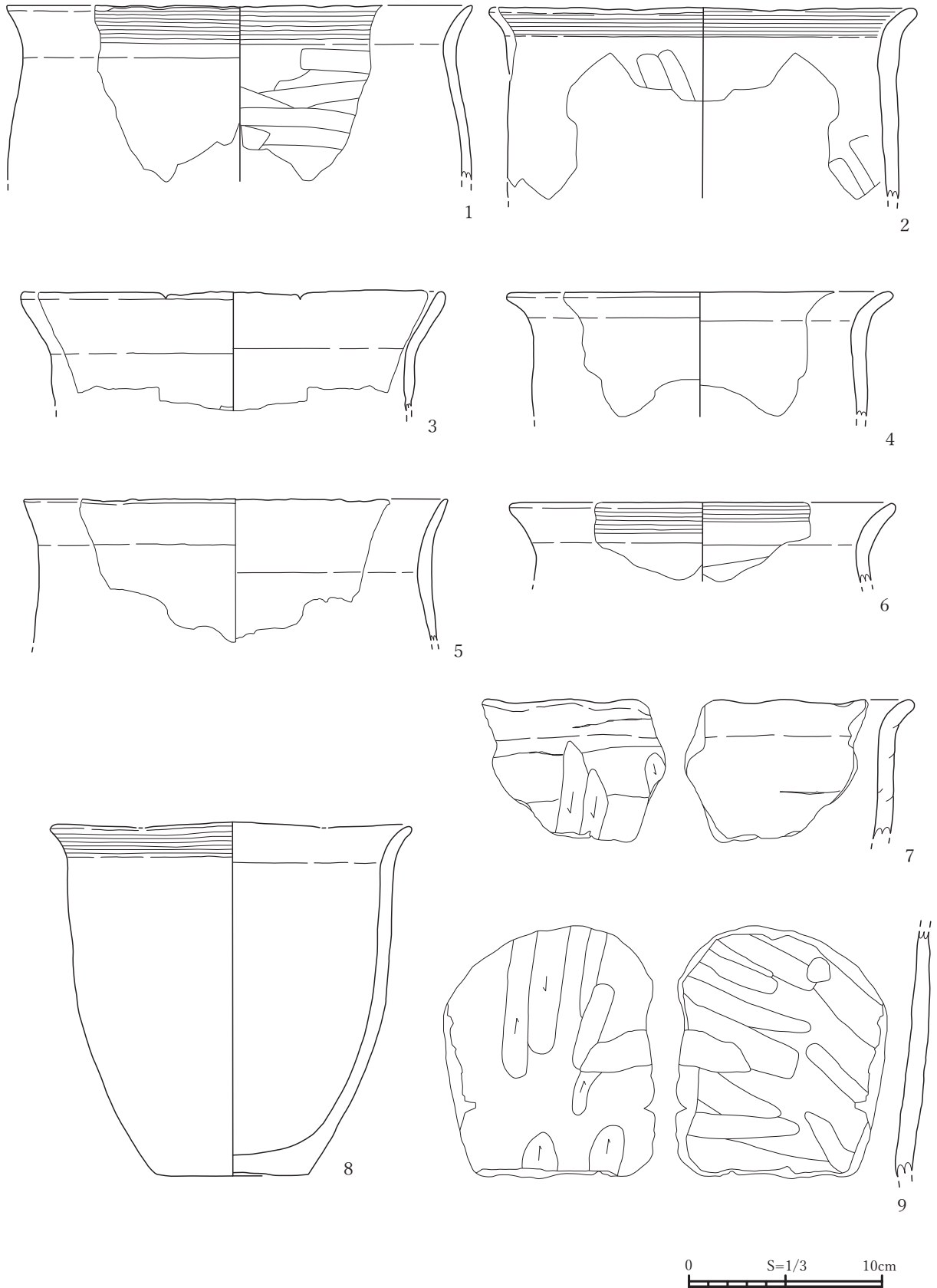


図21 竖穴建物跡出土遺物 4

第3号竖穴建物跡

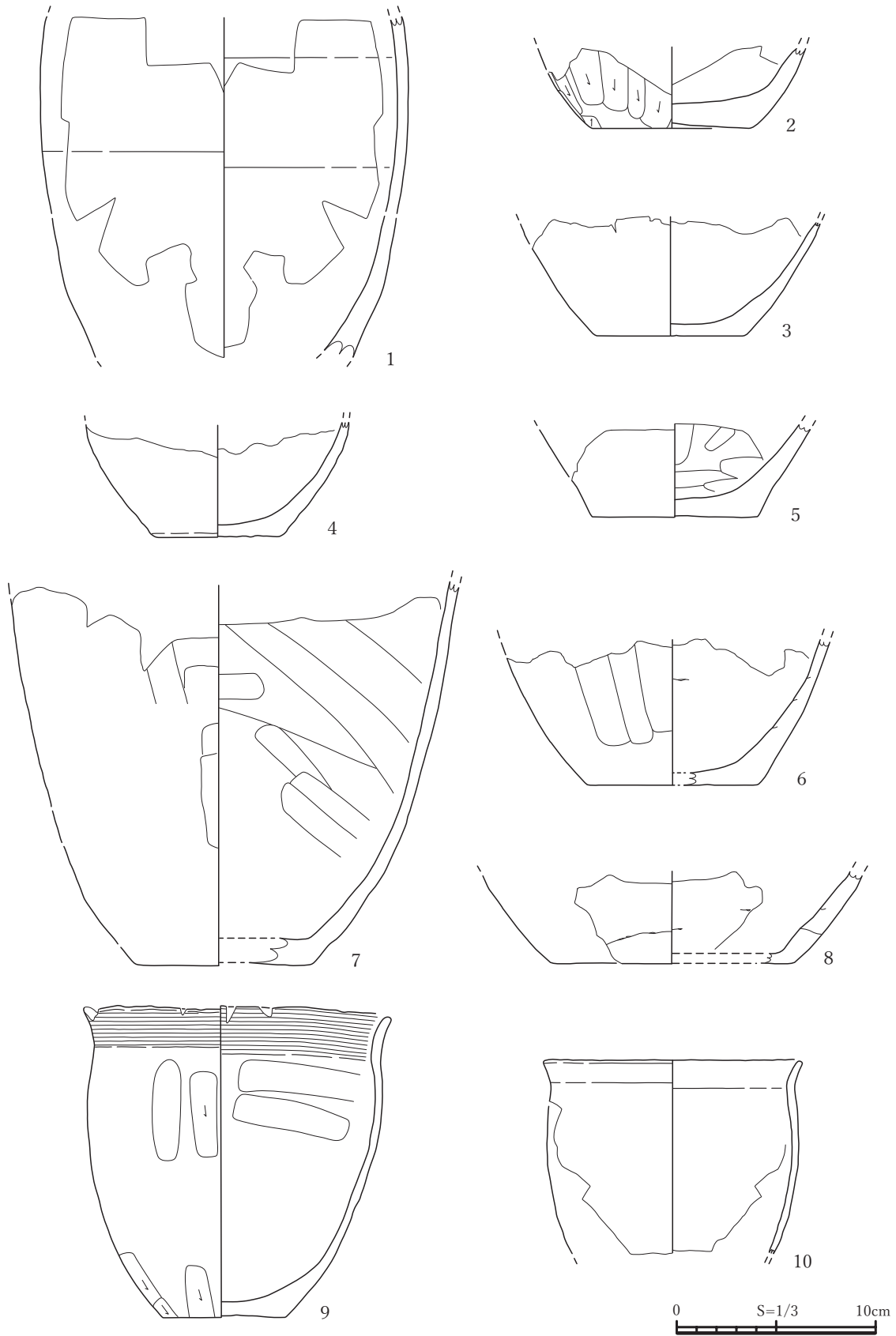


图22 竖穴建物跡出土遺物 5

第3号竖穴建物跡

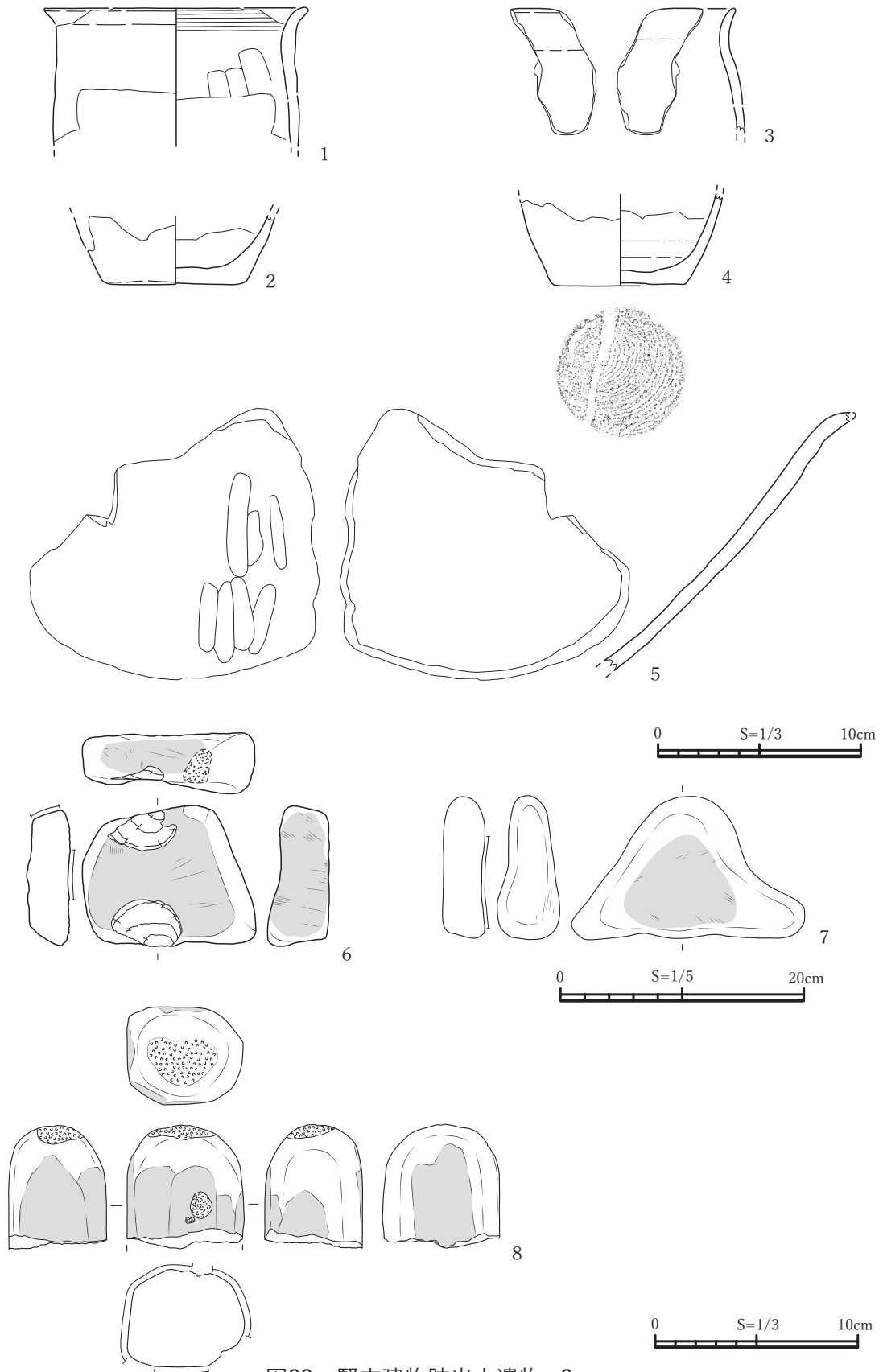


図23 竖穴建物跡出土遺物 6

第4号 竖穴建物跡

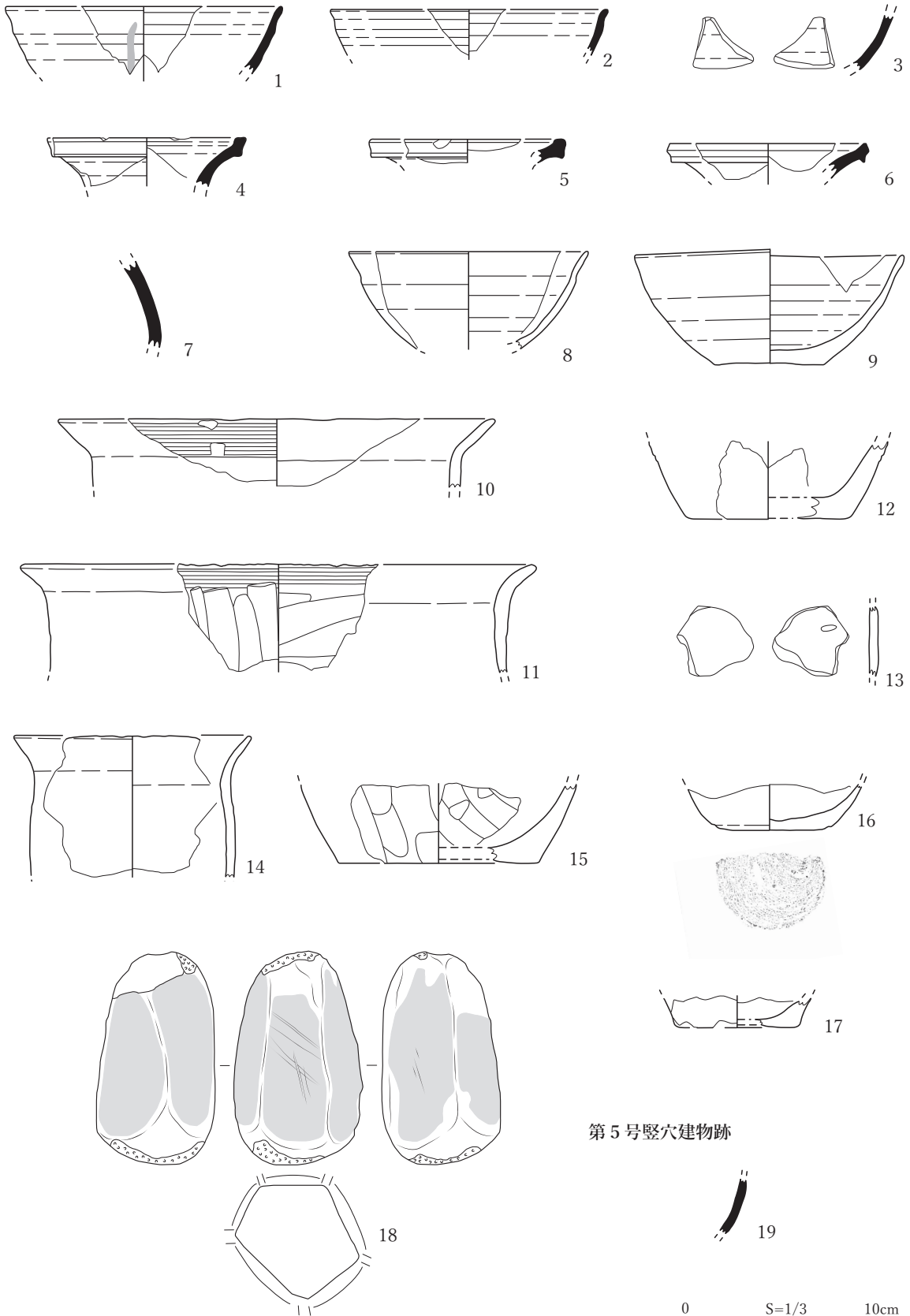


图24 竖穴建物跡出土遺物 7

第7号竖穴建物跡

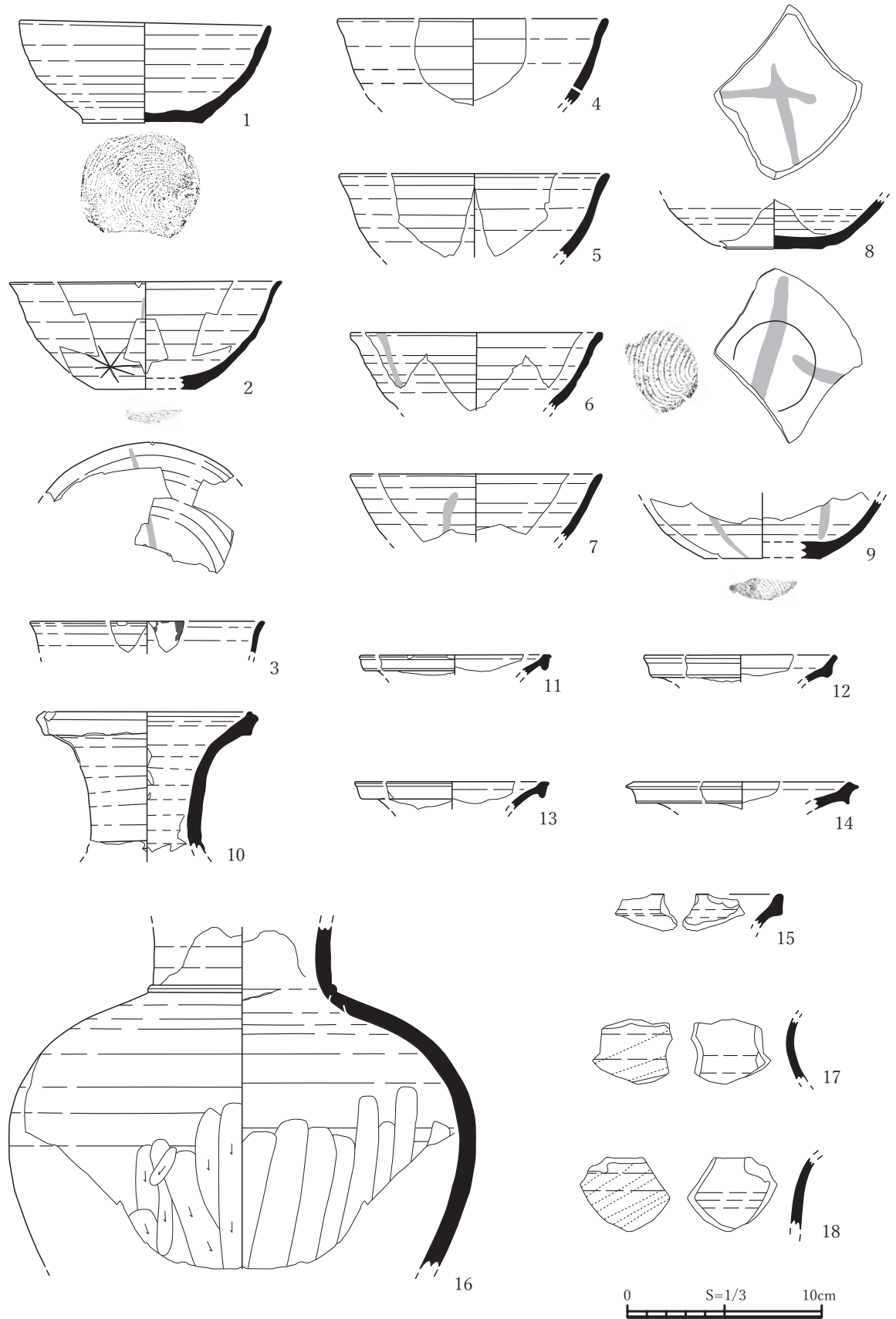


図25 竖穴建物跡出土遺物 8

第7号竖穴建物跡

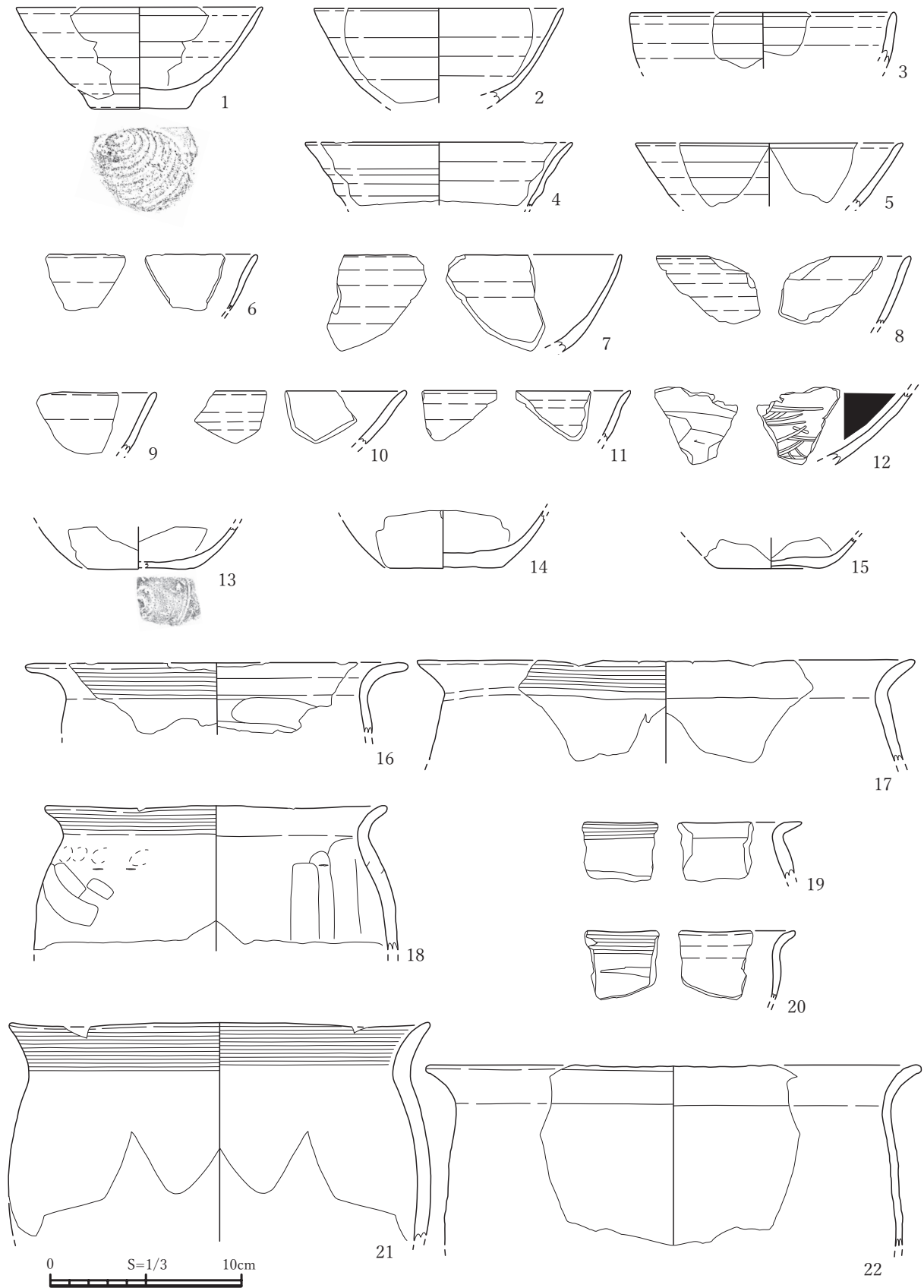


图26 竖穴建物跡出土遺物 9

第7号竖穴建物跡

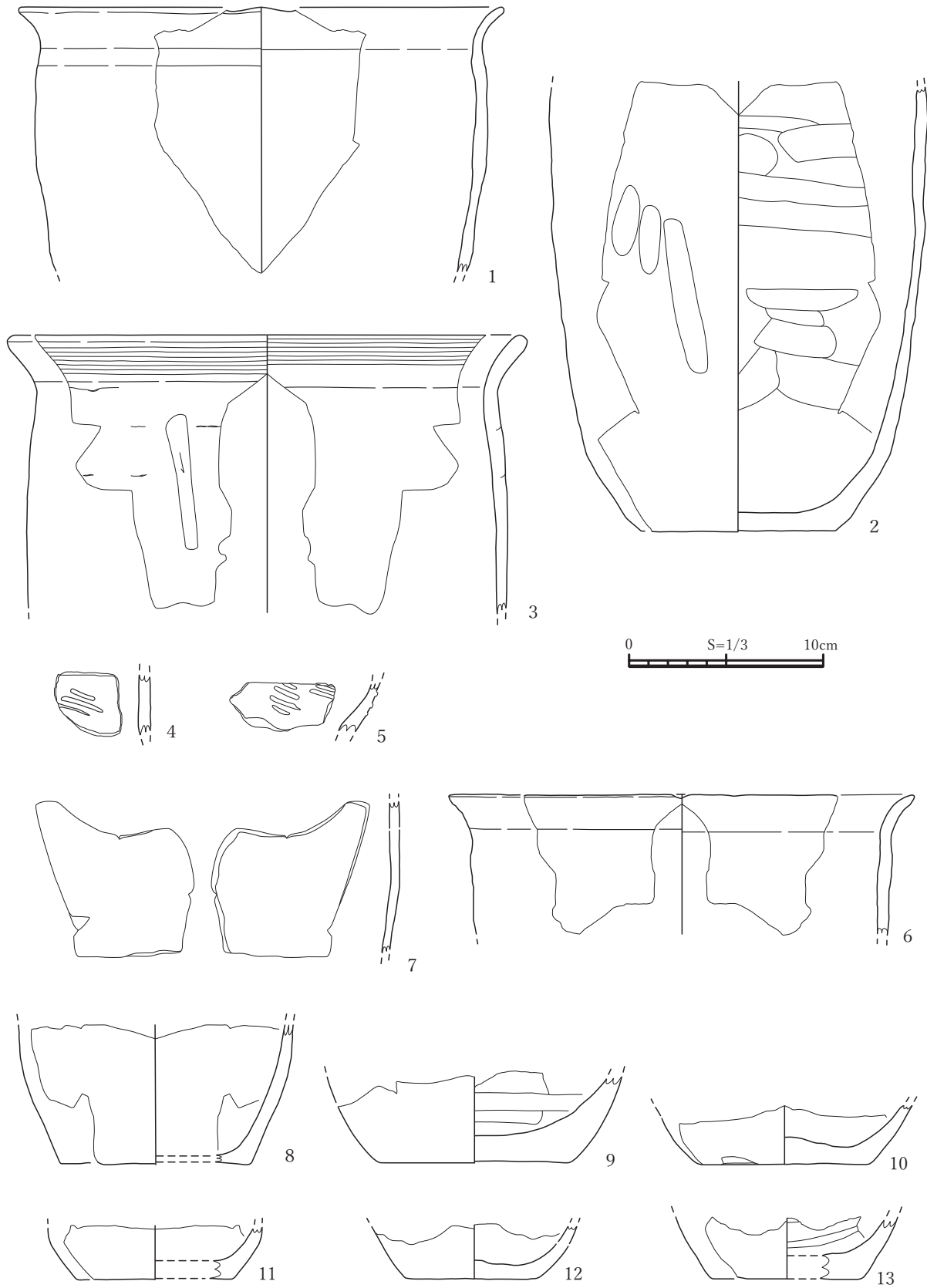


図27 竖穴建物跡出土遺物 10

第7号竪穴建物跡

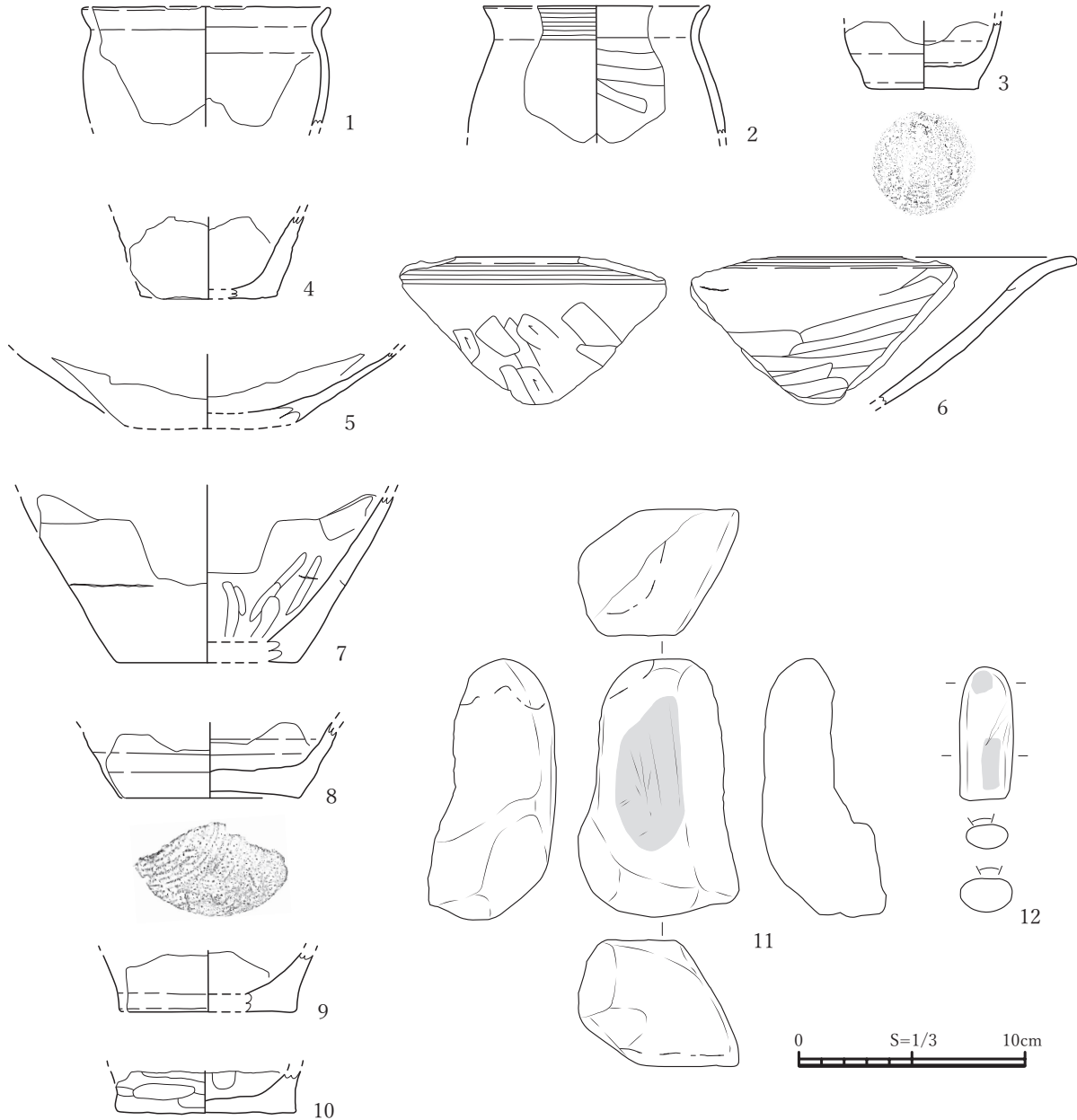


図28 竪穴建物跡出土遺物 11

るものがある。土師器は坏、甕、小型甕、埴が出土した。坏は体部形態が緩やかに内湾する。図30-6は内面黒色処理を施すものである。甕は口縁部が強く短く外反し胴が長いものが多い。小型甕は口縁部の外反が弱く直線に近いものがある。このうち図31-6・7は胎土の色調や法量、ロクロ調整であることから同一個体と考えられるものであり、口縁部直下につば状の突起を有するもので、特殊である。[小結] 出土遺物から平安時代の竪穴建物跡とみられる。カマド前庭部出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、774~891calAD(2σ)という結果であり、考古学的所見と矛盾しない(第4章第1節参照)。

第8号竖穴建物跡

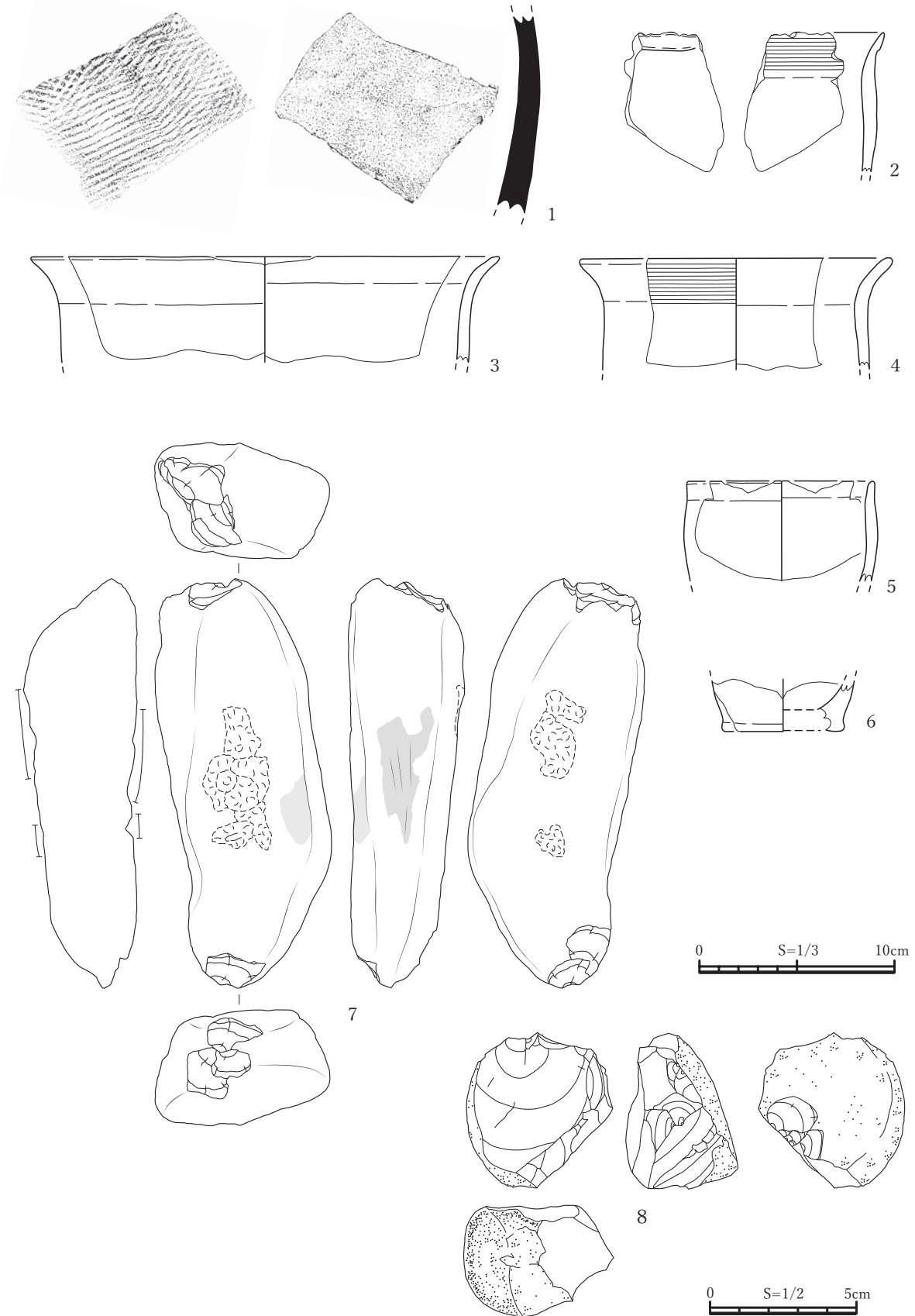


図29 竖穴建物跡出土遺物 12

第10号竖穴建物跡

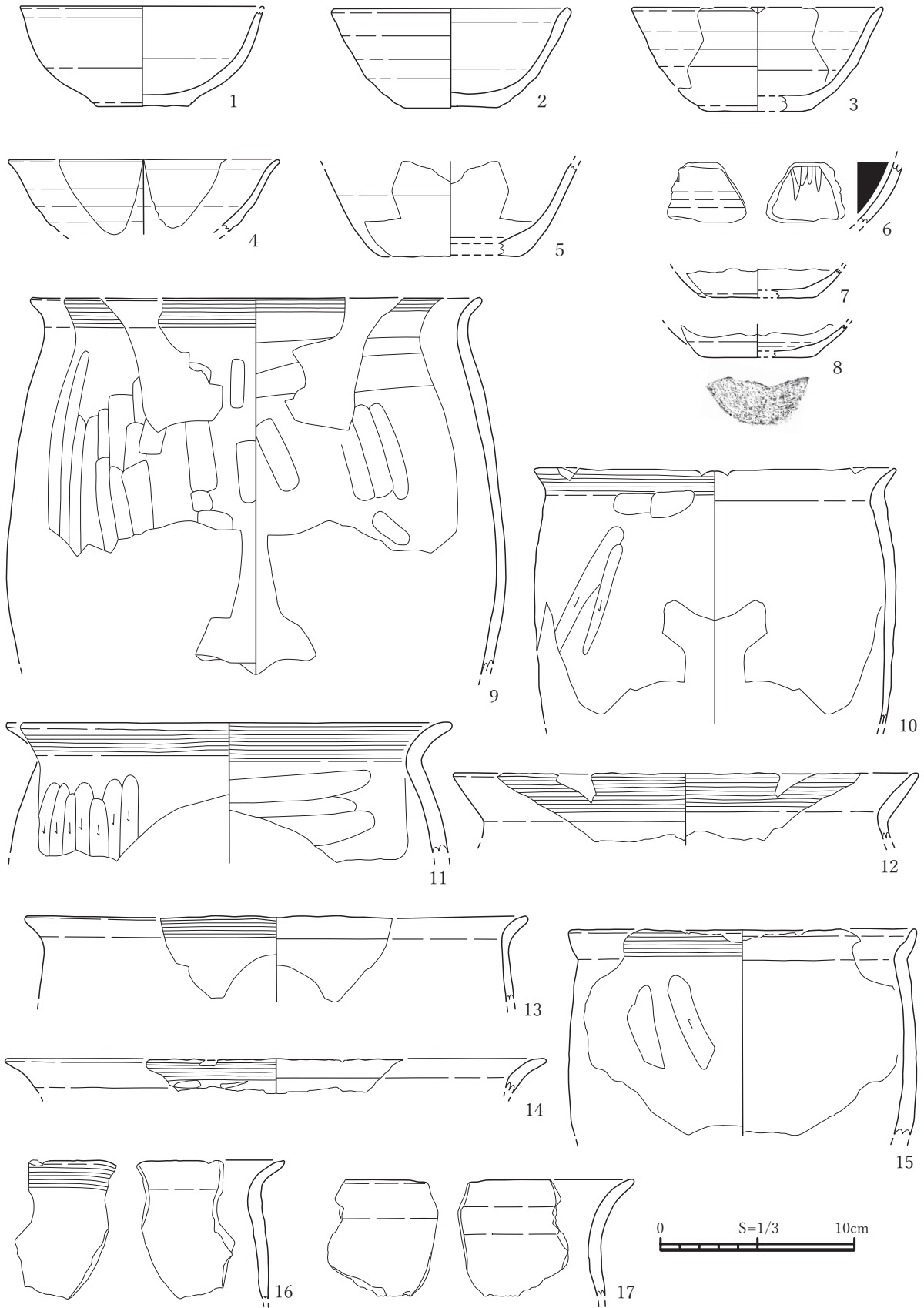


図30 竖穴建物跡出土遺物 13

第10号竖穴建物跡

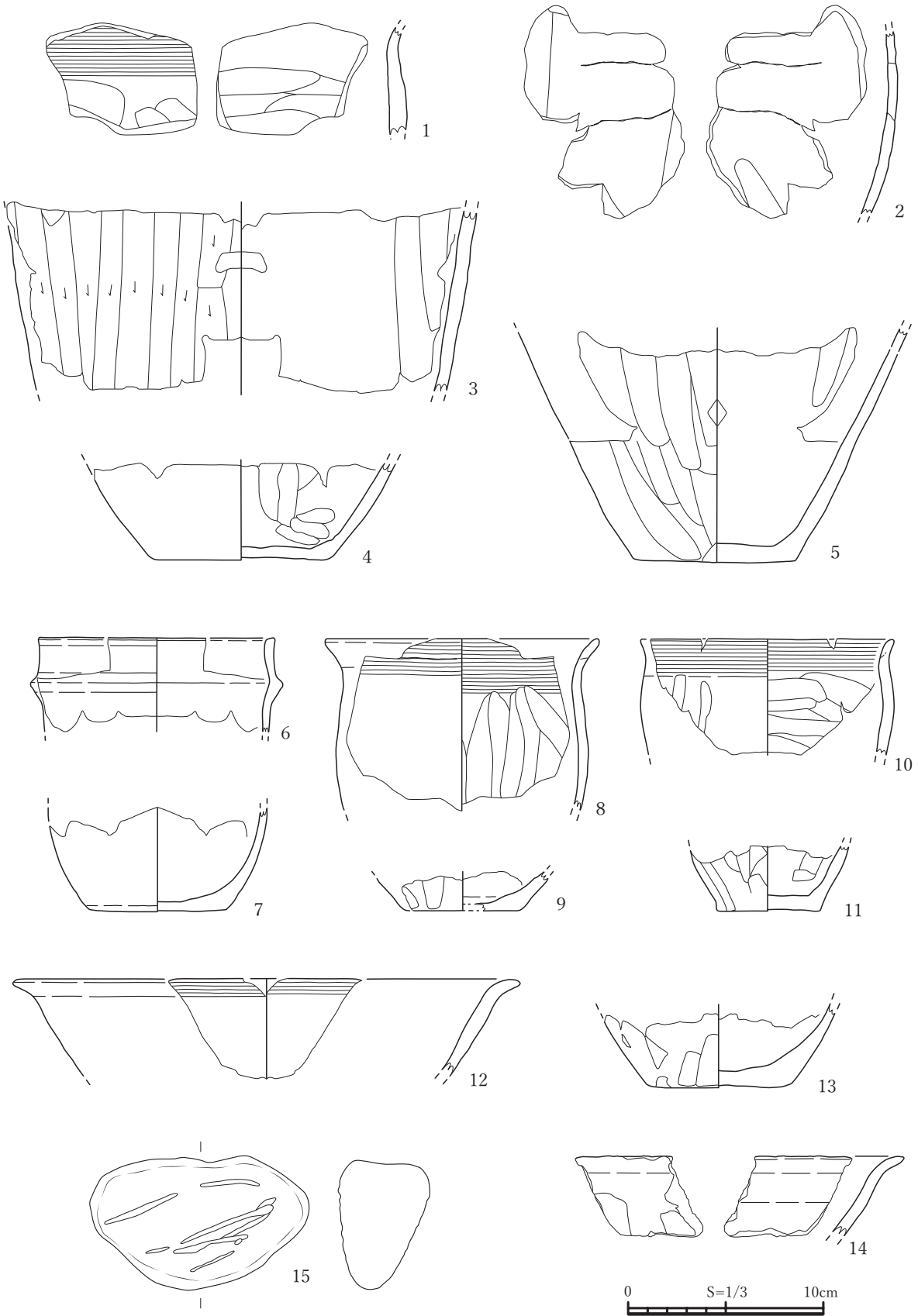


図31 竖穴建物跡出土遺物 14

2 井戸跡

第1号井戸跡(SE01)(図32)

当初は土坑と同様に半截し断面図を作成する調査方法をとった。木製品は10層から出土した。遺構確認面から約2mまで掘り下げたが底面が確認できなかったため、10層以下は空撮後に遺構周辺の自然堆積土を重機で掘削しつつ下層の精査を継続した。12層で図43-1を確認し、その後、円形に並ぶ井戸外枠(図37-1～図42-5)を検出した。堆積土は12層以下を掘り進めると湧水し、遺構断面が崩落する恐れがあったため、13層から17層までの土層断面図は作成していない。なお重機による掘り下げによりVII層に達すると湧水量はさらに増加した。土層断面図が作図できない範囲は、掘り上げた場所ごとに名称をつけ、全量を土嚢袋に入れて回収した。表2にサンプルの取り上げ番号を示す。井戸外枠内の堆積土は上層から①、②と番号を⑦まで付した。⑦を掘削する段階で井戸内枠(図34～36)を検出した。井戸内枠の堆積土は、上層から内枠1、内枠2と番号を付し、「内枠1～20」または「内枠」とした。内枠20より下、井戸内枠の底面付近を「底面」とした。この他、井戸外枠を基準にして井戸外枠外側(井戸外枠の裏込土:15・16層)、井戸外枠内側(井戸内枠の裏込土)とした。断面図右側の17層が井戸外枠の裏込土かはわからなかった。なお、現場終了後に土嚢袋を保管場所ごとにA-1～35、B-1～32、C-1と任意で整理番号を振ったものを分析の試料番号として使用したが、こちらは堆積順を示すものではない。堆積順がわかるものは①～⑦と内枠1～20までである。また回収した土は水洗選別し、種実、貝、昆虫といった微細遺物を確認したため同定委託を行った。詳細は第4章第6～8節にて記載する。井戸外枠を掘り下げ、井戸内枠(図34～図36)と杭(図42-6)を確認した。杭は当初、上部の残存状況が非常に悪く、枝と考えられる部分が確認できたため自然木と判断し引き抜いた。下端部を観察したところ尖端部をもつ杭であることがわかり、井戸内枠中央に直立するように刺されたものと判断した。なお本製品が刺さった状況の写真・図面はないが、写真図版22左下隅の写真中央にある穴が杭を引き抜いた痕跡である。その後、井戸内枠内の堆積土上位から斎串(図43-12)が出土した。井戸外枠の西側を掘削し、縦板を検出した(図32 左下、写真図版真18下段)。西側半分の縦板を外し、井戸内枠の精査を行った(写真図版18上段)。井戸外枠内側の堆積土から櫛(図43-15)、箸(図43-4～6)が出土した。井戸外枠及び堆積土から出土した木製品は人力で取り上げたが、井戸内枠は重量や安全面を考慮しパレットに載せ替え、表面をエアキャップなどで保護し、単管で枠を作

表2 井戸跡サンプル取上番号

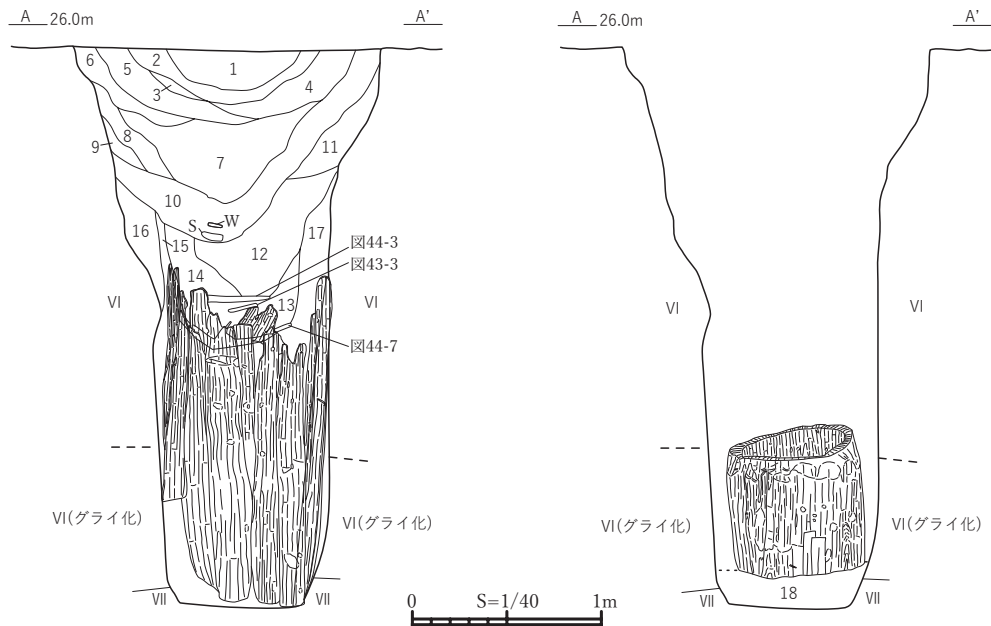
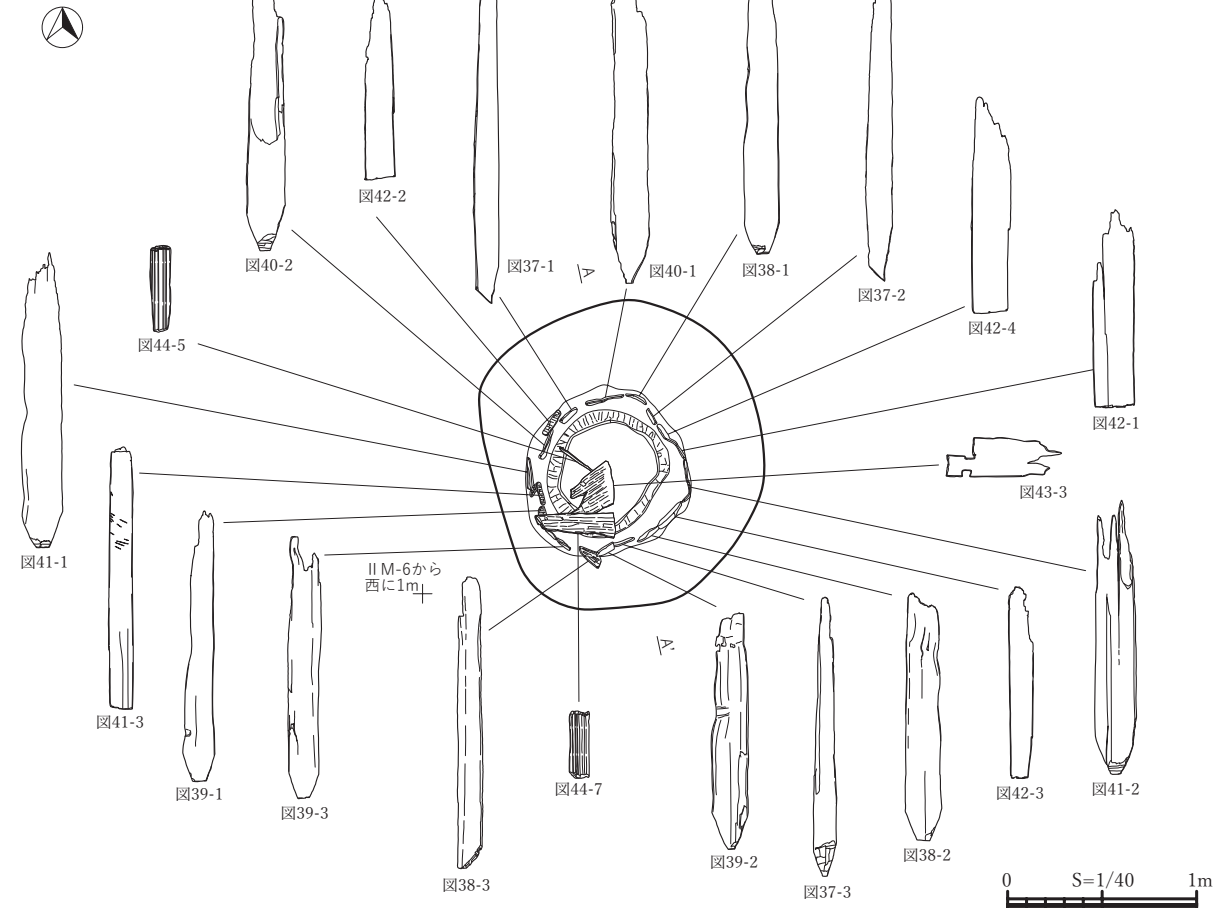
記載	枝番	サンプル	記載	枝番	サンプル	記載	枝番	サンプル	記載	枝番	サンプル	記載	枝番	サンプル	
①	1	B-7	⑤	1	B-19	内枠	1	B-1	内枠	15	A-9	外枠		外側埋土	A-22
	2	B-8		2	B-20		2	B-2		16	A-10			内側埋土	A-23
	3	B-9		3	B-21		3	B-3		17	A-11			内側埋土	A-24
②	1	B-10	⑥	1	B-22		4	B-4		18	A-12			内側埋土	A-25
	2	B-11		2	B-23		5	B-5		19	A-13			内側埋土	A-26
	3	B-12		3	B-24		6	B-6		20	A-14			内側埋土	A-27
③	1	B-13	⑦	1	B-25		7	A-1		20	A-15			内側埋土	A-28
	2	B-14		2	B-26		8	A-2		内	A-16			内側埋土	A-29
	3	B-15		3	B-27		9	A-3		内	A-17			内側埋土	A-30
④	1	B-16		4	B-28		10	A-4		底面	A-18			外側埋土	A-31
	2	B-17		5	B-29		11	A-5		底面	A-19			外側埋土	A-32
	3	B-18		6	B-30		12	A-6	底面	A-20		外側埋土	A-33		
				7	B-31		13	A-7	底面	A-21		外側埋土	A-34		
				8	B-32		14	A-8				外側埋土	A-35		
											内枠	取上後	C-1		

成し重機で吊り上げ、トラックに積み込みセンターへと搬入した。その後18層を除去し精査を終了した。

[位置・確認] 1区のII L・M-5・6グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、VI層中で円形のプランを確認した。重複する遺構はなく、上屋を構成する建物と判断できる柱穴は確認できなかった。[規模・平面形] 平面形は円形で長軸160cm、短軸144cm、検出面からの深さが290cmである。壁は中位から上位にかけて緩やかに立ち上がり、中位から下位にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦である。[堆積土] 18層に分層した。10層から火山灰を検出した。分析の結果、十和田八戸火山灰と判定された(第4章第4節)。15・16層(裏込土)中には3～10cmのデイサイトの楕円礫を確認した。同様に最下層の18層でもデイサイトの楕円礫を確認できた。なお本層は下層にあるVII層が均質な砂層であり、礫をほぼ含まない層であるため、掘方埋土と判断した。[出土遺物] 土器は須恵器が413.3g、土師器が291.9g、石器は砥石1点が出土し、うち須恵器3点、土師器8点を図示した。須恵器は坏、壺がある。坏は火襷を有しやや内湾するものである(図33-1)。壺は放射状圧痕が見られるもの(図33-2)がある。図33-3は壺の体部から底部にかけての破片であるが、胎土は小礫などの混入物が多く、やや特異である。[木製品] 100点出土し、うち65点を図示した。図化しなかった35点は表面が摩耗し、加工痕が観察できない板状のものである。井戸跡から出土した木製品の実測図は、図34～図45に示した。内訳は井戸内枠、井戸外枠、井桁(図42-7・8、図43-2・3)、櫛、斎串、箸、鉤状木製品(図43-4～6・12～15)、曲物(図43-7～11)、杭(図42-6、図45-1・2)、楔(図44-13～15・17)、不明製品(図43-1、図44-1～12・16)、加工木(図45-3～7)である。以下、井戸枠(外枠・内枠)と井戸内出土遺物に分けて記載する。なお、出土した木製品のうち、保存処理を施したものは樹種同定を行った。詳細は第4章第5節にて記載する。また回収した土壌中から取り上げた図43-10、44-13・15・16については既に自然乾燥状態であったため保存処理は行っていない。樹種は調査者による目視で樹種同定資料との比較で判断した。井戸内枠(図34～図36): ヒノキ科アスナロ属の1本の木をくり抜いて作られ、木口面の長軸は78cm、短軸70cm、高さ80cm、厚さ8cmである。本遺物を傾けると縦方向に入る亀裂部分から割れる恐れがあったため、下面は図化していない。外面に樹皮はなく、下側に黒色に変色した範囲が一巡する。工具痕は内外面と木口面で確認した。木口面は1カ所が内から外へと向かう加工痕が確認できたものの、大部分は円を描くように鱗状の加工痕が入る。内面は外面ほど加工痕がはっきりせず、上下方向からの加工の他に上位で細く斜めに入る痕跡、中位で横位方向の細い痕跡を確認した。外面は下から上方向に加工が施され、下位で確認できる細長い短冊状の加工は、破片を折り取ったためか末端に段差が残る。中位の加工は大きく歪な形状となる。上位は木口面と類似した鱗状の加工が確認でき、わずかにすぼまる形状となる。井戸外枠(図37～図42-5): 井戸外枠は20枚あり、長さ78.3～182.5cm、幅6.2～22cm、厚さ1.9～5.5cmで、樹種は全てヒノキ科アスナロ属である。多くは腐食により上端が欠損する。図42-2～4は樹皮が残存する。図37-1と2、図38-1と2、図40-1と2は接合する(写真2下段)。下端部の形状から、V字状に尖るもの(図37-3、図38-1・2、図39～41-2)、切り出し状に尖るもの(図37-1・2、図38-3)、平坦のもの(図41-3、図42-1～4)がある。V字状に尖るものは、下端に平坦面を残し、両側面から階段状に加工を施す。表裏面は加工が施されるが階段状にはならず、当形状のみに加工がみられた。側面加工があるものは凹面状に加工される。平坦のものは、加工痕が確認できるものの、加工の方向は判断できなかった。

側面には下端の尖頭部とそれ以外で異なった加工が施される。下端の尖った形状や図38-3、図39-1・3、図40-1～41-3のように下端部の木口面につぶれが確認できることから、井戸外枠は打ち込みにより設置されたものと判断した。V字状のもののみ、表裏面に加工がみられる。板材は表裏面に木目が残ることから、面取りは行われていない。井桁(図42-7・8、43-2・3):長さ53.2～64.2cm、幅13～21.9cm、厚さ2.5～3.7cmの柾目の板で、長軸端部に方形の抉りのような加工を施す。加工は片側からのもの(図42-7・8)、両側から抉りを入れるもの(図43-2・3)がある。樹種はいずれもヒノキ科アスナロ属である。齋串(図43-12):長さ26.2cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmの柾目の板で、上端を面取りし下端が細く尖る。樹種はヒノキ科アスナロ属である。櫛(図43-15):櫛歯の一部と正面右側を欠損する。残存する長さは4cm、幅5.7cm、厚さ1cmである。櫛歯は1cmあたり9～10本である。樹種はカバノキである。板の表裏面に櫛歯を作出する際の目安となるケビキ線を入れ、両方向から加工を施し櫛歯を作り出す。研磨による光沢を全面に確認した。歯先は丸く整えられている。箸(図43-4～6):先端を先細状に加工した細長い棒状の製品で、樹種は全てヒノキ科アスナロ属である。完形品はなく、残存長が10.1～21.4cm、幅0.6～0.8cm、厚さ0.4～0.5cmである。曲物(図43-7～11):片面にケビキ線が入った長さ1.9～3.8cm、幅2.6～6.3cm、厚さ0.2～0.4cmの長方形の板材で、樹種は全てヒノキ科アスナロ属である。図43-10は自然乾燥により変形したものだが、その他のものは、板に湾曲がみられないため曲物の素材の可能性もある。杭(図42-6、図45-1・2)下端部を球心状に加工を施し尖らせたもので樹種は図42-6がクワ科クワ属、図45-1がミカン科キハダ属キハダ、図45-2がトチノキ科トチノキ属トチノキである。図45-1は両端につぶれを確認した。図42-6と図45-2は樹皮が残存する。鉤状木製品(図43-13・14):外枠内側埋土から出土した。細い木の幹と枝を利用してレの字状に加工したものや図43-13は現場段階で別々に出土したが、折れ面の観察から接合すると判断した。樹種はクワ科クワ属である。長い方を幹、短い方を枝とするならば、幹に3カ所の抉りを施し、右側面に平坦面を作出する。長さ31cm、幅7cm、厚さ2.2cmで、幹と枝の接する部分に光沢を確認した。図43-14は全体的に腐食するものの、本製品に含まれると判断した。樹種はウコギ科ウコギ属コシアブラである。楔(図44-13～15・17):小型の角柱や板を加工し、下端部を斜めにしたもので樹種はいずれもヒノキ科アスナロ属である。不明製品(図43-1、図44-1～12・16):用途は特定できないが、製品として特徴的な加工を持つと判断できるものを不明製品とした。板状のもの(図44-1～7・10)、角柱状のもの(図44-8・9・11・12)、枝や幹の一部に加工を施したもの(図45-3～7)がある。図43-1と図44-4は接合した。これらは井戸外枠と規格が類似するものの、平坦面につぶれが確認されないこと、井戸外枠よりも上層から確認できたため本製品として扱った。図44-8・9は木口面に鋸による加工痕が残る。図44-11は下側の木口面が球心状に加工が施されることから杭の可能性もある。加工木(図45-3～7):加工の痕跡はみられるが、製品と判断できる特徴的な加工がないものをまとめた。樹種は図45-3がトチノキ科トチノキ属トチノキ、図45-4がユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ、図45-5がブナ科ブナ属、図45-6・7がブドウ科である。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。井戸枠内枠・外枠、内枠内から出土した種子、井戸枠内枠の裏込土から出土した櫛は放射性炭素年代測定を行った結果、底面最下層の炭化物は3,968～3,801calBC(2σ)、井戸内枠くり抜き材が707～883calAD(2σ)、櫛が598～773calAD(2σ)の年代を得た(第4章第1節)。また土壌サンプル内のブドウ属種子は、内枠底面内堆積土A-21:3,985～3,805calBC(2σ)、外枠外側埋土A-22:3,973

SE01



SE01

- 1 10YR3/1 黒褐色 しまり有 粘性有 φ1~20mm風化礫2% φ2~3mmにふい黄橙色(10YR6/4)粒5%
- 2 10YR3/2 黒褐色 しまり有 粘性有 φ2~3mmにふい黄橙色(10YR6/4)粒2% φ3~5mm炭化物2%
- 3 10YR3/3 暗褐色 しまり有 粘性有 φ1~2mm炭化物2%
- 4 10YR3/2 黒褐色 しまり有 粘性有 φ2~3mmにふい黄橙色(10YR6/4)粒10% φ1~2mm炭化物含む
- 5 10YR3/3 暗褐色 しまり有 粘性有 φ2~3mm炭化物2% 火山灰2%
- 6 10YR3/3 暗褐色 しまり有 粘性有 φ2~30mm風化礫2% φ2~3mmにふい黄橙色(10YR6/4)粒5%
- 7 10YR3/3 暗褐色 しまり有 粘性有 φ2~30mm風化礫10% φ2~3mmにふい黄橙色(10YR6/4)粒10% φ1~20mm炭化物2%
- 8 10YR3/3 暗褐色 しまり有 粘性有 φ2~30mm風化礫2% φ2~3mmにふい黄橙色(10YR6/4)粒10%
- 9 10YR3/4 暗褐色 しまり有 粘性有 φ1~2mmにふい黄橙色(10YR6/4)粒2%

- 10 10YR3/4 暗褐色 しまり有 粘性有 φ2~30mm風化礫2% φ10mm火山灰ブロック状に含む
- 11 10YR3/4 暗褐色 しまり有 粘性有 φ1~30mm褐色(10YR4/4)粒をブロック状に含む
- 12 10YR4/3 にふい黄褐色 しまり有 粘性有 湿性に富む
- 13 10YR3/2 黒褐色 しまり有 粘性有 φ10mm風化礫5% 湿性に富む
- 14 10YR4/2 灰黄褐色 しまり有 粘性有 φ1~2mm風化礫10% 湿性に富む
- 15 10YR5/1 褐灰色 しまり有 粘性有 湿性に富む グライ化
- 16 10YR6/6 明黄褐色 しまり有 粘性有 風化礫多く含む 湿性に富む
- 17 10YR6/8 明黄褐色 しまり有 粘性有 風化礫多く含む 湿性に富む
- 18 7.5Y7/1 灰白色 しまり有 粘性有 砂層

図32 井戸跡

第1号井戸跡

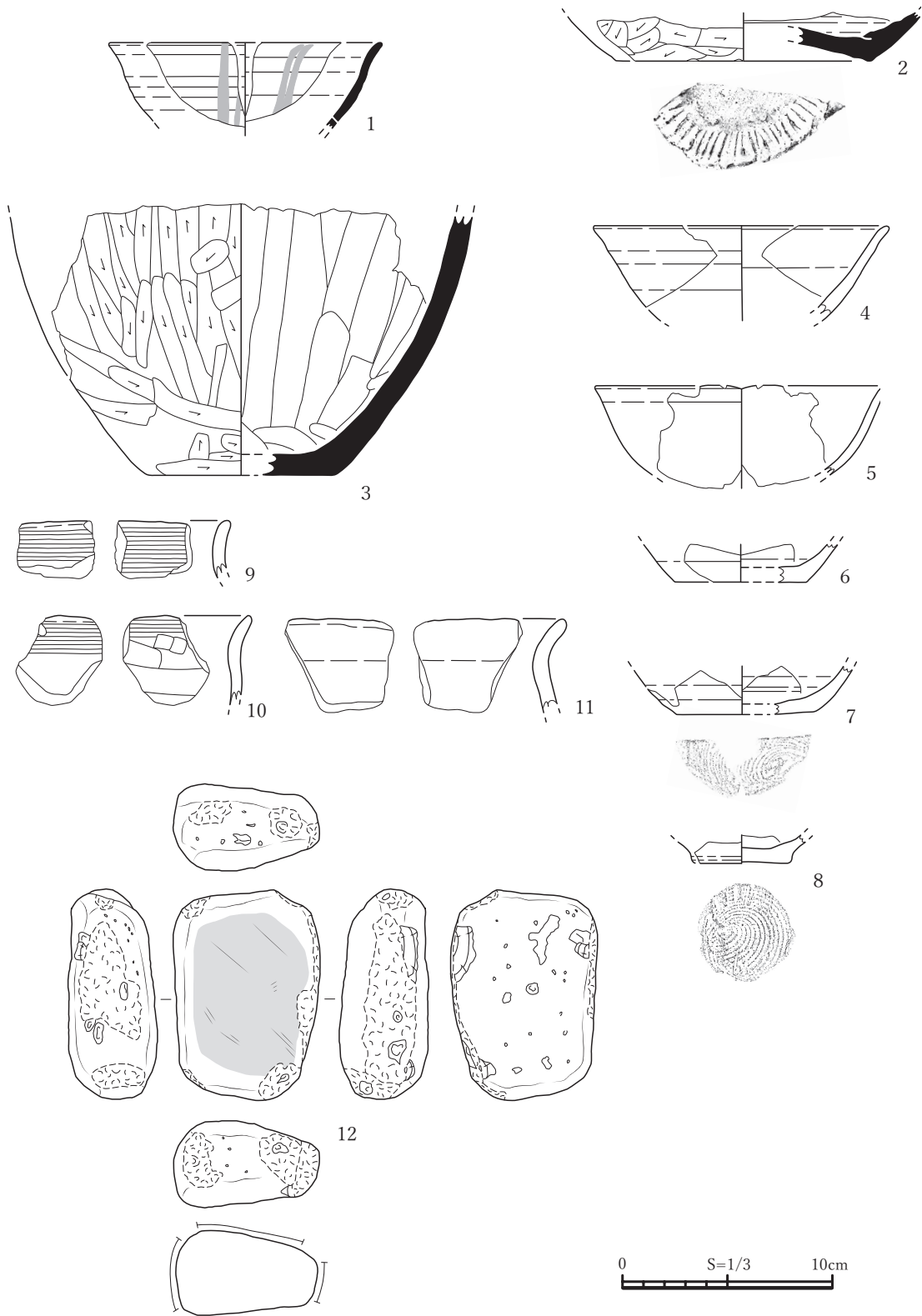


图33 井戸跡出土遺物 1

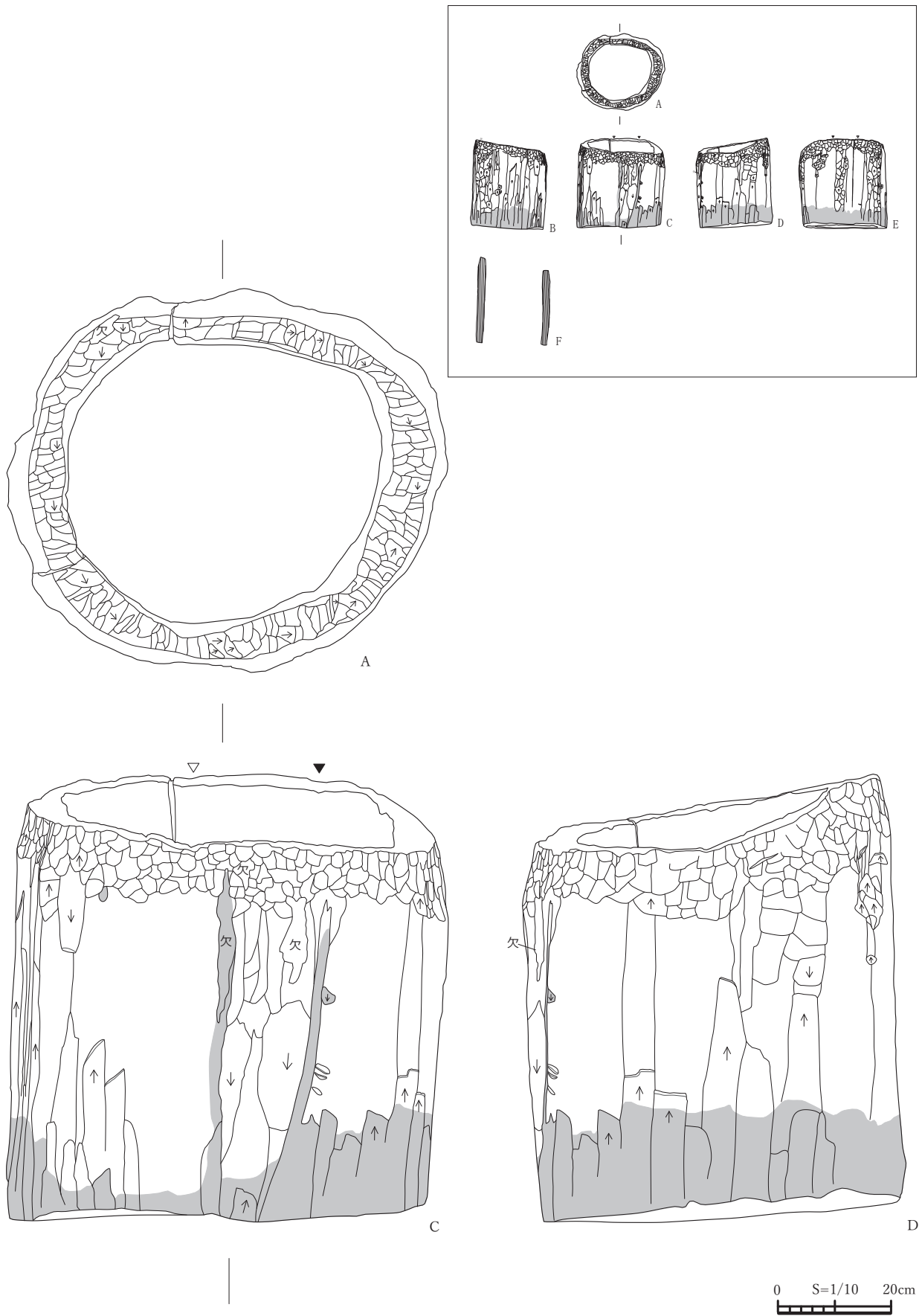


图34 井戸跡出土遺物 2

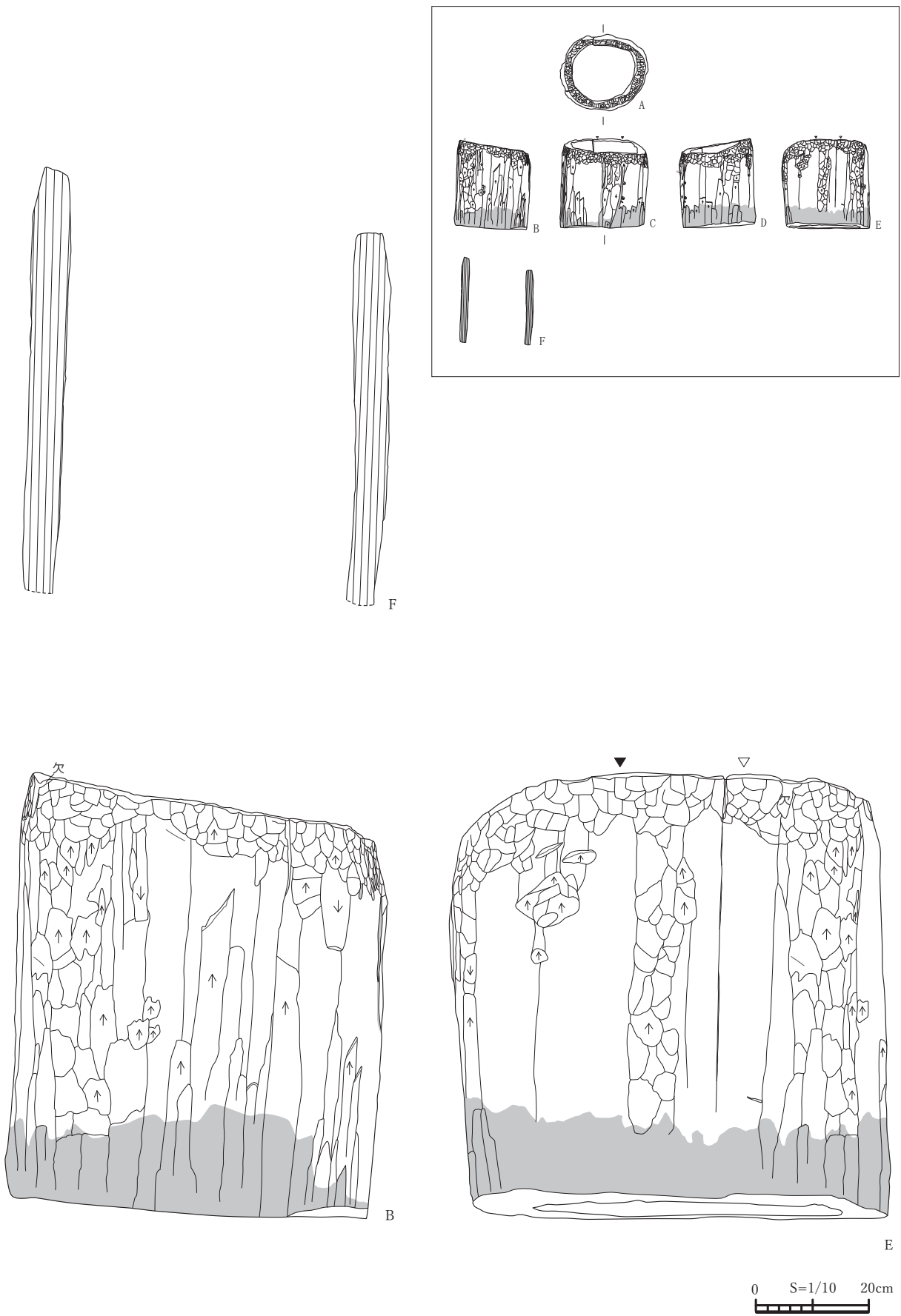


图35 井戸跡出土遺物 3

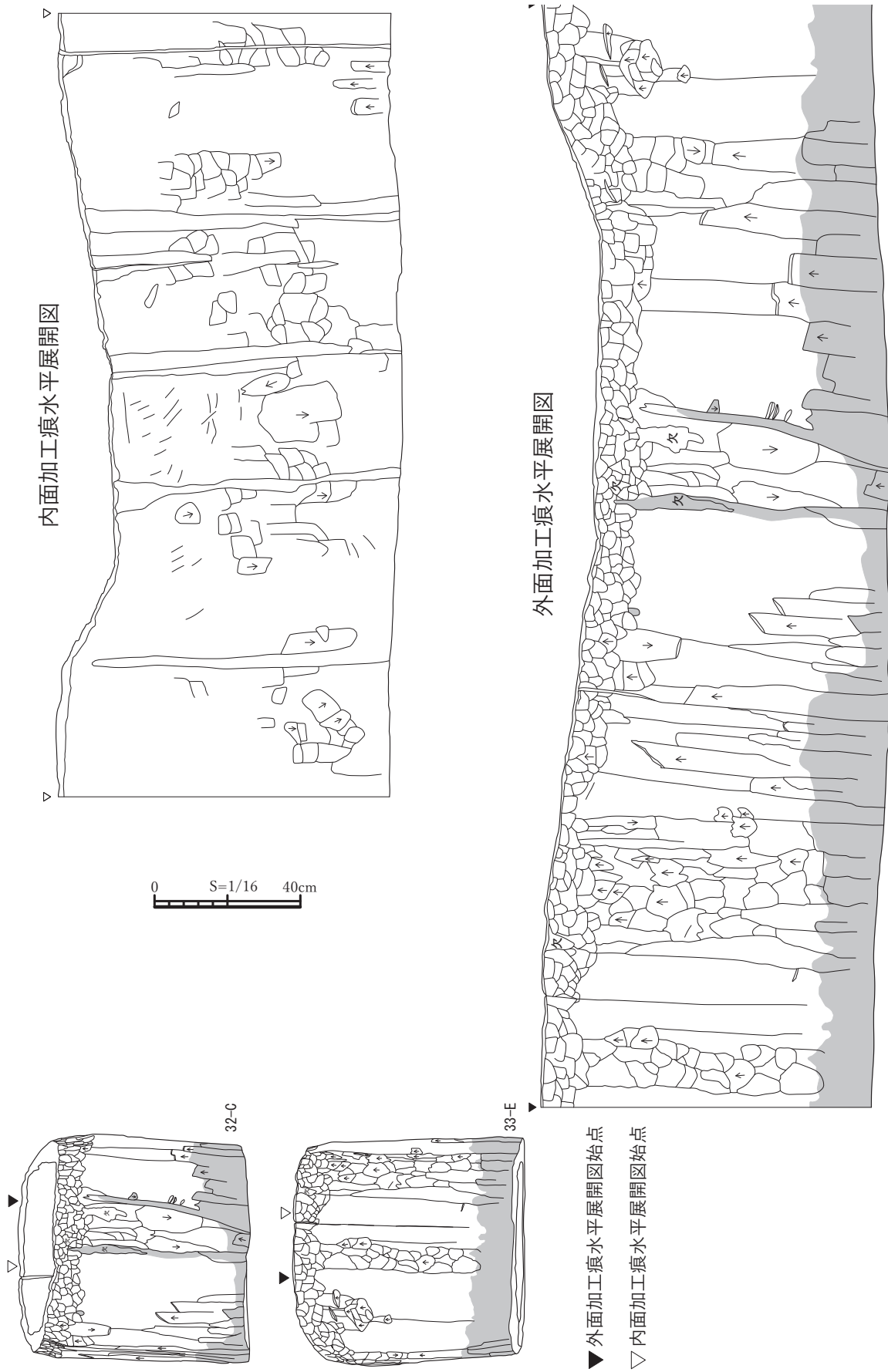


図36 井戸跡出土遺物 4



図37 井戸跡出土遺物 5

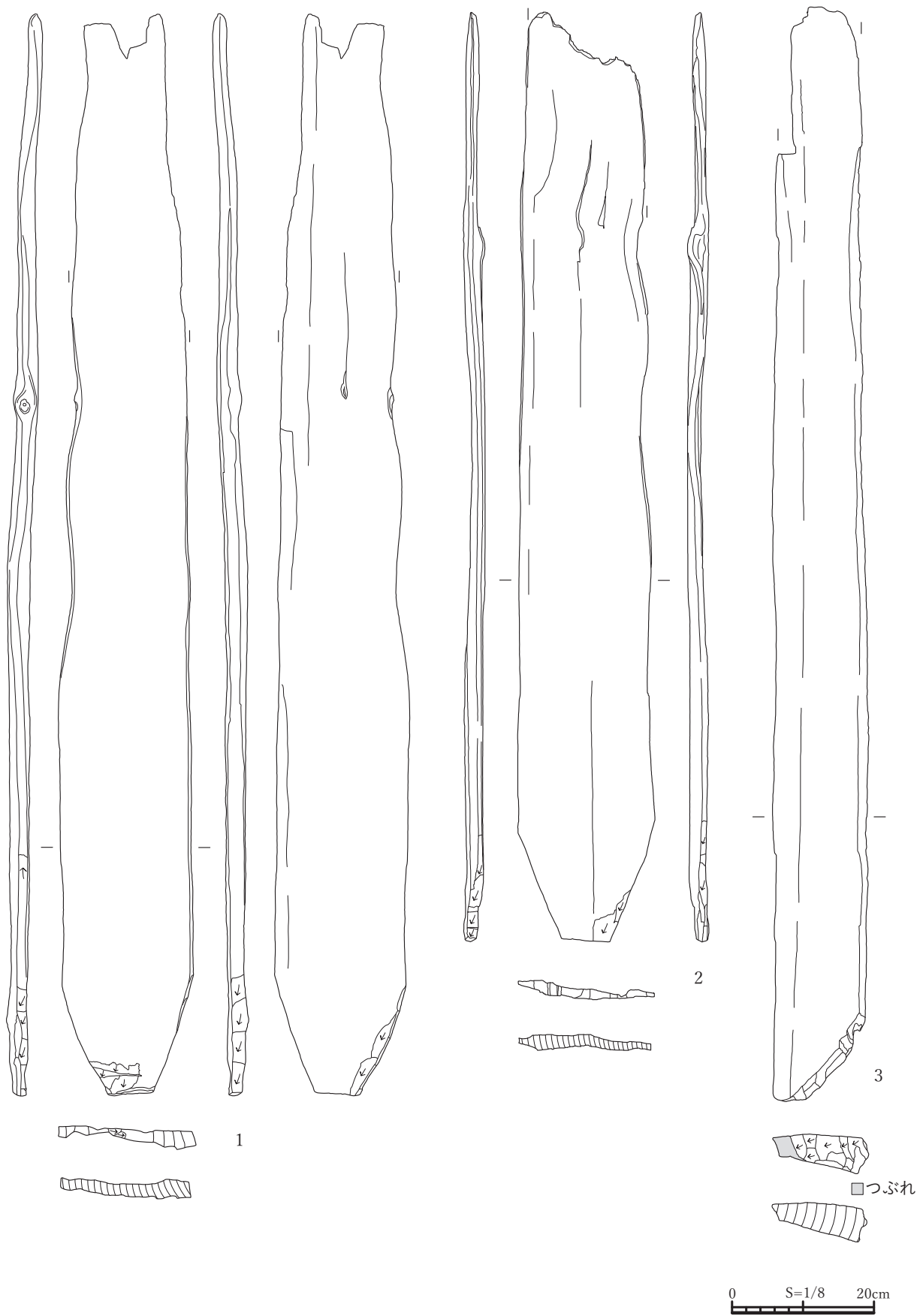
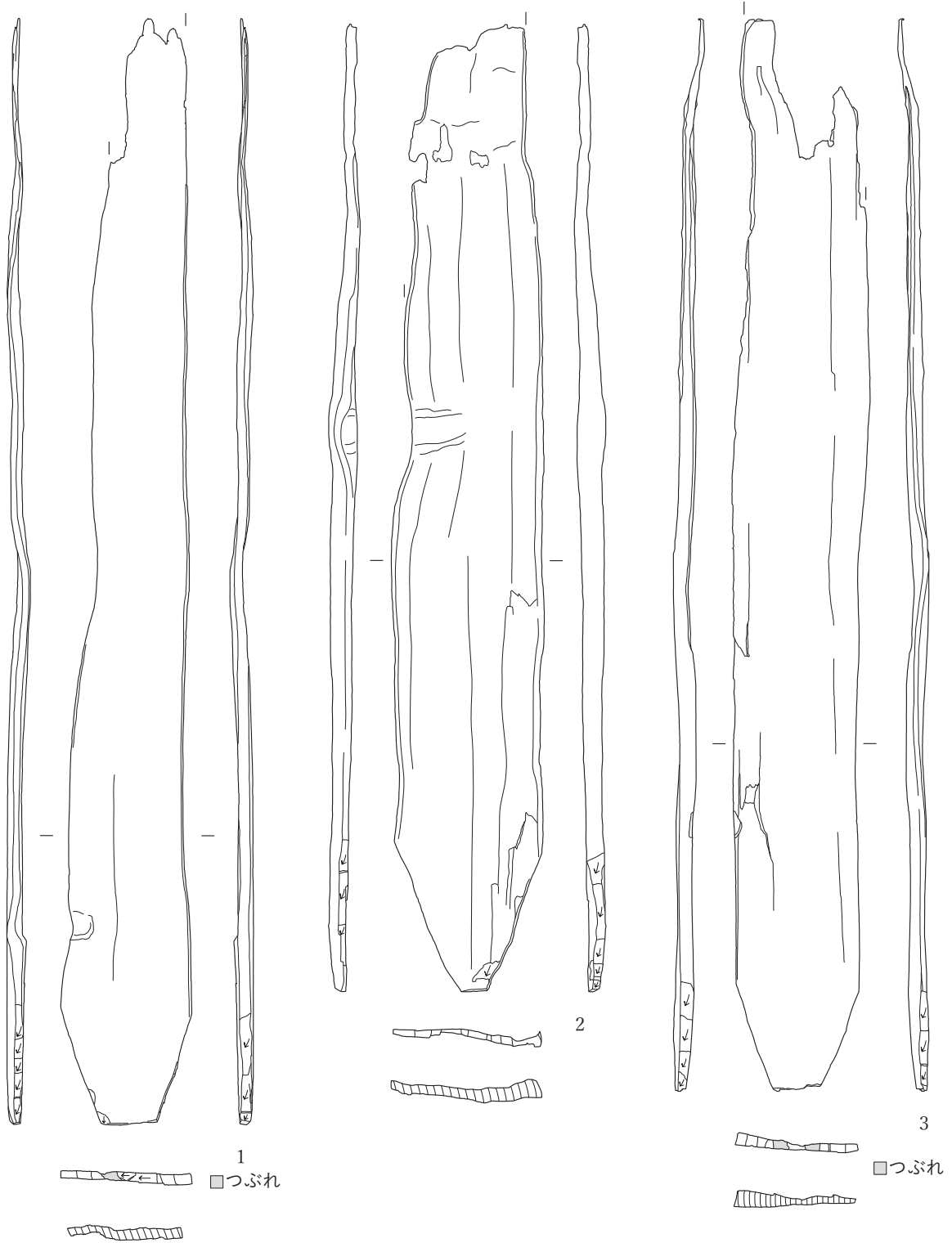


図38 井戸跡出土遺物 6



0 S=1/8 20cm

図39 井戸跡出土遺物 7

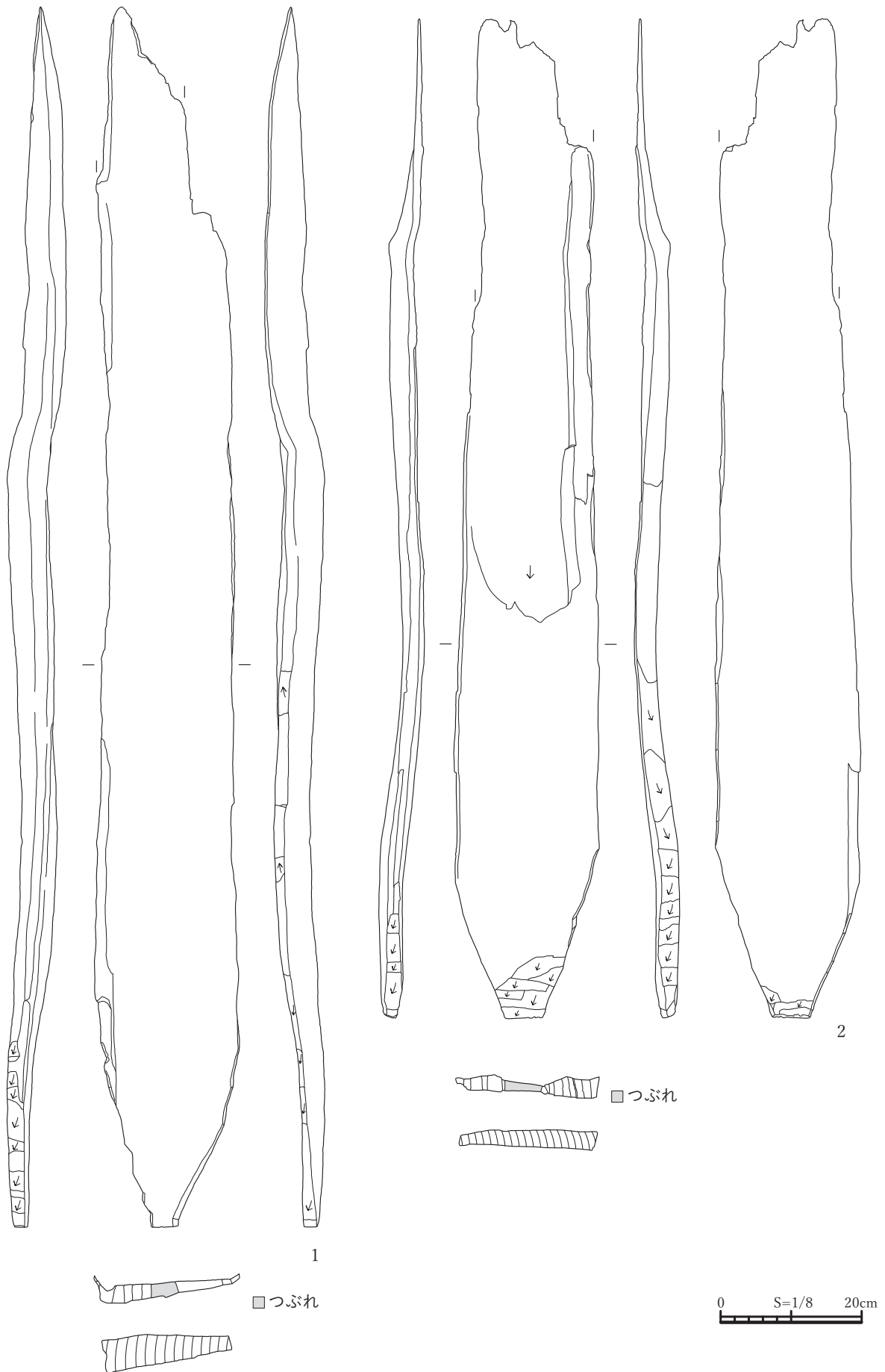


図40 井戸跡出土遺物 8

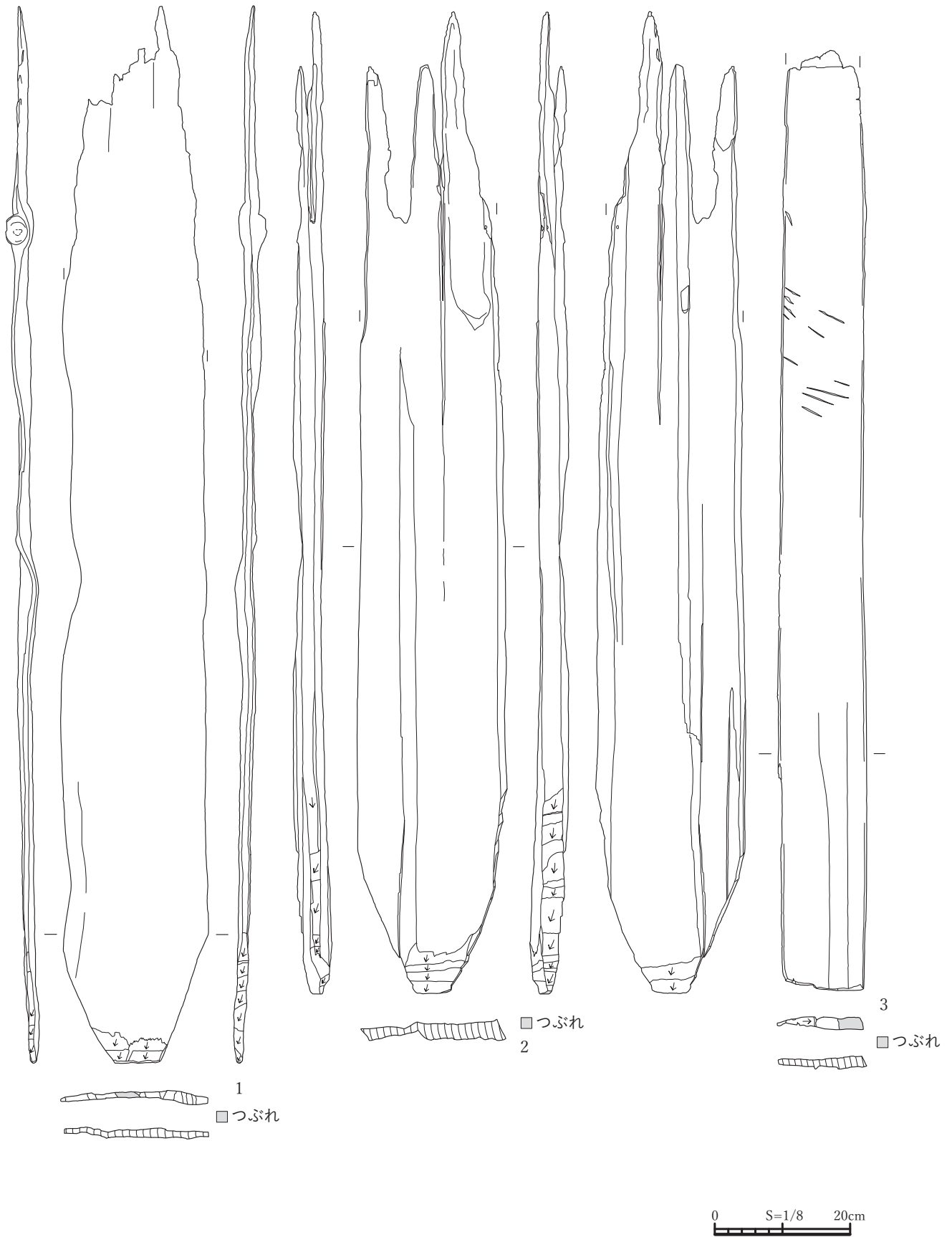


図41 井戸跡出土遺物 9

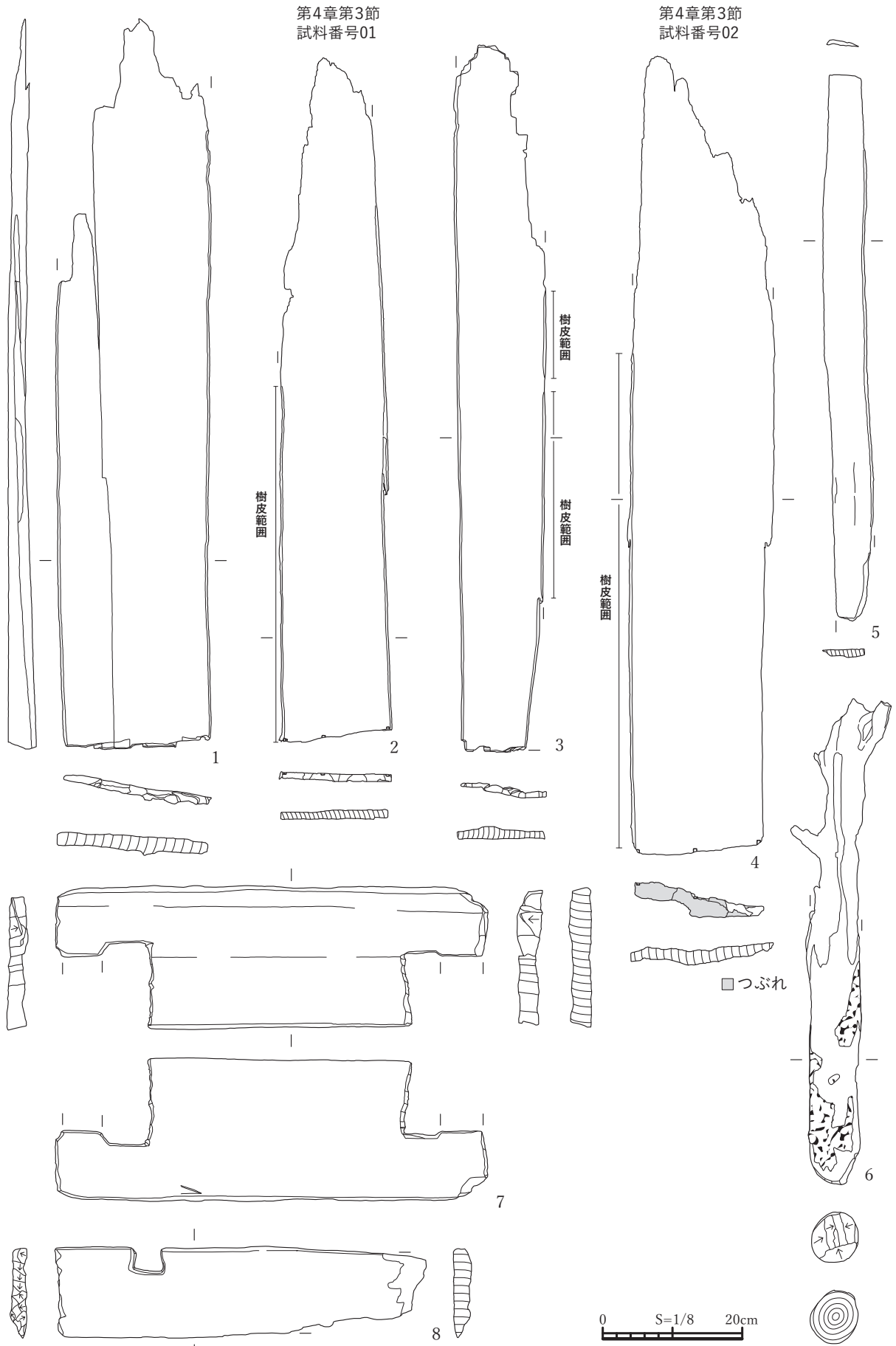


図42 井戸跡出土遺物 10

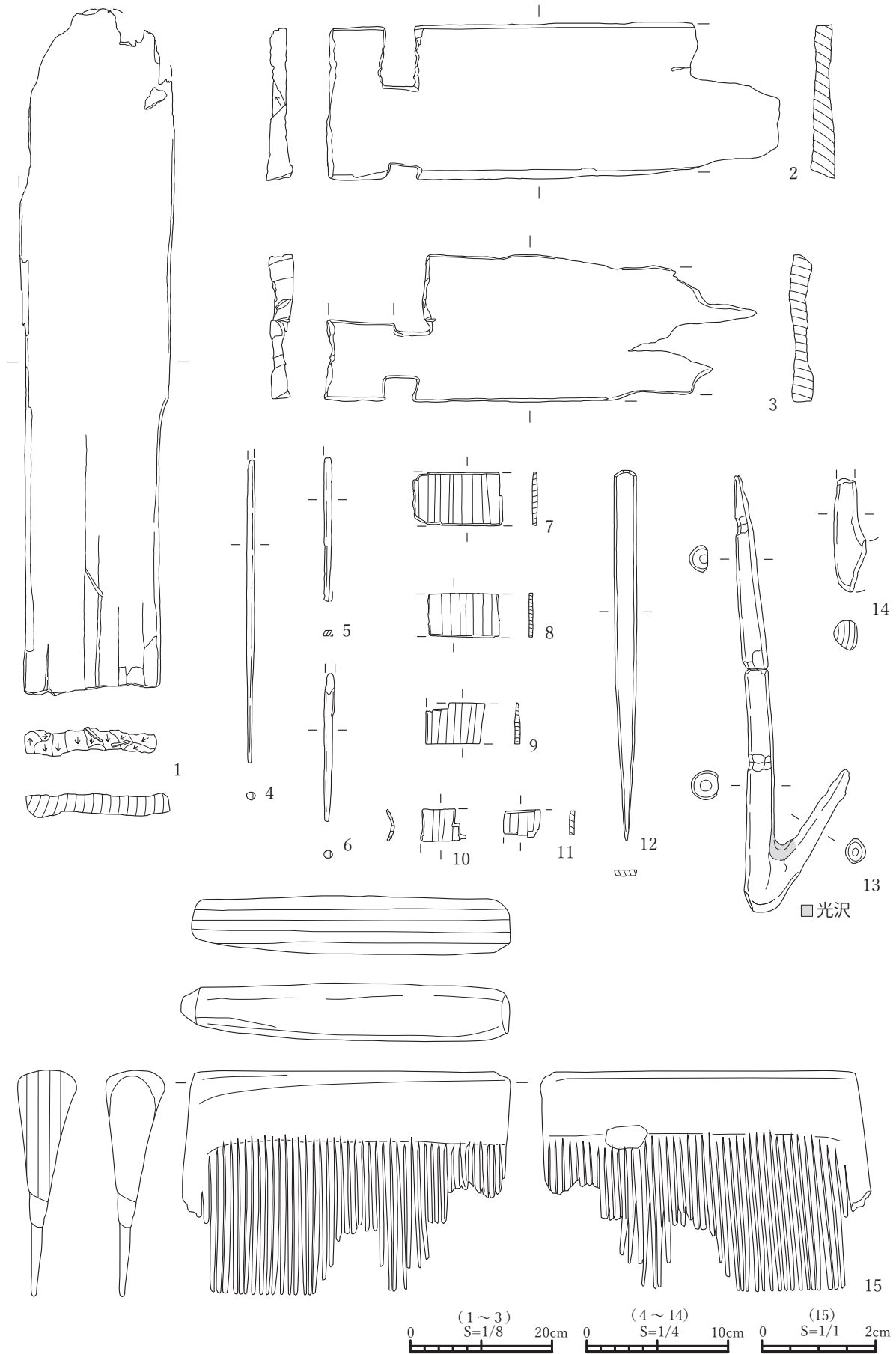


図43 井戸跡出土遺物 11

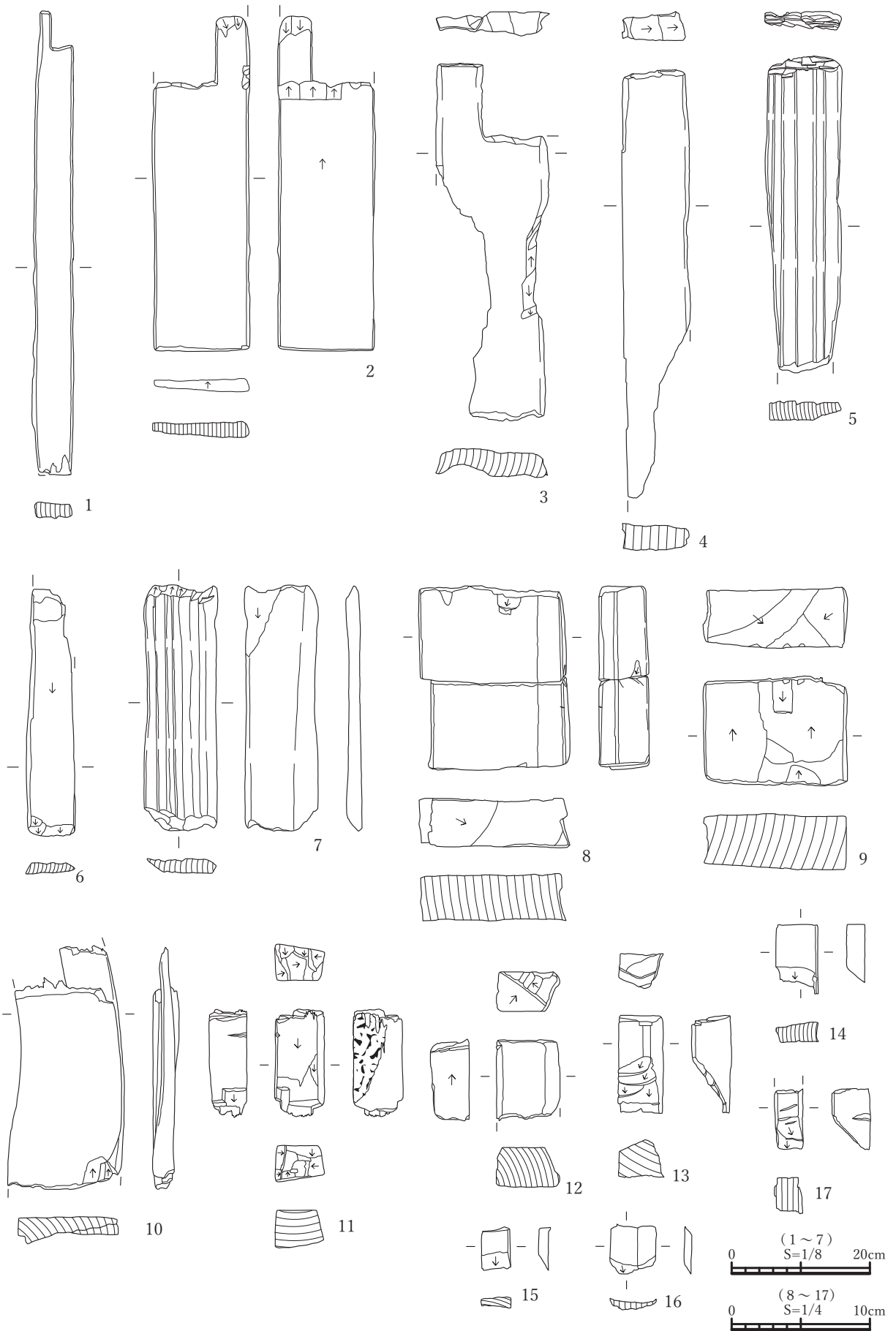


図44 井戸跡出土遺物 12

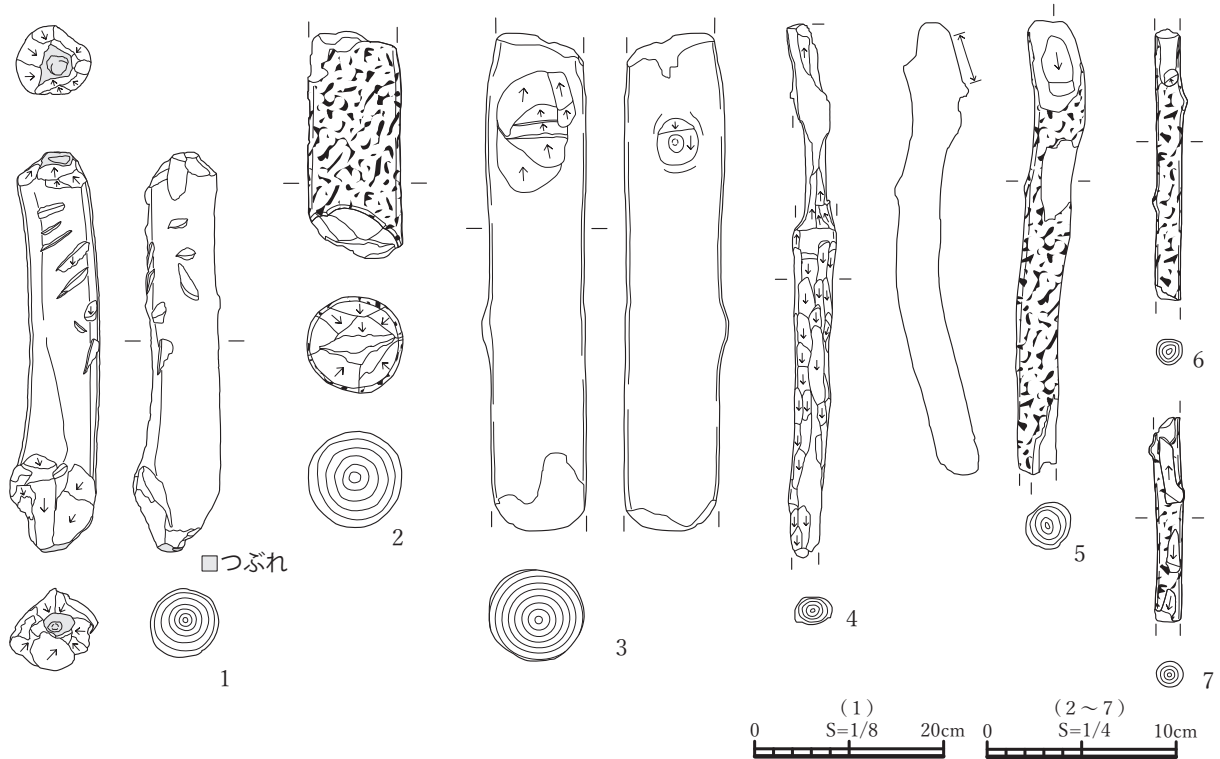


図45 井戸跡出土遺物 13

～3,803calBC(2σ)、外枠内側埋土 A-25:3,949～3,783calBC(2σ)、内枠取上後埋土 C-1:3,962～3,800calBC(2σ)の年代を示した(第4章第2節)。井戸外枠は2点分析を行い、図42-2の最終形成年輪の年代は888～967calAD(2σ)、図42-4の最終形成年輪の年代は896～925calAD(2σ)の年代を得た(第4章第3節)。底面最下層の炭化物とブドウ属種子は、縄文時代の年代幅を示し、考古学的所見と矛盾する。これらの考察は第5章に記載する。

3 土坑(SK01～19)

第1号土坑(SK01)(図46)

[位置・確認] 4区のI J-9グリッド、標高24.8～24.9mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。第3号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸138cm、短軸125cmである。検出面からの深さは26cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 4層に分層した。1～3層は自然堆積、底面上4層に炭化物層が形成され、底面に被熱が見られる。[出土遺物] 土師器が624g、須恵器が54.1g、鍛冶滓4.6gが出土した。うち土師器7点、須恵器1点を図示した(図50-1～8)。なお堆積土から出土した遺物の中には第17号土坑から出土した遺物と接合関係が認められるものがある。[小結] 出土遺物及び放射性炭素年代測定の結果から、平安時代の遺構である。炭化物及び被熱状況から、古代の製炭土坑(木立1997)と考えられる。底面出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、887～990calAD(2σ)で、考古学的所見と矛盾しない(第4章第1節参照)。

第2号土坑(SK02)(図46)

[位置・確認] 1区のII M・N-4・5グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第8号竪穴建物跡、第3・7号土坑と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸156cm、短軸108cmである。検出面からの深さは11cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 2層に分層した。いずれの層もロームブロックを含む。[出土遺物] 土師器が172.4g、須恵器が20.7g、石器は剥片1点(0.4g)出土した。うち土師器1点、須恵器1点を図示した(図50-9・10)。[小結] 出土遺物等から平安時代の遺構である。

第3号土坑(SK03)(図46)

[位置・確認] 1区のII N-5グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第8号竪穴建物跡、第2・7号土坑と重複し、第8号竪穴建物跡より古く、第2・7号土坑より新しい。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸96cm、短軸68cmである。検出面からの深さは37cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 4層に分層した。ロームブロックや火山灰等を含む。[出土遺物] 土師器が6.1g出土した。細片のため図示していない。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第4号土坑(SK04)(図46)

[位置・確認] 1区のII M-4グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸107cm、短軸93cmである。検出面からの深さは15cm、底面は概ね平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層で暗褐色の自然堆積である。[出土遺物] 土師器8g、石錘1点、使用痕のある剥片1点、剥片1点(2.4g)、含鉄椀形鍛冶滓58.0g、椀形鍛冶滓361.1gが出土した。うち石器1点(図50-11)、含鉄椀形鍛冶滓1点(図56-7)、椀形鍛冶滓1点(図56-11)を図示した。土師器は細片のため図示しなかった。[小結] 出土遺物等から平安時代の遺構である。

第5号土坑(SK05)(図46)

[位置・確認] 1区のII M-4グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第1号性格不明遺構と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 平面形は不整形である。平面規模は開口部で長軸120cm、短軸66cmである。検出面からの深さは11cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層でロームブロックが混じっており、人為堆積である。[出土遺物] 須恵器が1.5g、使用痕のある剥片1点(60.4g)、剥片が1点(36.7g)出土した。細片のため図示しなかった。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第6号土坑(SK06)(図46)

[位置・確認] 1区のII M・II N-5グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第8号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸100cm、短軸88cmである。検出面からの深さは15cm、底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。[堆

積土] 2層に分層した。いずれもロームブロックを含む。[出土遺物] 土師器が24.5g、石器が剥片1点(0.8g)出土した。細片のため図示しなかった。[小結] 出土遺物から、平安時代の遺構である。1層出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、775~974calAD(2 σ)であり、考古学的所見と矛盾しない(第4章第1節参照)。

第7号土坑(SK07)(図46)

[位置・確認] 1区のII M・II N-5グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第8号竪穴建物跡、第2号・第3号土坑と重複し、第8号竪穴建物跡と第3号土坑より古く、第2号土坑より新しい。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸87cm、短軸75cmである。検出面からの深さは4cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層でロームブロックが混じる。[出土遺物] 土師器が243.8g出土した。うち2点を図示した(図50-12・13)。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第8号土坑(SK08)(図46)

[位置・確認] 1区のII N-5・6グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸115cm、短軸78cmである。検出面からの深さは24cm、底面はやや丸みを持ち、壁は垂直に立ち上がる。[堆積土] 5層に分層した。ロームブロックを含む人為堆積である。[出土遺物] 土師器が886.8g、須恵器が28.6g、椀形鍛冶滓が245.2g出土した。うち土師器2点、須恵器1点、椀形鍛冶滓1点を図示した(図50-14、図51-1・2、図56-12)。なお堆積土から出土した遺物の中には第3号、第7号竪穴建物跡から出土した遺物と接合関係が認められるものがある。[小結] 出土遺物等から平安時代の遺構である。4層出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、684~878calAD(2 σ)であり、考古学的所見と矛盾しない(第4章第1節参照)。

第9号土坑(SK09)(図46)

[位置・確認] 1区のII N-5グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸88cm、短軸72cmである。検出面からの深さは18cm、底面は概ね平坦で、壁は垂直に立ち上がる。[堆積土] 2層に分層した。暗褐色土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 縄文土器が18g出土したが細片のため図化しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第10号土坑(SK10)(図46)

[位置・確認] 1区のII O・II P-5グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸124cm、短軸82cmである。検出面からの深さは11cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層でロームブロックが混じる人為堆積である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第11号土坑(SK11)(図46)

[位置・確認] 1区のII P-6グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第12号土坑と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸128cm、短軸76cmである。検出面からの深さは14cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層で暗褐色の自然堆積である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

第12号土坑(SK12)(図46)

[位置・確認] 1区のII P・II Q-6グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第11号土坑と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸123cm、短軸76cmである。検出面からの深さは16cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 6層に分層した。ロームブロックを含む。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第13号土坑(SK13)(図47)

[位置・確認] 4区のI K-8グリッド、標高24.8～24.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。[規模・平面形] 平面形は円形である。平面規模は開口部で長軸167cm、短軸172cmである。検出面からの深さは10cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層で灰黄褐色の自然堆積である。[出土遺物] 土師器が261.2g、須恵器が5.4g出土した。うち土師器を2点、須恵器を1点図示した(図51-3～5)。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第14号土坑(SK14)(図47)

[位置・確認] 3区のI R-9・10グリッド、標高25.8～25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第16号土坑と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸81cm、短軸73cmである。検出面からの深さは16cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 2層に分層した。1層が黒褐色の自然堆積、2層はロームブロックを含む。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第15号土坑(SK15)(図47)

[位置・確認] 3区のI R-9グリッド、標高25.8mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第8号溝跡と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 平面形は円形である。平面規模は開口部で長軸79cm、短軸67cmである。検出面からの深さは19cm、底面はやや丸みをもち、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層で黒褐色の自然堆積である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第16号土坑(SK16)(図47)

[位置・確認] 3区のIR・IS-9グリッド、標高25.8~25.9mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。第14号土坑と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸82cm、短軸56cmである。検出面からの深さは11cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 2層に分層した。ロームブロックを含む。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第17号土坑(SK17)(図47)

[位置・確認] 4区のII-9グリッド、標高24.8~24.9mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。第3号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸132cm、短軸83cmである。検出面からの深さは15cm、底面はやや丸みを持ち、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層で褐灰色の自然堆積である。[出土遺物] 土師器が888g、須恵器が6.1g出土した。うち土師器を1点、須恵器を1点図示した(図51-6・7)。なお堆積土から出土した遺物の中には第7号竪穴建物跡から出土した遺物と接合関係が認められるものがある。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第18号土坑(SK18)(図47)

[位置・確認] 1区のIIR・IIS-6グリッド、標高26mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。[規模・平面形] 東側が調査区外にあるものの、平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸214cm、短軸77cmである。検出面からの深さは23cm、底面は概ね平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層でロームブロックが混じる人為堆積である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられる。1層底面出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、775~974calAD(2 σ)であり、考古学的所見と矛盾しない(第4章第1節参照)。

第19号土坑(SK19)(図47)

[位置・確認] 1区のIIS-5・6グリッド、標高26mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。第7号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 平面形は楕円形である。平面規模は開口部で長軸198cm、短軸167cmである。検出面からの深さは22cm、底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 2層に分層した。いずれも暗褐色の自然堆積である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

4 溝跡

溝跡は10条検出した。第1~5、10号溝跡を1区で、第6号溝跡を2区で、第7・8・9号溝跡を3区で確認した。本遺構は第2章第1節の多条灌漑水路のように表土から掘り込まれたものではなく、Ⅱ層以下で確認できたものである。出土遺物から平安時代の遺構として取り扱った。

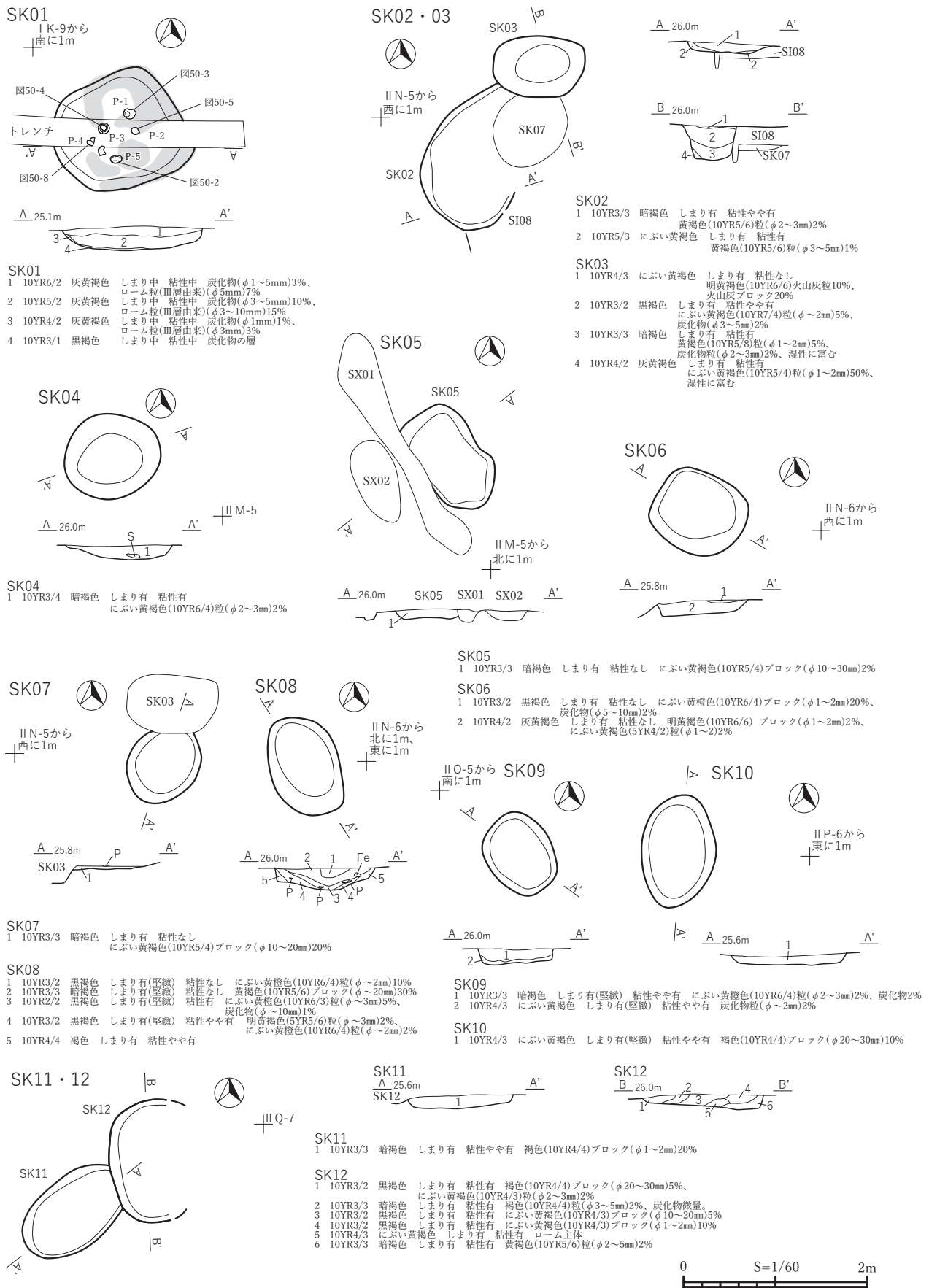


図46 土坑 1

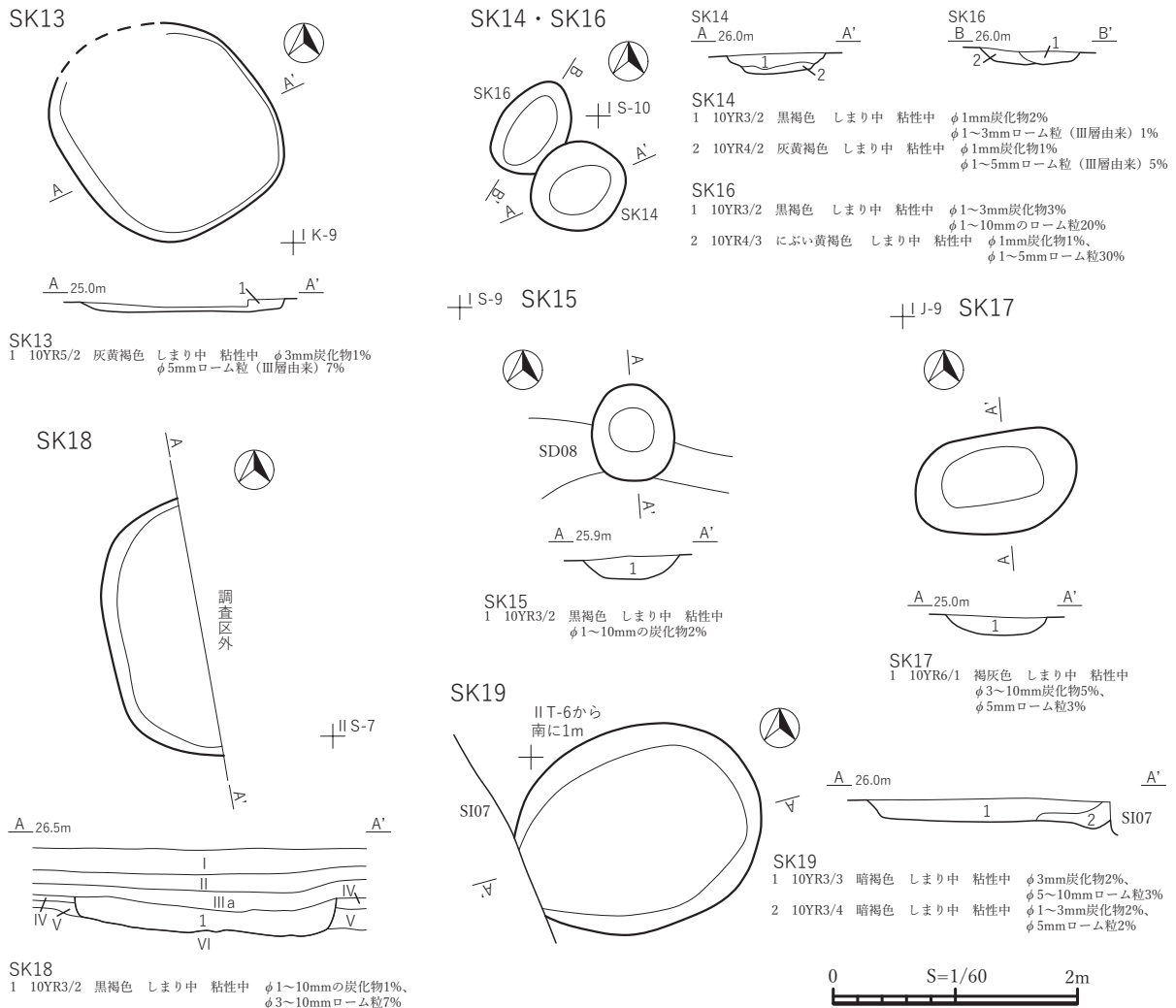


図47 土坑 2

第1号溝跡(SD01)(図48)

[位置・確認] 1区のII N・II O- 5グリッド、標高25.8~25.9mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。第5号溝跡と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 南北方向に直線的に伸び、北側が緩やかに西方向に湾曲する。平面規模は上端長4.8m、幅33cmで、検出面からの深さは9cmである。底面は概ね平坦で、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。[堆積土] Ⅲ層由来のロームブロックを含む褐色の単一土層で自然堆積である。[出土遺物] 土師器が193.8g出土した。うち2点を図示した(図51-8・9)。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第2号溝跡(SD02)(図48)

[位置・確認] 1区のII P-5、II Q- 5・6グリッド、標高25.8~25.9mの平坦面に位置し、Ⅱ層中で確認した。第8号・第11号Pitと重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 南西から北東方向に直線的に伸び、平面規模は上端長4.5m、幅29cmで、検出面からの深さは4cmである。底面は概ね平坦で、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。[堆積土] Ⅲ層由来のロームブロックを含む暗褐色の単一土層で自然堆積である。[出土遺物] 土師器が2.5g出土した。細片のため図示しなかった。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第3号溝跡(SD03)(図48)

[位置・確認] 1区のII Q-5グリッド、標高25.8～25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。
 [規模・平面形] 南北方向に直線的に延び、北側が緩やかに西方向に湾曲する。平面規模は上端長300cm、幅34cmで、検出面からの深さは12cmである。底面はやや丸みをもち、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。[堆積土] III層由来のロームブロックを含む暗褐色の単一土層で自然堆積である。[出土遺物] 土師器が7.1g出土した。細片のため図示しなかった。
 [小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第4号溝跡(SD04)(図48)

[位置・確認] 1区のIIR-5、IIQ～IIS-6グリッド、標高25.9～26mの平坦面に位置し、II層中で確認した。第7号竪穴建物跡と付属する掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。[規模・平面形] 南東から北西方向に直線的に延び、SP55付近で二股に分かれる。土色・土質で分けることができなかつたため、一つの遺構として認識した。平面規模は上端長600cm、幅25～69cmで、検出面からの深さは23cmである。底面はやや丸みをもち、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。[堆積土] III層由来のロームブロックを含む暗褐色の単一土層で自然堆積である。[出土遺物] 土師器307.3g、須恵器17.1g、椀形鍛冶滓246.5g、鍛冶滓28.7gが出土した。うち土師器1点、須恵器1点、椀形鍛冶滓1点を図示した(図51-10・11、図56-13)。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第5号溝跡(SD05)(図48)

[位置・確認] 1区のIIN～IIP-5グリッド、標高25.8～25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。第1号溝跡と重複し、本遺構が古い。[規模・平面形] 南東から北西方向に直線的に延び、平面規模は上端長7.8m、幅34cmで、検出面からの深さは9cmである。底面は概ね平坦で、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。[堆積土] III層由来のロームブロックを含む暗褐色の単一土層で人為堆積である。[出土遺物] 土師器が40.9g、須恵器が17.4g出土した。うち須恵器2点を図示した(図51-12・13)。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

第6号溝跡(SD06)(図48)

[位置・確認] 2区のIIA-8グリッド、標高26.1mの平坦面に位置し、II層中で確認した。[規模・平面形] 南西から北東方向の直線的な構築で、遺構の一部が調査区外に延びている。平面規模は上端長3.0m、幅37cmで、検出面からの深さは32cmである。底面はやや丸みをもち、壁は底面から中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位からは開くように立ち上がる。[堆積土] 自然堆積で2層に分層した。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第7号溝跡(SD07)(図48)

[位置・確認] 3区のIT-9グリッド、標高26mの平坦面に位置し、III層中で確認した。[規模・平面形] 東西方向に直線的に延び、遺構の一部が調査区外に延びている。平面規模は上端長2.5m、幅29cmで、

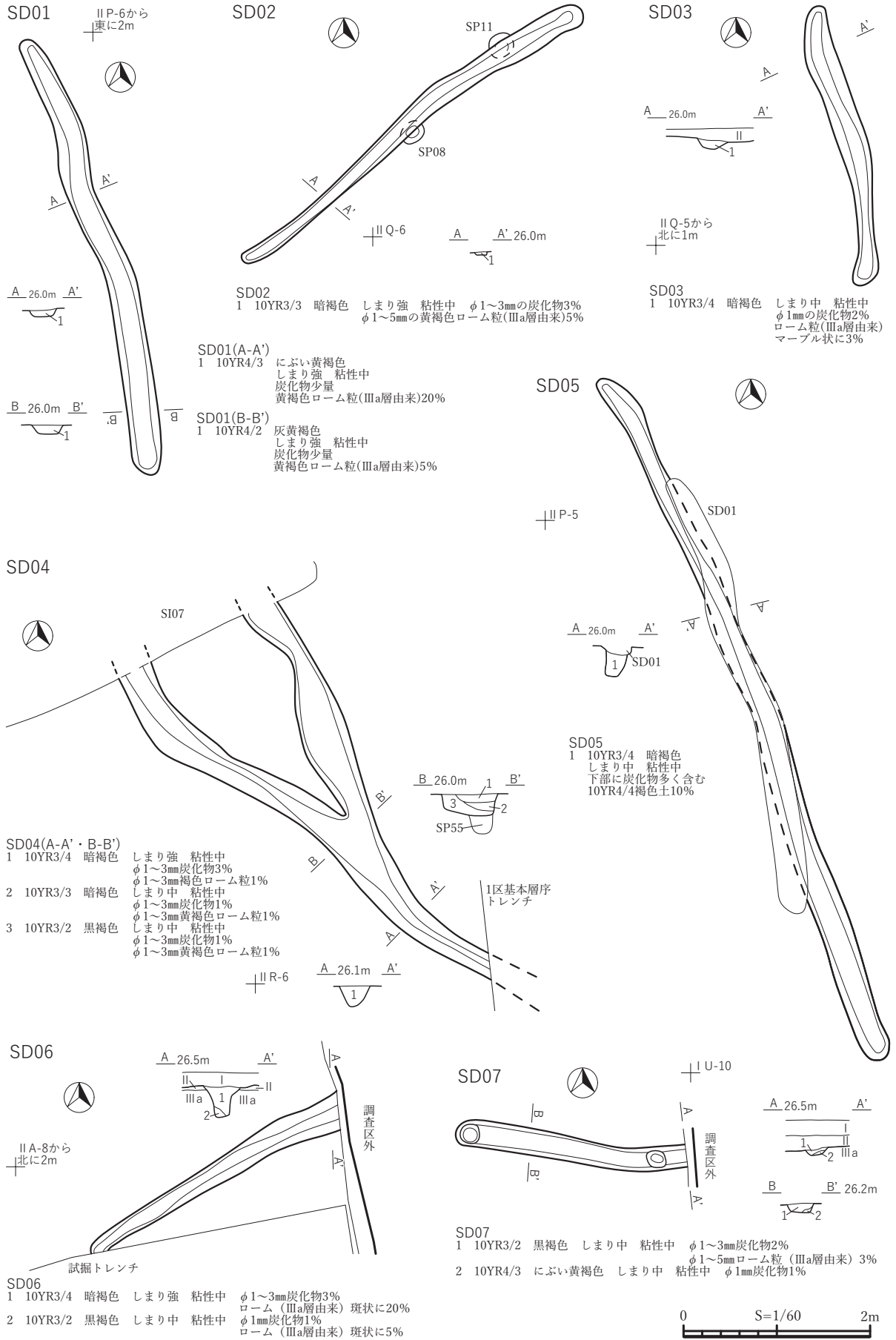
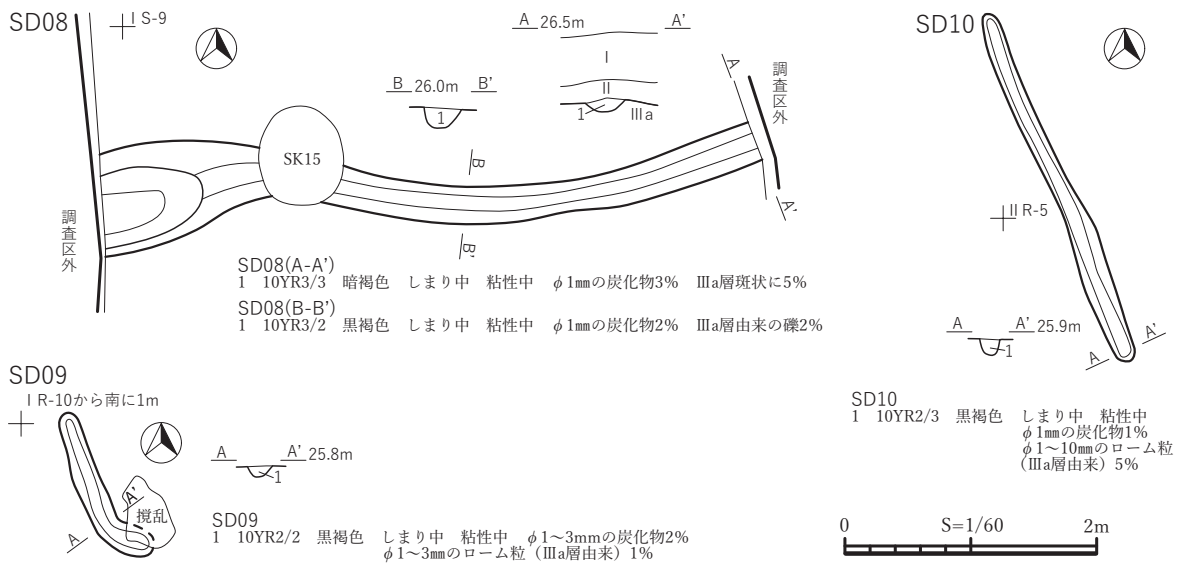


図48 溝跡 1



SX01・SX02

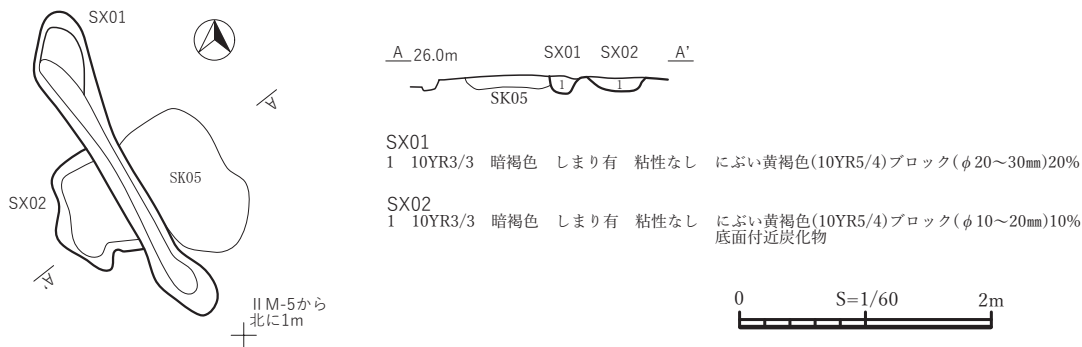


図49 溝跡 2・性格不明遺構

検出面からの深さは10cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。[堆積土] III層由来のロームブロックを含む人為堆積で2層に分層した。[出土遺物]遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第8号溝跡(SD08)(図49)

[位置・確認] 3区のI R-8~10グリッド、標高25.7~25.9mの平坦面に位置し、III層中で確認した。[規模・平面形] 東西方向の直線的な構築で、遺構の両端が調査区外に延びている。平面規模は上端長5.2m、幅30~81cmで、検出面からの深さは16cmである。底面はやや丸みもち、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。第15号土坑と重複し本遺構が古い。[堆積土] III層由来のロームブロックを含む単一土層で自然堆積である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第9号溝跡(SD09)(図49)

[位置・確認] 3区のIQ-10グリッド、標高25.8mの平坦面に位置し、III層中で確認した。[規模・平面形] 南東から北西方向に延び、南側が西方向に湾曲する。平面規模は上端長130cm、幅20cmで、

検出面からの深さは8cmである。底面はやや丸みを持ち、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。[堆積土]Ⅲ層由来のロームブロックを含む単一土層で自然堆積である。[出土遺物]遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土や遺構の形状から平安時代の遺構とみられるが詳細な時期は不明である。

第10号溝跡(SD10)(図49)

[位置・確認] 1区のⅡQ-5、ⅡR-4・5グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。[規模・平面形] 南東から北西方向に直線的に延び、平面規模は上端長290cm、幅23cm、検出面からの深さは13cmである。底面はやや丸みを持ち、壁はゆるやかに開いて立ち上がる。[堆積土] Ⅲ層由来のロームブロックを含む単一土層で自然堆積である。[出土遺物] 土師器が15.1g出土した。細片のため図示しなかった。[小結] 出土遺物から平安時代の遺構である。

5 柱穴(SP)(図6)

本調査で柱穴は51基を確認した。第7号竪穴建物跡の南側や第1号井戸跡の南西側に柱穴のまともを確認した。しかし第7号竪穴建物跡の南側に併設する掘立柱建物を構成する柱穴を除き、今回の調査では掘立柱建物跡や柵列の構成を確認できなかった。規模は長短軸が約30cmのものが多いが、まれに3区のSP27やSP32のように長軸67~111cm、短軸54~56cm、深さ48~66cmのものもある。遺物は土師器が566.2g出土し、SP42の堆積土から土師器甕(図51-14)、SP59から土師器坏、小型甕(図51-15・16)が出土した。

6 性格不明遺構

不規則な掘り込みにより不整形なプランを持つものを性格不明遺構とし、いずれも1区で確認した。

第1号性格不明遺構(SX01)(図49)

[位置・確認] 1区のⅡM-4グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。[規模・平面形] 北端が幅広くなるものの、平面形は北西-南東に軸を持つ楕円形である。平面規模は開口部で長軸268cm、短軸23~46cmである。検出面からの深さは11cm、北端の一部に高まりがあるものの、底面は概ね平坦で、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層でロームブロックが混じる人為堆積である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土から平安時代の遺構とみられる。

第2号性格不明遺構(SX02)(図49)

[位置・確認] 1区のⅡM-4グリッド、標高25.9mの平坦面に位置し、Ⅲ層中で確認した。[規模・平面形] 平面形は不整形である。平面規模は開口部で長軸89cm、短軸(56)cmである。検出面からの深さは10cm、底面は凹凸があり、壁は大きく開いて立ち上がる。[堆積土] 単層でロームブロックが混じる人為堆積である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[小結] 堆積土から平安時代の遺構とみられる。1層底面出土炭化物の放射性炭素年代測定結果は、674~822calAD(2σ)であり、考古学的所見と矛盾しない。(第4章第1節参照)。(藤田)

7 遺構外出土遺物(図52～55、写真37)

遺構外からは、土師器が8,381.7g、須恵器が744.8g、縄文土器が1,973.5g、陶磁器が94.8g、石器が883.1g、鉄製品2点(16.2g)、含鉄椀形鍛冶滓105.6g、椀形鍛冶滓37.7g、鍛冶滓88.4g、炉壁26.3g、羽口破片1点(19.3g)、溶解物12.9gが出土した。

土師器は1区5,489.1g、2区12.8g、3区35.8g、4区2,205g出土しており、1区と4区からの出土が多く、2区、3区の出土量は比較的少ない。坏は体部が緩やかに内湾するもの(図52-16)、口縁端部が外反するもの(図52-22)がある。内面黒色処理を施したものが散見される(図52-17)。甕は短く外反し体部にかけて垂直に延びるものが多くみられ、底部には砂を付着させたものがみられる(図54-3)。すべて非ロクロ製品である。小型甕は口径10cm程度のもものが多くみられる。埴は口縁端部が強く短く外反するもの、体部が直線的なものがある。

須恵器は坏、壺、甕が出土している。1区から4区まで出土する状況は土師器と類似するが、4区から多く出土する。壺の口縁が多く出土し、いずれも隆帯を意識し作出するものである。(工藤)

8 鉄生産関連遺物(図56)

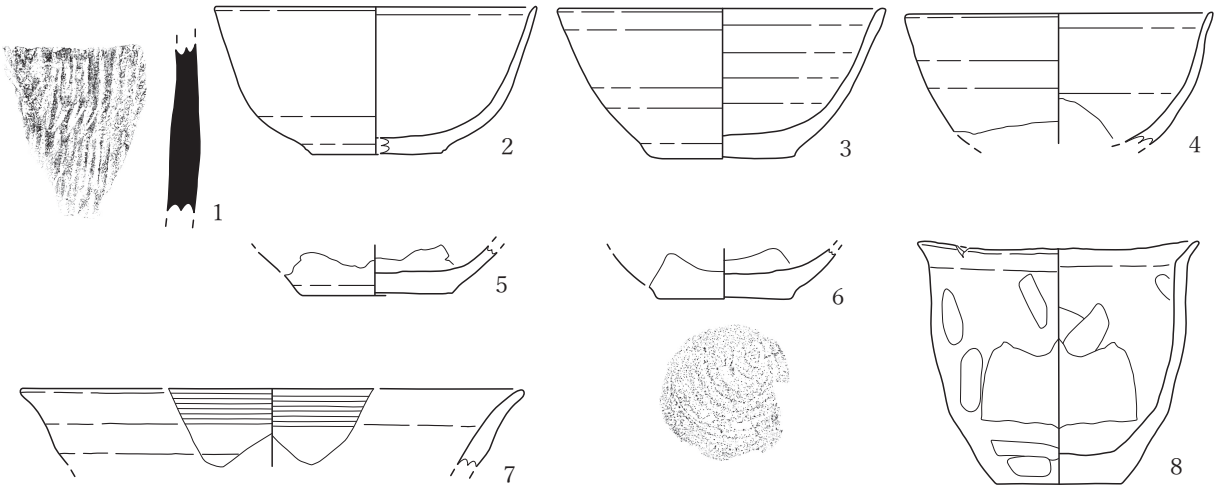
鉄生産関連遺物は、遺構内からも出土しているが鍛冶遺構は検出しておらず、いずれも遺構廃絶後の窪地に捨てられたものと判断されるため、鉄生産関連遺物については本項でまとめて記述する。なお、出土石器のうち、図24-18は金属器の砥石、図23-8、図24-18は鉄滓を小割りするためのハンマーとして用いられた可能性がある。

【鉄生産関連遺物の分類】鉄生産関連遺物として取り上げた遺物は、洗浄後、タジマツール製のピックアップMを用いて磁着確認を行い、KDS社製のMETAL CHECKER MR-50によってメタル度を確認した。メタル度については、鉄関連遺物の分析評価研究グループ編2005『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』を参考とし、M・H・なしの3つに分類した。鉄滓類は、形状やメタル度を元に以下の通り分類した。

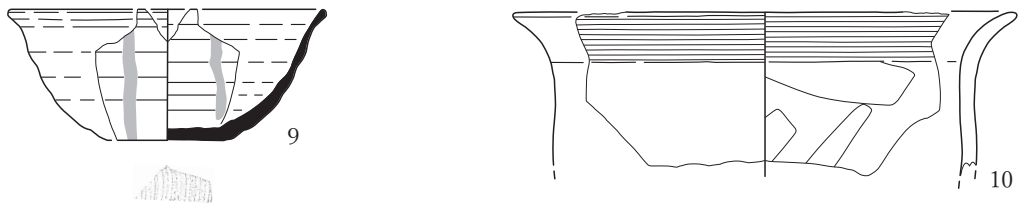
【椀形鍛冶滓】炉内の窪みに沿って椀形に固結した滓。炉底や炉壁の粘土、砂礫が付着したのが見られる。【鍛冶滓】鍛冶工程で生成した滓で、椀形以外の形状を持つものや、小割されて分類が困難なもの。【含鉄椀形鍛冶滓・含鉄鍛冶滓】椀形鍛冶滓・鍛冶滓の内、磁着反応があり、メタル度がM及びHのもの。【羽口】炉内に風を送り込むために炉壁に装着する土製の管。被熱した痕跡が認められる。【炉壁】炉を形成する壁部分の破片。被熱して変色や発泡しているものや、ガラス状に溶解したり滓が付着したりしているものがある。【溶解物】炉壁内面や羽口の強く熱を受けた部分が溶解したものの。

鉄製品：図56-1は、長さ4.8cmが残存している断面円形の棒状鉄製品である。両端とも欠損しているため詳細は不明であるが、紡錘車の軸もしくは鍬の茎の可能性はある。図56-2は、長さ4.7cmが残存しており、幅1.4cmで断面長方形を呈する。一端がわずかにすぼまる形状から、刀子の茎と考えられる。羽口：図56-3は羽口破片である。小破片で内面も欠損しているため、内径や断面形状、装着角度は不明である。表面は被熱によるひび割れ・剥落が激しいが、一部ケズリによる調整の痕跡が確認できる。含鉄椀形鍛冶滓・椀形鍛冶滓：図56-4～13は、椀形鍛冶滓である。このうち図56-4～8は、メタル反応があった含鉄椀形鍛冶滓である。基本的に底面は炉底の形状に沿って湾曲して

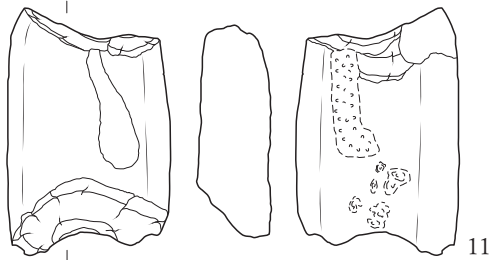
第1号土坑



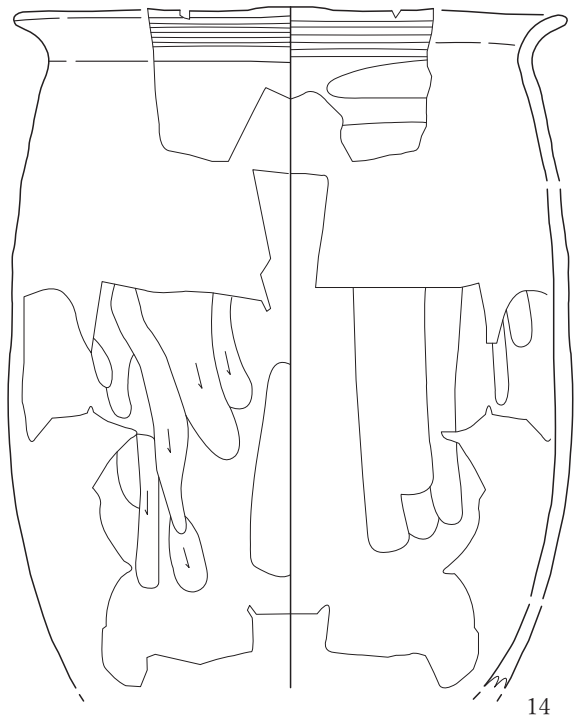
第2号土坑



第4号土坑



第8号土坑



第7号土坑

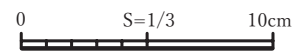
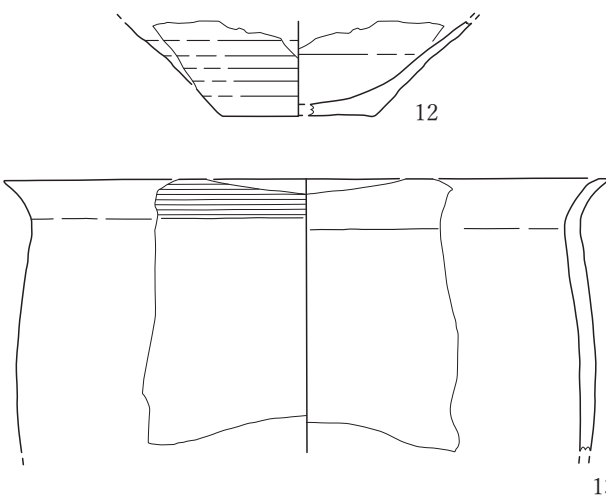
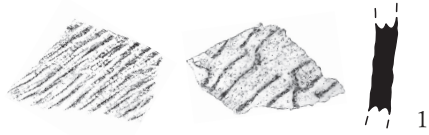
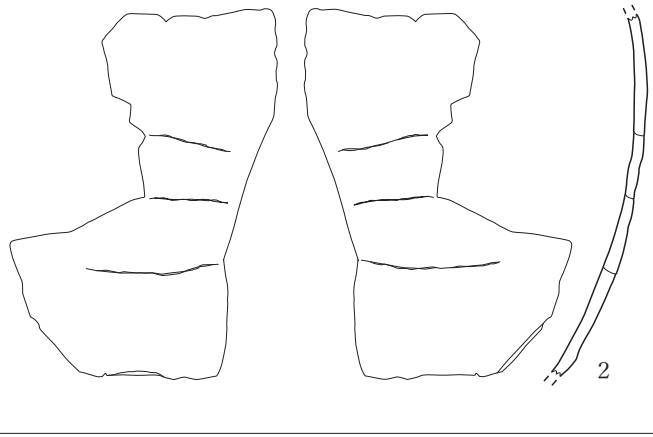
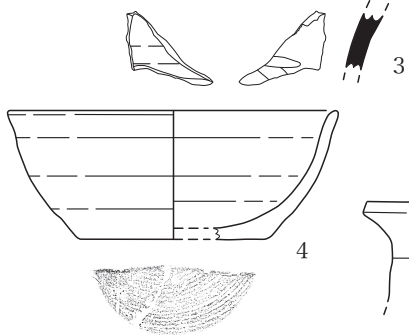


图50 土坑出土遺物 1

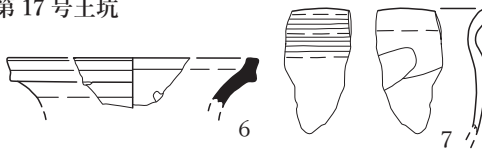
第8号土坑



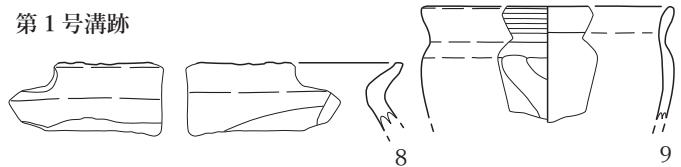
第13号土坑



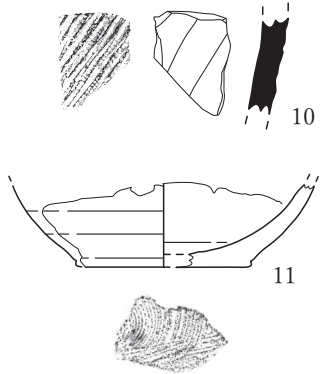
第17号土坑



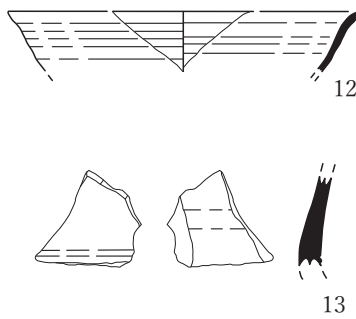
第1号溝跡



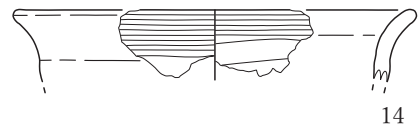
第4号溝跡



第5号溝跡



第42号柱穴



第59号柱穴

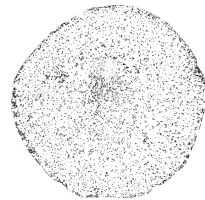
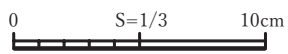
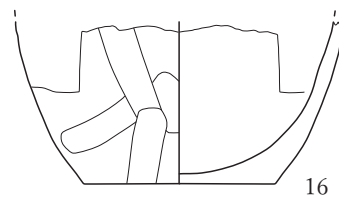
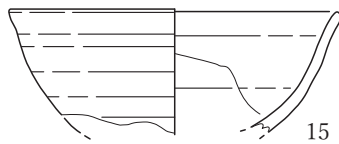


図51 土坑・溝跡・柱穴出土遺物

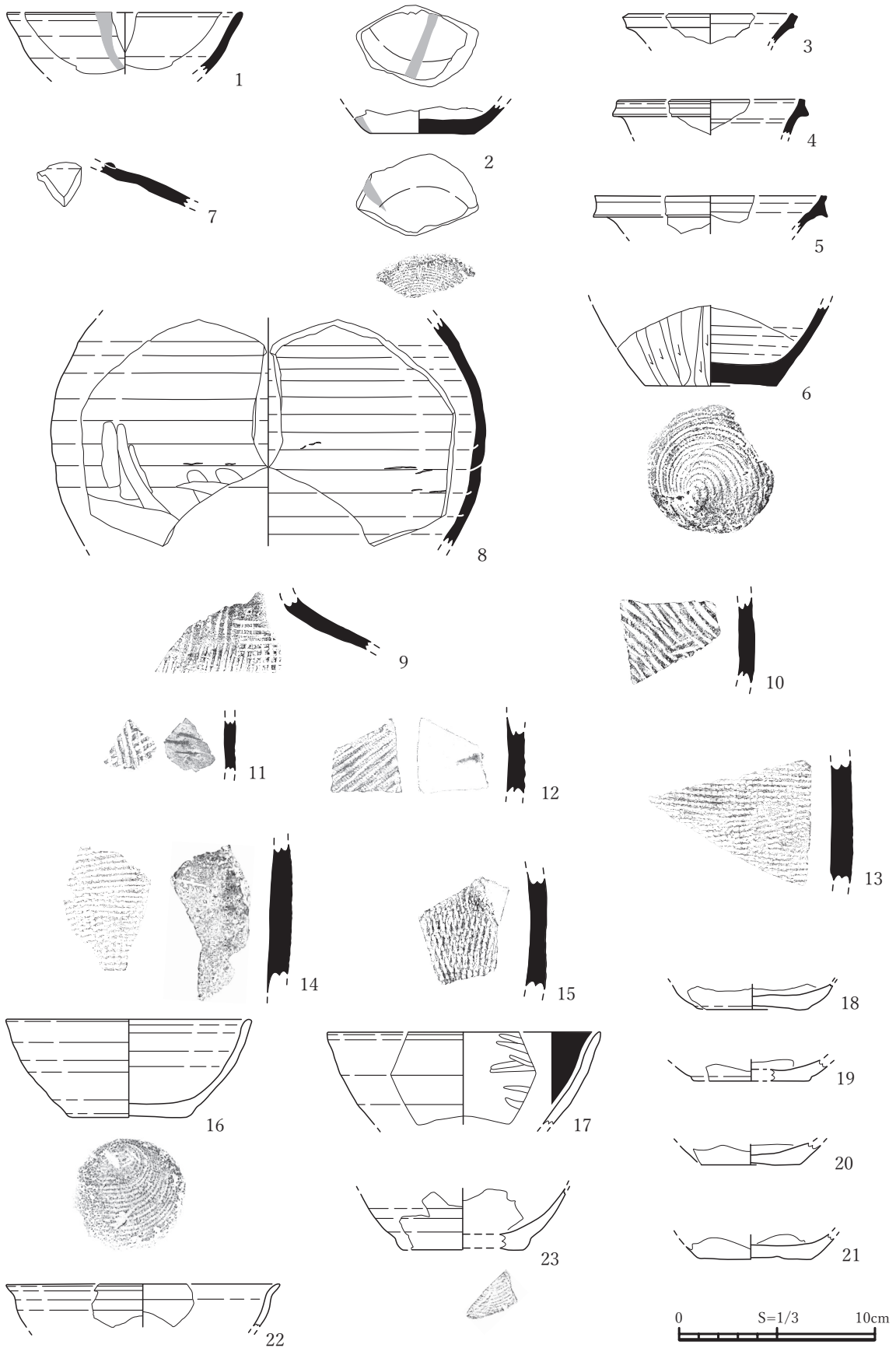


図52 遺構外出土遺物 1

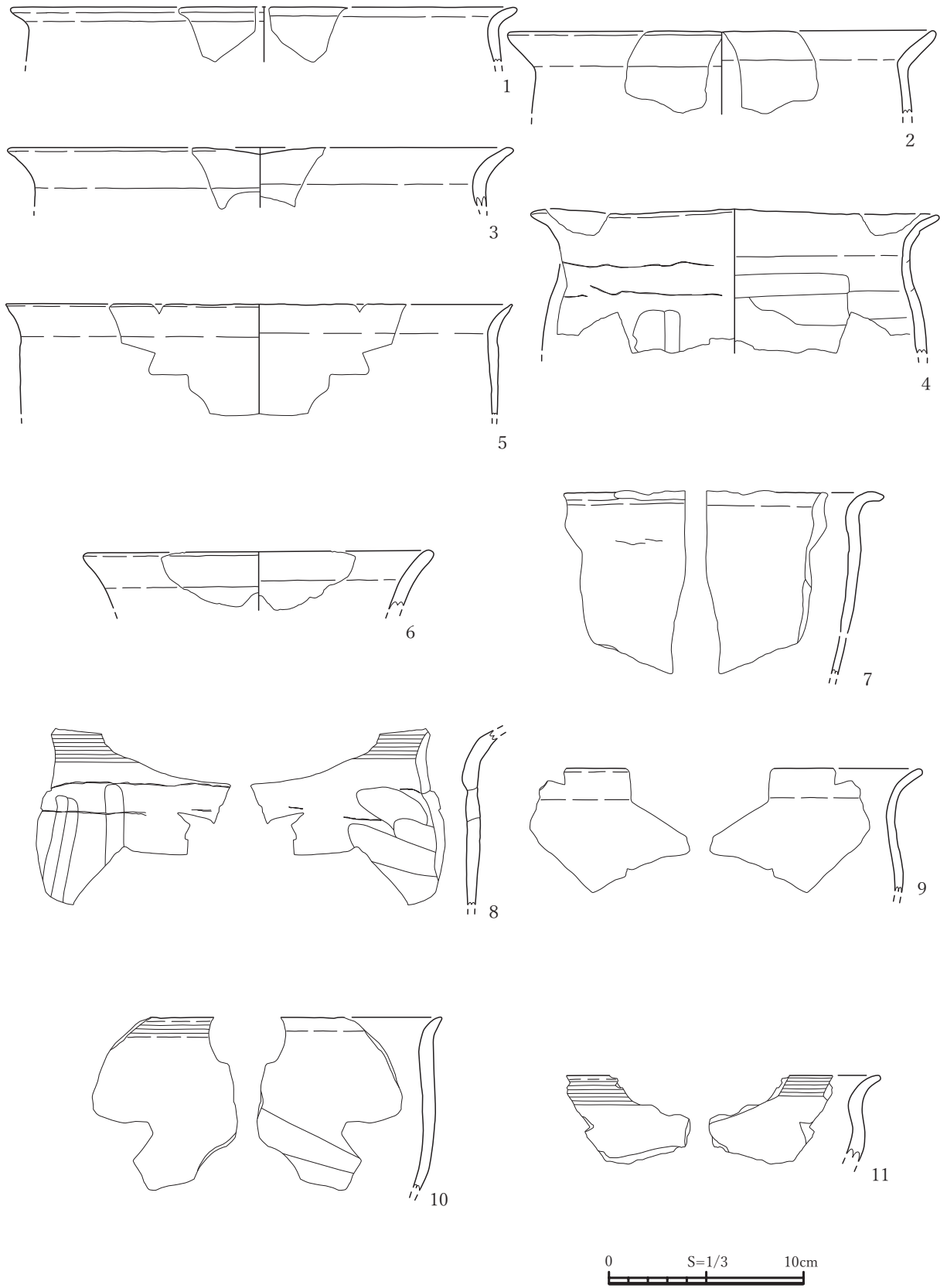


図53 遺構外出土遺物 2

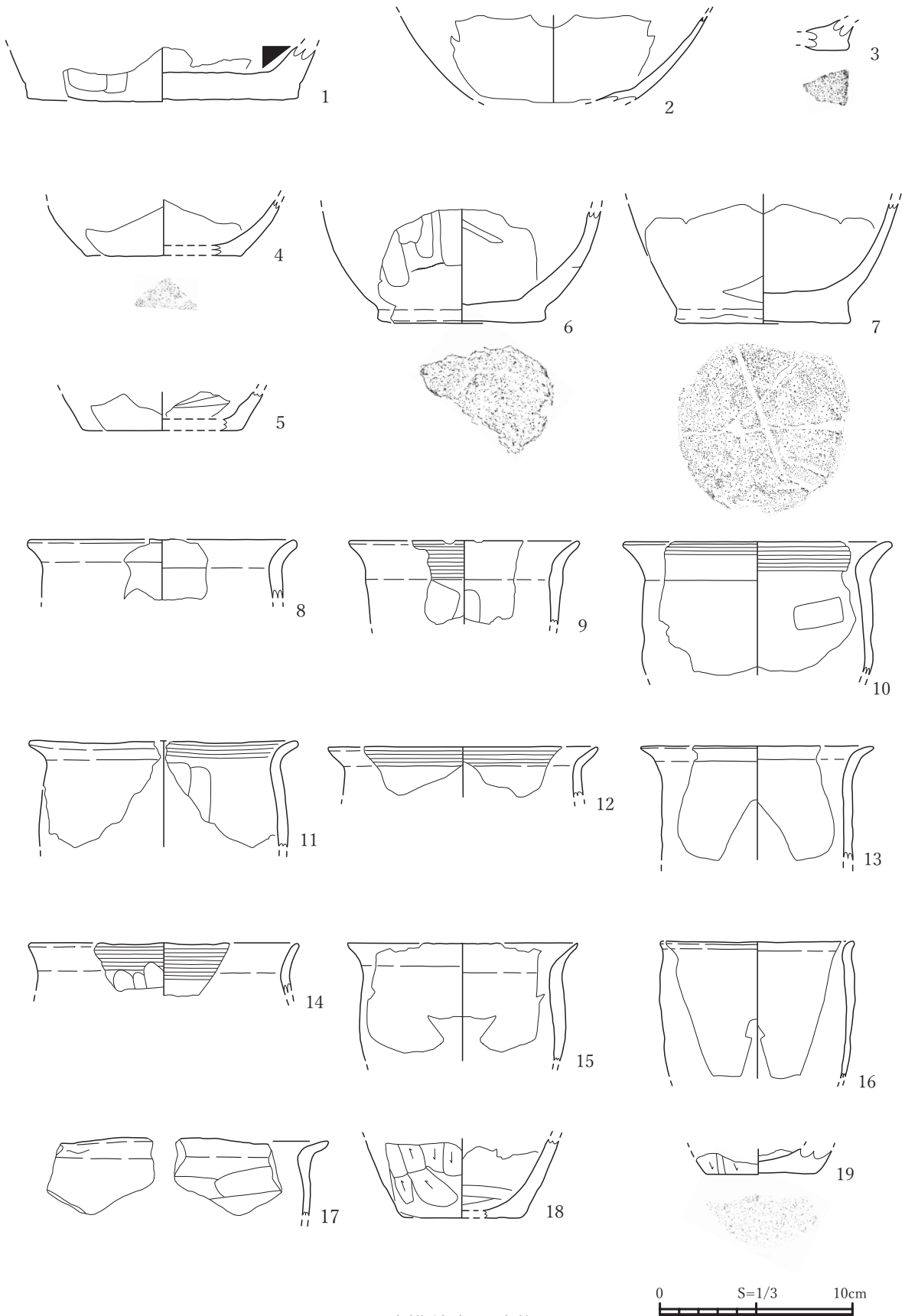


图54 遺構外出土遺物 3

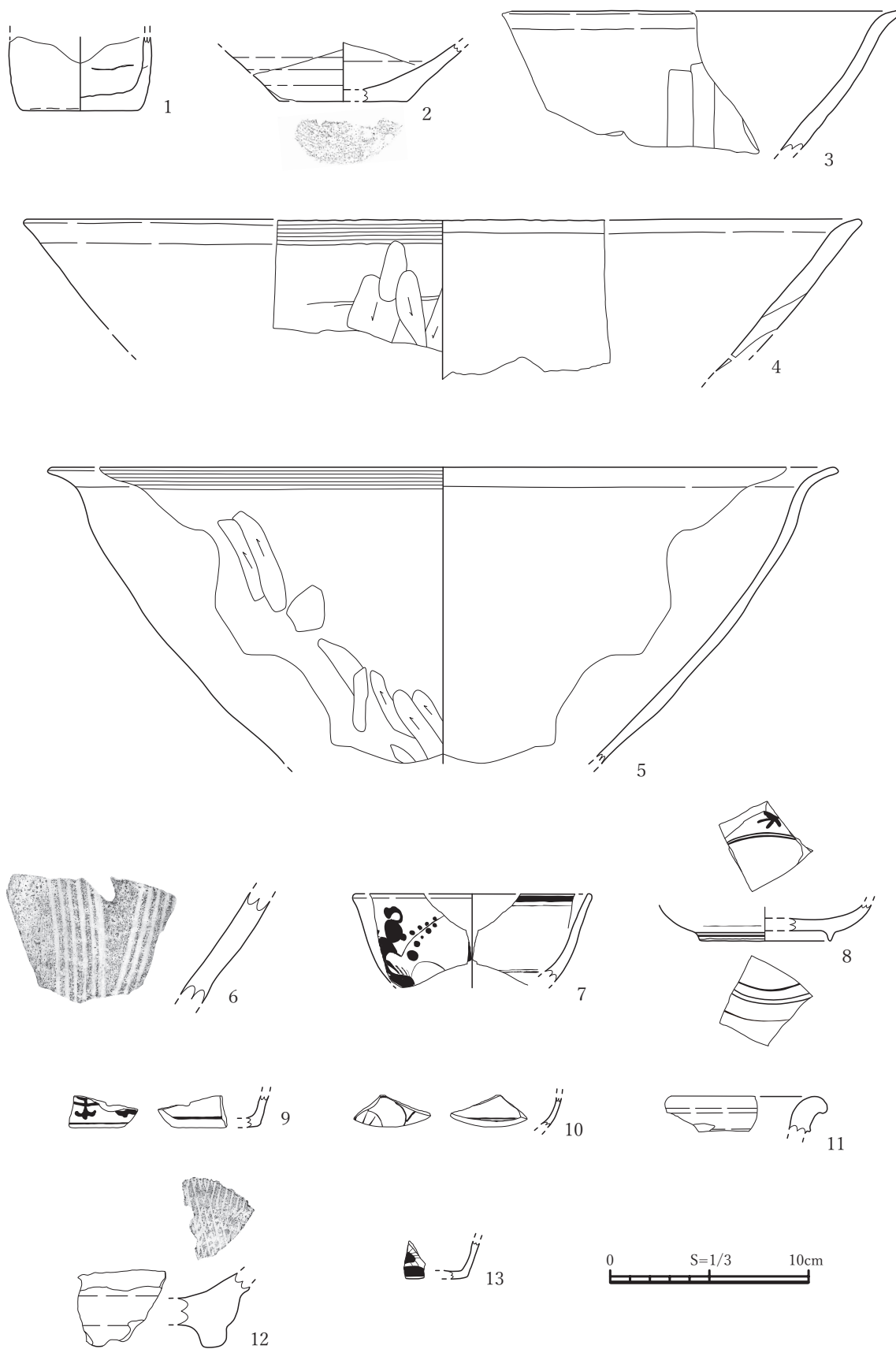


図55 遺構外出土遺物 4

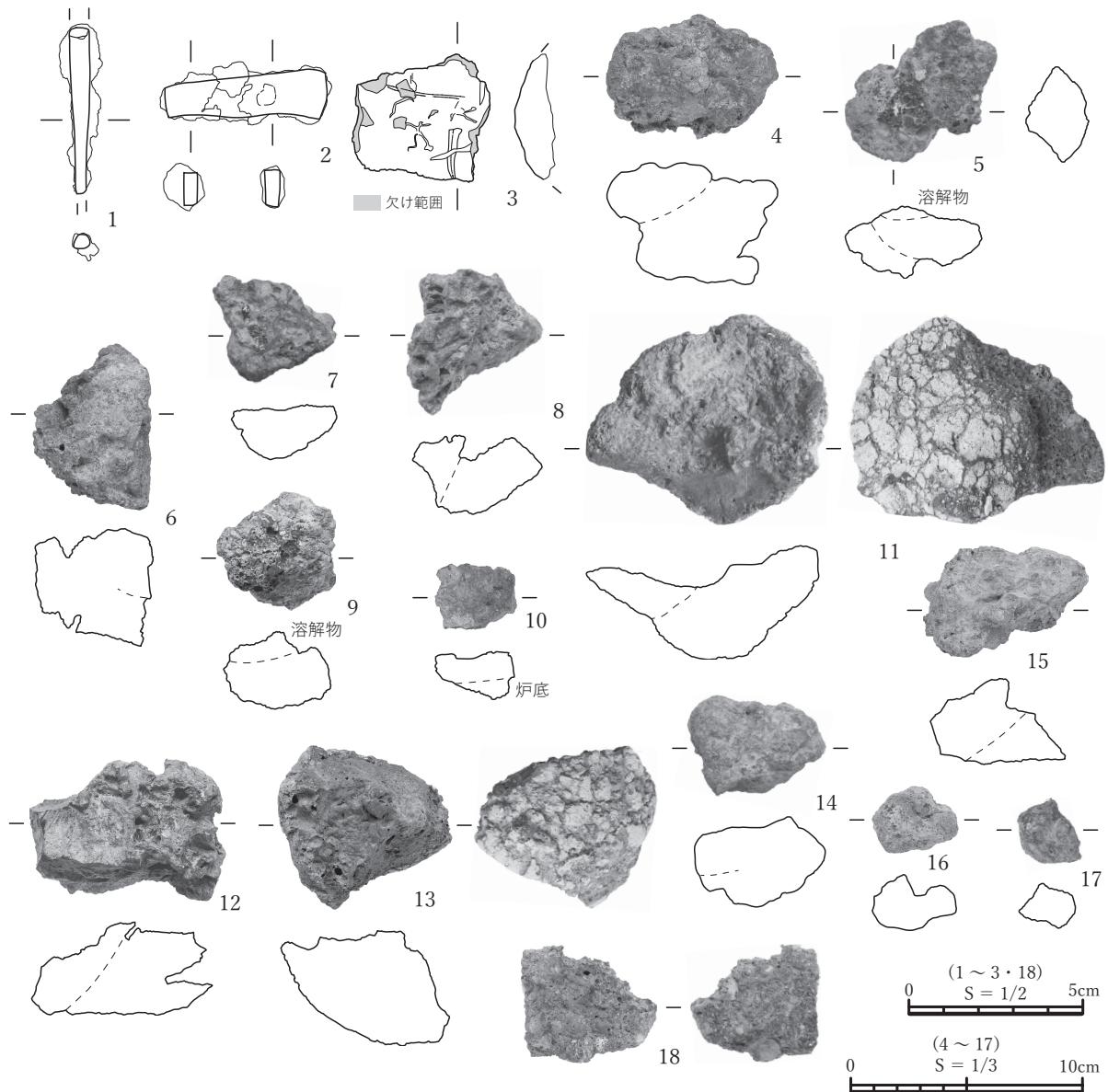


図56 鉄製品・鉄生産関連遺物

おり、炉壁に由来する白色粘土や白色岩片の付着が確認できるほか、木炭痕が観察されるものがある。2回の操業が行われた痕跡を確認できるものが多く、最初に形成された滓をずらして、その上に径数cm程度の小型の椀形滓が溜まっている。上面には羽口が溶けたガラス質の溶解物が付着しているものもある。完形の見られず、すべて打ち割られている。表面や断面は、鈍い灰色やギラギラした光沢をもつものがみられる。図56-11・13は、出土した滓の中では大型のもので、底面には炉に塗っていたと考えられる白色粘土及び白色岩片が鱗状に付着している。また、溜まった滓を寄せる際に炉底を引っ掻いた工具痕と思われる微隆起状の固結が一部に確認できる。含鉄鍛冶滓：図56-14～17は含鉄鍛冶滓である。ほぼ全面を打ち割った小型のものが主体であるが、断面から2回操業を行った痕跡を確認できるものもある。炉壁：図56-18は炉壁片である。被熱により全面発泡しているため、形状は不明である。椀形滓の底部に付着している白色岩片を巻き込んでいることから、炉の破片と思われる。溶解物：白色岩片を巻き込んだ炉壁溶解物や、黒色でガラス質のものがみられるが、いずれも小片のため図示はしていない。(中門)

第4節 中世以降

1 遺構外出土遺物(図55)

中近世の陶磁器は遺構外から8点149.6g出土した。中世の遺物では15世紀から16世紀にかけての瓦質土器が1点出土した。近世の遺物は7点69.6gで、18・19世紀のものである。調査面積に比し出土量が非常に少ない。

瓦質土器は播鉢が1点出土している(図55-6)。胎土の粒子が粗いことから在地産とみられ、15世紀から16世紀にかけての年代のものと考えられる。

陶磁器は、18・19世紀のものがみられるが、総点数は非常に少ない。

近世の銭貨は1区I層から寛永通宝(新寛永)が出土している。

(工藤)